

# 近代都市祭礼における神輿巡行と山車巡行の分離過程

宇野功一

千葉県佐原市新宿の諏訪祭礼を例に

The Separating Process of the Portable Shrine Parade and the Float Parade in an Urban Festival during the Modern Period: on the Case of the Suwa-Festival in Shinguku of Sawara City, Chiba

はじめに

①江戸時代の諏訪祭礼

②近代の諏訪祭礼

むすび

◎附録『幣臺規則並割合帳』

## 【論文要旨】

本稿は、千葉県佐原市新宿地区でおこなわれている諏訪祭礼における神輿巡行と山車巡行の分離過程を詳細に跡付けたものである。そのさい、運営方法の変化と祭礼中の個々の行事の内容の変化を中心に記述をおこなった。

まず、天保年間（一八三〇～一八四三）ごろの諏訪祭礼の運営方法と行事内容を明らかにした。それによって、このころの諏訪祭礼の神輿の還幸においては、新宿各町から出される山車を中心とした練り物行列が神輿行列を先導し、両行列が連続して一つの祭礼行列を構成していたことを確認した。さらに祭礼の監督は関戸町という町が毎年独占的にこれを勤めていたことも確認した。

つぎに、明治九（一八七六）年から昭和三四（一九五九）年にかけて、新宿各町が順番に書き継いだ『幣臺規則並割合帳』という記録を検討した（この記録は「附録」として本稿の末尾に収録）。この記録によると、明治初期に関戸町による祭礼監督の

独占が崩れ、各町がそれぞれ交替で神輿巡行と山車巡行を監督する年番制度が確立された。同じころに練り物のほとんどが山車になったため、練り物行列は山車行列に特化し、それは肥大化しすぎたため巡行に時間がかかりすぎるようになり、神輿行列の先導を勤めづらくなった。

その結果、各町では神輿行列の先導をできるだけ厳格に勤めつつも祭礼期間内に山車巡行を終えるという相矛盾する目標を果たすために、さまざまな努力と工夫を重ねた。近代の諏訪祭礼の変化の多くは、この努力と工夫によって生じたものである。最終的には昭和二五（一九五〇）年の祭礼において従来の山車巡行が廃され、各町の山車は神輿巡行から完全に分離するに至った。都市の特徴や祭礼運営主体の特徴というよりも、むしろ祭礼そのものが孕んでいた物理的・時間的諸要因によって山車巡行が神輿巡行から分離したといえる。

## はじめに

それほど数は多くないが、日本の都市祭礼のなかには神輿巡行と山車巡行が互いに無関係に並行して実施されるものがあり、祭礼の形態が歴史的に変化していくさいの一類型を示している。

山車は練り物の一種であり、神輿に乗っていると信じられている神を歓待するための賑やかしとして付け出されるものであるから、本来は神輿の巡行とまったく無関係に独立して巡行されるものではない。しかしさまざまな要因によって山車巡行が神輿巡行から分離することがある。

このような類型に属する祭礼の代表はいくまでもなく京都の祇園祭である。この祭礼にかんする詳細な研究のなかで、脇田晴子は両巡行の分離過程についても述べている。

南北朝時代の戦乱のなかで、自衛しなければならなかった京都の町人たちは結束力を高めて町ごとに共同体を作り、その結束の象徴として祇園祭に山や鉾を出し始めた。そのため、当初から山鉾巡行には町々の意向が強く働き、神輿の巡行に必ずしも厳格には随行していなかったという。そのうち、応安二(一三六九)年に祇園社の本寺である比叡山延暦寺の神輿振りによって、室町幕府の厚遇する南禅寺の楼門が破却されるという事件があった。このとき祇園社の神輿は穢れてしまったが、その造り替えがなかなか進まず、二十年余りにわたって祇園祭に神輿の出ない時期が続いた。その間、山鉾巡行は神輿巡行なしになされたため、これを受けて神輿巡行の再興後も山鉾はこれとは独立して巡行される形態が確立したという〔脇田一九九九一六九―一七五〕。

両巡行の分離過程を促したものとして、脇田は、第一に町共同体の成立と結束を、第二に神輿巡行の中断を挙げている。しかしいうまでもな

く、ほかの都市祭礼において両巡行に分離が生じた場合、その理由はこれにかぎられるわけではあるまい。たしかに京都の祇園祭がこのような歴史的变化の類型の初めであることは間違いない。しかしこれとはまったく異なる要因によっても、両巡行の分離という、外見的には類似する形態に祭礼が変容してしまうことはある。その分離過程を具体的にみていくことによって、当該祭礼のいくつかの面を明確にできるであろう。

このような見通しのもとで、本稿では、千葉県佐原市新宿地区でおこなわれている諏訪祭礼を対象に、両巡行の分離過程の一例を示す。この祭礼は天保年間(一八三〇―一八四三)以降の史料が豊富で、昭和二五(一九五〇)年に最終的な局面を迎えた分離過程の詳細を明らかにすることができ、分析にさいしては、両巡行の分離以前のこの祭礼の形態と時間的側面(祭礼期間)に着目する。

千葉県佐原市の中心街は明治時代に「佐原イ」と総称されるようになった区域で、利根川に流入する小野川の下流を挟んで東西約二・五キロにわたって広がっている。この区域が近世の下総国香取郡佐原村にほぼ相当する。近世初頭以来、小野川の東岸部を本宿、西岸部を新宿と称している。

本宿の総鎮守は八坂神社(旧牛頭天王社)、新宿の総鎮守は諏訪神社(旧諏訪明神社)である。八坂神社では夏祭りとして祇園祭礼がおこなわれている。一方、諏訪神社では秋祭りとして諏訪祭礼がおこなわれている。両祭礼ではともに神輿行列が氏子圏を巡行するほか、江戸中期以来、多数の山車が出されている。

今日の佐原では山車は普通「屋台」と呼ばれ、ときに「幣台」や「山車」とも呼ばれる<sup>(1)</sup>。両祭礼とも氏子町ごとに四輪で二層構造の山車が一台出され、祇園祭礼では一〇台、諏訪祭礼では一四台を数える<sup>(2)</sup>。

山車は上層部(露台)に人形などの巨大な飾り物を載せ、下層部(囃子台)に「下座」(または芸座)と呼ばれる一〇人前後の囃子方を乗せ、

引き手によって綱で引かれて運行される。ときおり山車を止め、そのまゝで多数の引き手が下座の囃子に合わせて踊る。両祭礼とも、山車の豪華さとその数の多さ、囃子の美しさによって関東屈指の祭礼とされている。

右でみた現代の山車の形態が幕末にはすでに完成されていたことは多くの史料で確かめられる。たとえば、たまたま露台の飾り物にかんする描写こそ抜け落ちているが、安政二（一八五五）年の自序のある『利根川図志』には次のように記されている〔赤松 一九三八 三二三〕。佐原村の

両祭礼至つて賑はしく、何れも二重三重の屋台十四五輛づゝ花をかざり、金銀をちりばめ錦繡の幕を懸け、囃子もの、拍子いにとぎやかに、町々をひきまはる。

二層構造（二重三重とある）の山車を豪華に飾り立て、その山車は囃子方を伴っているという。

さて、諏訪祭礼では、おそらく享保年間（一七一六―一七三五）にはじめて笠鉾や山車などから成る練り物が町ごとに出され、八月二七日になされる諏訪神社の神輿の巡行（還幸にあたる）にさいして、行列を作つてこれを先導するようになった。練り物行列と神輿行列が連続する形で一つの長大な祭礼行列を作っていたのである。

諏訪祭礼のもともとの形態はこのようなものであったが、しかし江戸後期には練り物の中心が笠鉾から山車へと移っていった。明治初期にはさらに多くの町が山車を常備するに至り、練り物行列は実質的に山車行列になった。物理的な変化が進んだわけだが、その結果、練り物行列は肥大化しすぎて一日では所定の還幸路を廻りきれなくなり、近代の諏訪祭礼では祭礼期間を超える「日延べ」が頻発した。そして昭和二五（一

九五〇）年に至つて、ついに山車行列は神輿行列の還幸の先導役をやめ、神輿行列の巡行から完全に分離した。その結果、山車は原則的に、町ごとに自由に引き廻されることになった。

諏訪祭礼における二つの巡行の分離は、都市の特徴や祭礼運営主体の特徴によって生じたというよりはむしろ、祭礼そのものが孕んでいた諸要因によって生じたとみなしたほうが適當である。これはもちろん、南北朝時代の京都の祇園祭とはまったく異なる分離のありようである。

右のように結論だけを簡潔に書いてしまふときわめて単純な話なのだが、注意すべきは新宿の人々が必ずしも積極的に山車巡行を神輿巡行から分離させたわけではない、ということである。実際には、彼らは神輿行列の先導という山車巡行の伝統的な役割はできるだけきちんと守りつつも山車巡行の日延べは避ける、という相矛盾する目標を両立させるために、百年近くの長きにわたつて運営方法や個々の行事内容にさまざまな工夫を凝らして諏訪祭礼を実施していたのである。この点は強調しておく必要がある。

ところで、佐原の両祭礼についてはこれまで参照するに足る文献がほとんどなかったが、近年『佐原山車祭調査報告書』が刊行され〔佐原市教育委員会編 二〇〇一〕、ようやく研究の下地が整つてきた。これには主要な近世史料（一部は明治初期の史料）、現状調査を中心とした五編の報告、それに多くの囃子の楽譜が収録されている。史料編は今後の両祭礼の歴史的研究の基礎となるもので、すでにこれにもとづく簡便な通史を含む書物も刊行されている〔清宮 二〇〇三〕。本稿でも、この史料編を大いに利用する。

## ①江戸時代の諏訪祭礼

江戸時代の佐原村についての詳細は本誌所収の筆者の別稿「近世在郷

町における祭礼の成立と展開―下総国佐原村本宿の豪家・村組・町―」に譲り、ここでは必要最小限のこのみを記す。

佐原村は江戸時代のだいたいの期間を通じて旗本領であり、また利根川舟運によって物資の集散の活発な在郷町として発展した。近世初頭以来、佐原村には豪家を中心とした「組」と呼ばれる複数の社会的・地域的まとまりがあった。本宿には本宿組と浜宿組と新井宿組（仁井宿組）が、新宿には上宿組と下宿組があった。各組には名主一名と組頭数名がおり、彼らは村役人または組役人と呼ばれていた。都市化の進展に伴い、おそらく江戸中期に入るところには、各組内にはいくつもの町が成立していた。

組を率いた豪家としては、本宿組では伊能三郎右衛門家、浜宿組では永沢次郎右衛門家、新井宿組では奥主久左衛門家、上宿組では林七右衛門家、下宿組では伊能茂左衛門家が挙げられる。このうち奥主久左衛門家についてははっきりしないが、ほかの各家の当主は享保期（一七一六～一七三五）ごろまでは原則的に各組の名主を世襲しており、以後もたびたび名主を勤めた。また、下宿組では伊能茂左衛門の分家とされる伊能権之丞家も有力で、下宿組や浜宿組の名主を勤めたこともあった。

さて、この節では江戸中期と後期の諏訪祭礼について述べるわけだが、おもに利用するのは江戸後期に書かれた次の三つの記録である。

まず、伊能権之丞家八代目の景俊（一八〇六？）が残した諏訪神社と諏訪祭礼の歴史にかんする二つの記録である。すなわち天保一〇（一八三九）年六月に書かれた「鎮守諏訪大明神由来二付所々旧記之写並代々申伝祭事取極其外有形書証」（以下、「天保」という）と、嘉永三（一八五〇）年一〇月に書かれた「鎮守諏訪大明神由来所々旧記祭事取極議定代々仕来申伝有形並対村方謂共証相之」（以下、「嘉永」という）である。いずれも、自家に伝わった古記録や口頭伝承などを編纂したものである。両者の内容はほとんど同じであるが、後者には、前者の補足とみられる

記述もある。

もう一つは「御せんくうきうれいの覚」と仮題された記録（以下、「御遷宮」という）である。これは、文化七（一八一〇）年ごろに伊能三郎右衛門家一代目の景敬（一七六六～一八一三）によって書かれたものと思われる<sup>3</sup>。これは八坂神社と祇園祭礼の歴史にかんする記録であるが、諏訪祭礼の歴史についても若干触れられている。

以上三点とも『佐原山車祭調査報告書』に収録されている「佐原市教育委員会編 二〇〇一。収録頁は順に、一一二～一一九、一一九～一三〇、一六〇～一六八」。いずれも短い記録なので、以下、引用にさいしては略称のみを記し、頁数は省くことにする。また、いずれも引用にさいしては適宜読点と並列点を改変する。

ところで、祇園祭礼とは対照的に江戸中期の諏訪祭礼については一次史料がほとんどない。したがってこの時期の諏訪祭礼については、次善の策として右三点の編纂物を利用せざるをえない。断言できることは少ないが、慎重にその記述内容を吟味していくことにする。

一方、「天保」と「嘉永」には、執筆当時の諏訪祭礼の様相についても詳しく記されており、江戸後期の諏訪祭礼については信頼性の高い情報が多く得られる。

なお江戸後期の諏訪祭礼関係の史料では、今日と同じく山車を「屋台」と称していることが多い。これに倣って本節では、原則的に山車を「屋台」と表記する。

## （一） 諏訪神社の歴史

諏訪祭礼について述べるに先立って、この項では諏訪神社の歴史について簡単にまとめておく。まず注意すべきは、「諏訪」という地名も「諏訪明神」という神社名も中世の佐原やその周辺部の史料にはみえないということである。諏訪神社は、おそらく中世にはまだ存在していなかつ

たと思われる。

「天保」には、諏訪台（諏訪山ともいう）の中腹にあった諏訪神社の「社地ハ伊能茂左衛門草分山之内致寄附候由、申伝候」とあるが、創建の由来については不詳としている。さらに「当天保中」に諏訪神社にあった一番古い書付は寛文年間（二六六一―一六七二）に奉納された石灯籠一對であるという。以上と同様の記述は「嘉永」にもある。これにしたがえば、寛文年間までは諏訪神社は創建されていたことになる。そして諏訪神社の創建を受けてその所在の台地を諏訪台や諏訪山と称するようになったのであろう。

ちなみに両記録には、諏訪神社別当の莊嚴寺は慶長年間（一五九六―一六一四）から諏訪山莊嚴寺（莊嚴寺）と称したともあるが、寺伝によれば同寺の創建は寛永一八（一六四一）年四月である（佐原市役所編一九六六・九九〇）。

「天保」と「嘉永」にはまた、権之丞家に所蔵されている「御書」が写されている。これは、慶長一三（一六〇八）年から元文四（一七三九）年まで下宿組と浜宿組の領主であった旗本興津氏の家臣から当時の権之丞に宛てられた元禄六（一六九三）年二月三付の書状である（書状そのものは無年号）。

このころ興津氏の若殿勘七が家督を継いだ、そのさい権之丞が祝儀として馬一頭を贈った。この書状はそれに関する礼状である。書状には右の事情などが記されたあと、次の記述がある。「莊嚴寺御寄進之儀、毎々御手前依頼、此度御寄進状被下之候、則莊嚴寺江右之趣可下申渡候」。権之丞は以前から興津氏にたいして莊嚴寺への寄進を求めており、それに応えるというのである。

寄進はすぐになされた。その寄進状の写しが「天保」に収められている。これを見ると、実際には莊嚴寺への寄進というより、その監督下にあった諏訪神社への寄進となっている。権之丞が求めているのもそれ

だったのであろう。なお原本は享和二（一八〇二）年に焼失したと註記されている。文面は以下のとおり。

#### 寄進状

別当

諏訪大明神 諏訪山莊嚴寺

下総国香取郡大戸庄佐原村新宿組之内中田彦反歩

右今度令寄附訖、弥守被旨拙武運長久之精誠可守祭祀状、如件

元禄六年

興津内記

癸酉十二月

書判

一方「嘉永」のほうには、同年同月付で莊嚴寺空恵御坊に宛てられた、文面は異なるが内容は同一の別の寄進状の写しが収められており、その差出人は「勘七」となっている。こちらの原本は下宿組に現存していると註記されている。最初に勘七の名で寄進状を送ったあと、興津内記の名で改めて寄進状を送ったということだろうか。

このときの権之丞とは、景俊が両記録で説明しているように、时期的にみて二代目久胤（一六四四―一七〇〇）のことであろう。

やや曖昧さはあるものの、御書と寄進状の対応からみて元禄六（一六九三）年の興津氏の寄進は事実であろう。この寄進の意味するところをしばらく考えてみたい。

景俊は「御遷宮」に、慶長一三（一六〇八）年六月一二日付の「覚」を書き写している。原本は浜宿組の永沢次郎右衛門方に保管されていると説明されている。これは、興津内記が「さ原」の「七郎右衛門」と「二郎右衛門」（江戸初期の永沢家の当主か）に宛てたもので、「平田」（比定地不明）の「田彦反歩」を「天王様へ」寄進する、などとある。興津氏は佐原村に知行を得るとすぐに、浜宿組内にあった八坂神社に寄進を

したことになる。八坂神社は「神天王」として応安五（一三七二）年の文書「千葉縣史編纂審議會編 一九五七 二二六」に初見する古い神社で、興津氏としては敬意を表したことになる。

ところが村内のもう一つの知行地である下宿組内の諏訪神社にたいしては、興津氏は長い間寄進をしなかった。慶長一三（一六〇八）年にはまだ諏訪神社は創建されていなかったと思われるが、創建後もしばらく領主が寄進をするほどの神社ではなかったらしい。そこで下宿組の有力者であった久胤はたびたび寄進を求め、元禄六（一六九三）年に至つてようやく八坂神社と同じく一反歩の田を寄進されたのである。ここに、諏訪神社は新宿の総鎮守としての地位を固めたといえる。

その後、元禄一四（一七〇一）年に至り、諏訪神社の上にあった権之丞家所持の畑を同家の三代目景胤（？）一七二二）が同社に寄進したうえで遷宮がなされたと、景俊は述べている。「天保」と「嘉永」には、このとき景胤が作成した出金書類の写し「旧記出金之写」も載せられている。それによるとこの年の遷宮は二月六日になされ、神幣一本の代金一両、奉賀金五両、漆代二歩二朱は景胤が単独で負担している。そして「宮家根代」という費目の一〇両二歩のうち、半分は景胤が、もう半分は伊能茂左衛門が負担している。景胤の負担額の合計は一一両三歩二朱となる。

さらにその後、享保一八（一七三三）年にも遷宮がなされたという。この年の棟札があつて諏訪神社に伝来し、「天保」と「嘉永」に書き写されている。両記録で表面の語句に若干相違があるのが不審だが、本願主としてはともに伊能権之丞智胤（四代目。法名心殿居士。？）一七四九）の名があり、裏面には、冒頭に「五月十四日 新始メ」、末尾に「十一月廿七日 遷宮」と記されている。

以上から、茂左衛門家と権之丞家が諏訪神社の経営に深くかかわっていたことが知られる。前者はその創建にかかわったと伝えられ、後者は

その発展に努めた。次にみるとおり、権之丞家が諏訪祭礼において重要な役割を果たしたのはこの延長によるものであろう。

## （二）江戸中期の諏訪祭礼

江戸中期の諏訪祭礼について、「御遷宮」には次のようにある。

一 六月十三日、前々者新宿二而祇園と申唱、家毎致索麵客を呼祝候処、享保之末下宿名主権之丞発端二而、上宿名主七左衛門と申合、諏訪明神を山之中央より遷、山上江致造営、其上七月廿七日御祭日を八月へ移シ、新二祭礼相企候二付、町々より賑々鋪出し物出来申候間、其砌より相止申候

但、（中略）関戸村（中略）右古来之場所右新宿諏訪明神新二祭礼相企候砌も巷番二相定候事

以前は、本宿の祇園祭礼が終わった翌日の六月一三日に新宿では家ごとに祇園の祝事として客を呼んで索麵を振る舞っていたという。ところが享保の末に下宿組名主伊能権之丞（智胤）の発意で、上宿組名主七左衛門（林氏）と申し合わせたうえで、諏訪神社を諏訪台の中腹から頂上に遷して建て替えた（現在地に同じ）。さらにはこれに合わせ、七月二七日が同社の祭日であったところを八月へ移して「新二祭礼相企」で、これを受けて町々より賑々しく出し物が出された。そのころから新宿の祇園の祝事はなくなったという。また、下宿組に属する関戸町は古くから開けた場所（中世には関戸村といい、佐原村には含まれていなかった）だったので、新たに開始された祭礼では町々の出し物の先頭に位置するように定められたという。

享保の末ということで、この遷宮・造営は「天保」と「嘉永」の伝えらる享保一八（一七三三）年になされたものを指している。それ以前から

祭日があつて、七月二七日だつたという。福原敏男がいうように、この祭日は信州諏訪大社の御射山祭り<sup>(5)</sup>に合わせたものであらう「福原 二〇〇一・二六」。しかし新宿諏訪神社ではどのような神事がなされていたのかは書かれていない。

智胤がその祭日を八月に移したうえで新たに祭礼を企てたというのは<sup>(6)</sup>、神事にたいする賑やかし、すなわち付祭りを導入しようとしたということである。その結果、新宿の付祭りでは町単位で出し物が出されるようになった。

次に「天保」と「嘉永」をみてみよう。前述のとおり、両記録では享保一八（一七三三）年の諏訪神社の遷宮・造営について詳しい説明がなされている。しかし「御遷宮」と異なり、この年から付祭りが始まつたとしているわけではなく、享保六（一七二一）から始まつたとしている。ここでは「天保」中の「代々申伝之事」と題された記事から引用する。文中の「官札」は「巻軸」、すなわち「最終番」の意である。

一御神輿神行之儀者いつ之頃より初り式哉申伝も無之候得共、家臺・祢り物等祭礼取極之儀ハ、一体信州諏訪御祭礼七月廿七日之由、然ル所心殿居士以存寄八月廿七日ニ相定、享保六丑年初而祭礼取極之議定者、社内下宿組与申権之丞上納地ニ付、関戸郷壹番（中略）乍去下宿組ニ而永代触頭壹番相定候儀ニ付、上宿組名主林七左衛門熟談之上、式番上宿・三番上中宿・四番上新町、上宿組三町、并五番別当本二付横宿、中宿・下新町、官札<sup>(7)</sup>か下宿町之取極御座候、然ル上ハ以来分町出来候とも下宿官札<sup>(7)</sup>之議定、扱又下宿町銘々祢り物者廻家臺相定、我家者鎮守御由緒二元附、鏑附神幣・天幕・七五三縄、式人持廻家臺、表札者本願主伊能権之丞平智胤相印、壹番議定、官札<sup>(7)</sup>か由緒之家筋ニ付、伊能茂左衛門相定候事

但

上宿町内式番之取極ニ御座候所、年々祭礼之砌、関戸町与若者共何と無争事出来候ニ付、心殿居士致差抑、上新町おとなしき町内柄故、家臺鏑物ニ諏訪大明神与申御祓鏑附させ（中略）上新町式番ニ相成候得共、万端相談之儀者上宿町先立申候事、其以来ハ古例ニ相成申候事（後略）

これを整理してみる。

①冒頭で、屋台（家臺）を含んだ練り物（祢り物）の出現以前から諏訪神社では御射山祭りの神幸（神行）がなされていたことが述べられている。これは、付祭りの出現以前から神事が存在していたことを窺わせる「御遷宮」の記述に対応する。社内での神事だけでなく、神幸も存在していたという話である。しかしこの神幸がいつごろから始まつたのかは不明とされている。

②屋台を含んだ練り物などにかんする祭礼運営の取り決めについてはまず、もともと祭日が諏訪大社の御射山祭りと同じ七月二七日であつたところ、智胤の判断で八月二七日に改められた。

③この取り決めは享保六（一七二一）年にはじめてなされたもので、このとき、神輿行列に従う町々の練り物の並び順も定められた。

④その並び順は一番が下宿組の関戸町で、これは同町が権之丞家の年貢の上納地だつたからである。さらに同町は「永代触頭」として祭礼を監督することにもなつた。そのため智胤は上宿組名主林七左衛門と熟談し、二・三・四番はいずれも上宿組所属の上宿町・上中宿・上新町とした。その後は再び下宿組の町々となる。すなわち五番は諏訪神社別当の莊嚴寺があるという理由で横宿に、六番は中宿、七番は下新町、八番は下宿町となつた。

⑤また、これ以降、分町があつた場合も下宿町が最終番を勤めることに変わりはなくということもこのとき決まった。新しい町は順次下宿町の直前に入れていくという意味である。新宿の分町は江戸後期に盛んになるもので、それにかんする規定が早くも享保六（一七二一）年になされていたとするのはおそらく誤伝で、これは実はもつとあとの時期に決められた規定であろう。

⑥並び順の決定を受け、下宿町では練り物を迦家臺（か昇き屋台やたい）と定めた。「銘々」とあるので、同町からは複数の迦家臺が出されたことがわかる。権之丞家では、飾り付きの神幣・天幕・注連縄を取り付けて表札には「本願主伊能権之丞平智胤」と記した二人持ちの迦家臺を用意した。これは町順とは無関係に、練り物行列全体の先頭とすることが定められた。また、伊能茂左衛門家の迦家臺は練り物行列全体の最後尾とすることも定められた。

迦家臺であるが、これは笠鉾のことである。「伊能豊秋日記」<sup>⑧</sup>の宝暦六（一七五六）年八月二七日条に諏訪祭礼への言及があり、権之丞家と茂左衛門家が「かさぼく」の先陣・後陣を争ったため、祭礼の開始が遅れたそうだが、という伝聞が書かれているからである。「佐原市教育委員会編 二〇〇一 一四三」。これはおそらく、茂左衛門家が、自家の笠鉾が最後尾に位置することを不服として争うに至ったものであろう。

⑦後略箇所には、享保六（一七二一）年から同一八（一七三三）年までは必ずしも各町の練り物は固定されておらず、関戸町では「家臺江石階鋸附、引候事も有之由、申伝候」とある。その後、同町の屋台の飾り物は猿田彦命に固定されたともある。

屋台は引き物の一種であり、笠鉾よりはるかに大掛かりな作り物である。ところで、江戸後期の諏訪祭礼では練り物の多くが屋台となっていたことが同時代の多くの史料から確認できるが、享保年間（一七

一六〜一七三五）の諏訪祭礼で本当に屋台が出ていたかどうかは、この時期に書かれた関係史料がないため確認できない。

⑧享保六（一七二一）年以後、祭礼のさいに関戸町と上宿町の若者の間で争いがあつたため、智胤は四番の上新町を「おとなしき町内柄」という理由で二番に繰り上げ、この両町の間に置いた。そのさい、上新町の屋台に諏訪大明神と書いた御祓（御札）を飾らせたという。念のため書いておくと、町順の変更後は、一番関戸町、二番上新町、三番上宿町、四番上中宿となった。この変更後、祭礼の運営にかんする相談は上宿町を先に立てる慣例となった。

景敬と景俊では記すところはかなり違いがある。三郎右衛門家と権之丞家とは、受け継がれた伝承が異なっていたらしい。どちらの記述がより正確かは判断しかねる。しかしながら、両伝承で決定的に違うのは付祭り・練り物が登場して御射山祭りが諏訪祭礼となった年次だけである。あとは記述の粗密の違いとみて差し支えない。年次にしても、享保年間（一七一六〜一七三五）に祭礼化したという大枠では共通している。ここで一次史料に目を転じてみる。元禄一一（一六九八）年に始まり享保一〇（一七二五）年に終わる「伊能景利日記」<sup>⑨</sup>には、神事（神幸も含む）であれ付祭りであれ、諏訪祭礼についての言及は全くない。したがってこのころにはまだ神事に付祭りが伴っていなかったか、あるいは伴っていてもまだ大規模なものではなかったと考えられる。しかしながら、本宿組の有力者である景利にとって新宿の祭礼は関心外だったため、これについては日記に記さなかったと考えることもできる。

一方、少し後れて元文五（一七四〇）年に書かれた「佐原村鑑明細帳」には、「牛頭天王 御祭礼 六月十二日」とともに「諏訪明神 御祭礼 八月廿七日」とある。「千葉縣史編纂審議會編 一九五八 一二二」。この時点では確実に諏訪祭礼がおこなわれていたことがわかり、祭日も



八月二十七日だったことがわかる。

そして前述の「伊能豊秋日記」によれば、宝暦六（一七五六）年八月二十七日、権之丞家と茂左衛門家は笠鉾の先陣・後陣を争っている。これは諏訪祭礼における練り物の存在を示す最古の史料であり、さらにまた、「代々申伝之事」に記されたとおりに両家がそれぞれ笠鉾を出していたことを示す史料でもある。

また、同日記の明和元（一七六四）年八月二十七日条には、この年の諏訪祭礼について「だし計二而何も無之候、稲作相応ニ御座候得共、如何仕候哉狂言無之候」とある〔佐原市教育委員会編 二〇〇一 一四五〕。豊秋は引き物の総称としてほとんど常に「だし」という語を使っているもので、このころすでに諏訪祭礼では引き物の出ることが慣例化していたことがわかる。豊作の年には狂言の出ることが普通であったこともわかる。以上の一次史料から逆算して、細部はともかく、享保年間に諏訪祭礼が成立したという点については、少なくとも積極的にこれを疑う必要はないと考えられる。

### （三）天保年間ごろの諏訪祭礼

「天保」と「嘉永」には、昔の話だけでなく、同時代の話も記されている。ここでは、よくまとまっているので「天保」中の「鎮守諏訪大明神八月御祭礼古例控」と題された記事を見てみよう。これには天保年間（一八三〇～一八四三）ごろの諏訪祭礼の様相が詳しく記されており、重要である。

以下、この記事を中心に、「嘉永」および天保年間に書かれた「諸用日記覚」<sup>10</sup>なども参照しつつ、この時期の祭礼の運営方法や個々の行事の内容をみていく。記載順にはなく、祭礼の進行順に整理してこの記事の各条を引用する。なおこの記事には、「古例も御座候」という表現で古い出来事や天保期には廃れていた慣例についても若干記されているが、

それもそのまま引用する。

まず、八月一日から二六日までの諸条をみることにする。

一 毎年八月朔日、関戸町より惣町江廻状差出し、其夜、猶庄厳寺一同相談之定日

一 八月朔日寄合、八町寄合而申伝候町内、関戸・横宿・下宿・中宿・下新町・上宿組三町、此八町ニ祭礼取初ニ御座候、其外ハ追々分町也

一同廿五日、関戸・横宿両町致世話御神輿飾附、両組役所申出、一同御俱ニ而御神輿社内持参り、別当庄厳寺御神体奉移、直ニ上宿・下宿隔年ニ而御借殿江奉納候事（後略）

一 廿五日・六日、町々杵り物勢揃之節、上宿村七右衛門門前迄引附、上宿町迄不参引返シ候古例も御座候、下宿者権之丞宅迄

（右の条、「嘉永」中の対応する条を次に引用）

一 毎年八月廿五日、町々杵り物勢揃之節、上宿御借殿林七右衛門門前迄、上宿町不参例も有之、下宿者御借殿権之丞宅前迄也

一 寛政年中迄橋本町住居之砌者不申及、上宿・下宿辺住居之砌りも心殿居士位牌前ニ而関戸町家臺引居、下座之者共一曲輪ニ相成手打いたし、我等宅へ挨拶致引出之候、先例ニ御座候

一同廿六日、御旅所夜宮

八月一日に関戸町が新宿内の他の諸町に廻状を送り、同夜、莊厳寺で祭礼にかんする寄合が開かれる。この寄合は祭礼運営に最初から参加していた八町にちなみ、「八町寄合」と呼ばれている。ちなみにこの寄合は、近代には八朔参会・秋季参会・惣町会・惣町会議・惣町集会・定例集会などとも呼ばれている。今日では八朔参会（新暦九月一日開催）と呼ぶのが普通である。

八月二五日に関戸町と横宿の者が神輿の飾り付けをおこなう。なお、神輿は莊嚴寺の神輿蔵に保管されていた。関戸町は永代触頭であるという理由で、横宿は莊嚴寺が町内にあるという理由で、この両町が飾り付けをおこなったのであろう。しかし「諸用日記覚」には「御輿之儀ハ例年廿四日ニ御輿蔵より横宿町内ニて取出し、飭付仕候」と記されている。あるいは二四日と二五日の両日にわたって飾り付けをしたのであろうか。また「諸用日記覚」には、御旅所・御飯屋の設営は二五日の朝おこなわれるともある。

二五日の飾り付けが済むとその日のうちに神輿を諏訪神社に運び、別当が諏訪神社の御神体を神輿に移し、ただちにこれを上宿と下宿に隔年に設けられる御旅所内の御飯屋に運んで（行幸）奉納する。

この過程については「諸用日記覚」のほうが詳しく、次のようにある。

廿五日、御輿迎イハ惣町世話人式人ヅツ、外二行司三、四人ヅツ、別当所江詰候て、夫より相揃候旨村役人衆江迎ひ人遣申候、一統相揃候て本社江参り、別当御神鉢ヲ入候テ、夫より御飯屋江迄御供、御飯屋江納メ申候

行幸ではあちこち廻ることはなく、ごく単純に諏訪神社から御旅所・御飯屋まで行ったことが窺える。その行列構成も簡素で、練り物の随行もなかった。正式な祭日である二七日に神輿行列は氏子諸町を広く巡行するので、二五日の行幸はさほど重視されていなかったのである。

御飯屋の設けられる「上宿」と「下宿」はどちらも町名ではなく、組名を指している。「天保」の別の記事に上宿の御飯屋は上中宿へ設置して上宿組三町が逗留中の神輿を管理し、下宿の御飯屋は橋本町へ設置して橋本町と下宿町が逗留中の神輿を管理するところからである。上中宿は上宿組に、橋本町は下宿組に属する町である。ただし「諸用日記覚」

では、上宿組の御旅所の設置場所は上宿町（上中宿の隣町）であると考えられている。

神輿は御旅所に二晩安置され、二六日に夜宮（宵宮）が執行される。しかし具体的な内容は書かれていない。

また、付祭りの出される年には、二五日、町々の練り物が勢揃いし、林七右衛門宅前に設けられた上宿組の御飯屋または伊能権之丞宅前に設けられた下宿組の御飯屋までやって来る。しかしかつては上宿町が上宿組の御飯屋に参上しなかったこともある。

これも二五日の話と思われるが、関戸町は屋台を心殿居士の位牌前に引き据え、下座の者たちが手打ちをして権之丞家へ挨拶し、それから屋台を引き出す。この挨拶は権之丞家が橋本町にあったときばかりでなく、そのの上宿町あたりや下宿町あたりに移ってからもおこなわれていた。注目すべきは寛政年間（一七八九～一八〇〇）にすでに屋台が下座を伴っていたとしている点である。

また「嘉永」には、「心殿位牌前トテ、関戸町家臺不及申、町々家臺権之丞宅前ニ面手打いたし」、同家へ挨拶してから屋台を引き出すと補足されている。「町々家臺」ということで、練り物の中心が笠鉦から屋台に移っていたことが窺える。また、景俊が幕末に書いた「鎮守御祭礼年々凡覚並町内盛一条之事」という記録（佐原市教育委員会編 二〇〇一 一三〇～一四二頁所収）の安政二（一八五五）年条には、同年の諏訪祭礼には「家臺十四ツ廻家臺十」が差し出されたとあり、笠鉦に替わって屋台が練り物の中心となっていたことが確認できる。

二六日にも町々の練り物は勢揃いする。「鎮守御祭礼年々凡覚並町内盛一条之事」には、安政二（一八五五）年八月「廿六日ニも御旅所まで惣町家臺為引出申候」とある。詳細が記されていないので断言はできないが、夕方ないし夜に御旅所前に屋台などの練り物を順番に並べて夜宮の執行を見守る、という形だったのではないだろうか。

次に二七日の諸条と二八日の一条を示す。

一同廿七日、当日者壱番より順ニ衾り物御先立ニ而、御神輿行列、  
 榊・獅子・別当・村役人・其他明神由緒有之候重立候家人々、麻  
 上下ニ而御供致来り候事

一御神輿神行之節、伊能茂左衛門方へ入候古例も御座候

一神輿神行之節、両組御役宅前・権之丞宅前・壱町ニ壱ヶ所宛、御  
 法楽奉獻候古例ニ御座候、神行仕舞之節、関戸町而中川岸・田中

境、関堀橋之上ニ而町々廻衾宜より関戸町惣代・若者共相渡し本  
 社へ神行、猶本社別当御神体奉納候上、於拝殿横宿町惣代・若者  
 へ村役人其外一同立会相渡し申候上、横宿町者共、庄厳寺江持参  
 り無滞相納候取極、旧例ニ御座候

一家臺・衾り物罷出候節ハ壱番より最終迄川岸通り江引込候上、御  
 神輿先へくり越社内納候、夫迄ハ日くれ相成候共、急度行列正々  
 敷致来候事

衾り物引仕舞ニ壱番関戸町内江引込候上、我等廻家臺江関戸町よ  
 り目印持参迎ニ参り、下宿町江送り、目出度手打致相納メ候古例  
 御座候

(右の条、「嘉永」中の対応する条を次に引用)

一家臺・衾り物等差出シ候節ハ壱番より巻軸迄川岸通りくり込候上、  
 御神輿先へくり越社内へ神納いたし、夫迄ハ日暮ニ相成候共、御  
 神輿跡ニいたし、村役人衆警固、急度行列正々敷衾り物先ニ致巡  
 行致候事、天下一統祭事之古実之由、急度先祖共申伝候事

時宜ニ寄雨中坏之砌、無摠廿七日御神輿相納、衾り物等風雨ニ付  
 巡行相延候砌者、御神輿之かわり神幣家臺相定、右行列之儀ハ右  
 ニ差添、下宿町より銘々廻家臺差出シ申候

但(中略)、猿太彦家臺、関戸町内へ引込候得者、関戸町より

高張目印ニ以下宿町廻家臺へ出迎いたし、則下宿町内へ見送り  
 いたし、夫迄ニ而祭事目出度相済候古例ニ御座候事

一毎年廿七日、祭事無滞相済候為礼、両組役所・我等方へ惣町不残  
 惣代礼ニ参り候事

一祭事無滞相済、廿八日、関戸町より為礼、我等宅・伊能茂左衛  
 門・林七左衛門三軒江獅子入古例も御座候

(右の条、「嘉永」中の対応する条には「林七右衛門」とある)

二七日には神輿巡行(還幸とみなせる)がおこなわれる。付祭りの出  
 される年には、一番から順に練り物(朝のうちに御旅所前に並んでいた  
 のであろう)が御旅所を出て神輿行列を先導する。練り物行列が還幸路  
 の露払いをする形である。神輿行列の還幸においては、榊(榊幟ともい  
 う)と獅子、さらに別当と村役人および諏訪神社に由緒のある重立ちの  
 家の者が神輿に直接供奉してその行列を構成する。

ここでは引用していないが、榊については補足説明があり、享保六  
 (一七二二)年以来変わることなく玉造村(新宿の西隣)の者に伐採し  
 てもらって関戸町に納入してもらっており、同町からは謝礼として諏訪  
 明神の御札と神酒一升を贈ると書かれている。また「天保」の別の記事  
 には、榊と獅子にかかわる費用は「触頭之趣立居、関戸町持切ニ御座候」  
 とある。そして「諸用日記覚」には、榊と獅子は関戸町から出される旧  
 例とある。榊と同様、獅子も玉造村から関戸町に遣わされ、同町がこれ  
 を管理し、この分の謝礼も支払っていたのである。

「諸用日記覚」によると、このほか持鉢二本と神輿の舁き手である白  
 衣人足(廻衾宜(舁き衾宜)に同じ。各町より二人)、各町の惣代と行  
 司などもこの日は神輿行列に加わるといふ。

還幸の途中、かつては伊能茂左衛門の家に神輿が入られる慣例が  
 あった。その理由について「嘉永」では、諏訪神社の社地がもともと茂

左衛門家の地所であつたためと説明している。さらに、伊能権之丞宅にも名主宅にも神輿が入られた例はないと説明されており、これは茂左衛門家のみの特権であつたことを強調している。

また還幸の途中には、上宿組と下宿組のそれぞれの役人宅前と権之丞宅前、そしてこのほか各町一箇所で法衆が奉納される。

関堀橋（比定地不明）から諏訪神社までは、関戸町の惣代と若者共が迦祢宜に代わって神輿を運ぶ。諏訪神社に着くと別当が御神体を取り出して奉納する。そのあと神輿は横宿の惣代と若者共に渡され、彼らがこれを莊嚴寺に運び帰る。

付祭りの出される年には、還幸の最終段階で屋台などの練り物が一番の関戸町から最終番の下宿町まで川岸通り（河岸通り）に入る。そして小野川沿いに延びるこの長い通りで神輿行列が練り物行列に先行し、関堀橋などを通して諏訪神社に還る。この通りに入るまでは、たとえ日が暮れても（巡行が予定より遅れても）神輿行列は練り物行列の後ろに位置し続ける。

神輿行列が離れていくと練り物も引き終いにする。関戸町の屋台が同町へ入り、ついで同町より目印を持った使いが練り物行列の先頭にいる権之丞家の迦家臺のもとに迎えに来る。それからこの迦家臺を下宿町内まで送っていく、手打ちがなされる。明記されていないが、他町の練り物は関戸町で引き別れ、自町に戻っていったのであろう。

雨天などのさいにやむをえず二七日中に還幸を途中で切り上げて神輿行列を諏訪神社に還すこともある。しかしこの場合、そのあともまだ練り物行列は時間を延長して巡行を続ける。そのさい、神輿の代わりに神幣家臺なるものを定め、練り物行列はこれに随う。

「嘉永」には神幣家臺にかんする記述が散在しているが、これをまとめると次のようになる。諏訪神社には権之丞家が奉納した神幣があり、諏訪神社での神事のさいには神前に飾り置かれ、神輿巡行のさいには神

輿に取り付けられ、神輿とともに移動する。雨天などで神輿が途中で諏訪神社に還った場合は、この神幣の写しを迦家臺に取り付けて神輿の代わりとする。これが神幣家臺であり、幣束迦家臺ともいう。下分町の「永代記録帳」には「権之丞神幣の笠鉾」とある。神幣が取り付けられる迦家臺は権之丞家のものに決まっていたのである。<sup>14)</sup>

神幣家臺を用いる場合、最終番の下宿町では自町のほかの迦家臺を練り物行列の先頭にいる神幣家臺の近くに差し出す。この場合はしたがって、関戸町の屋台が同町へ入ったときに同町から目印（高張提灯）を持って派遣される使いは下宿町の全ての迦家臺を迎えに来る形となる。それからこれらを下宿町内へ見送る。

祭礼が滞りなく済むと、両組の役所と権之丞宅へ各町の惣代が残らず礼に行く。

かつては祭礼明けの二八日に、関戸町が礼として伊能権之丞宅・伊能茂左衛門宅・林七右衛門宅に獅子を入れる慣例もあった。

ところで「諸用日記寛」には、二七日の還幸路について記されている。川岸通りあたりまでは練り物行列もこの順路を巡行し、神輿行列を先導していたことになるわけだが、その還幸路を次に示しておく。

橋本町が御旅所の年には、まず、橋本町―下宿町―横宿―横川岸―横宿―関戸町（東関戸）―居造町（西関戸）―上宿台と回り、上中宿に至る。

上宿町が御旅所の年には、まず、上宿町―関戸町―横宿―下宿町―下新町―上新町と回り、上中宿に至る。

上中宿から先の順路はどちらの場合も同じで、入江町（比定地不明）―中宿―下新町―上新町―上中宿―中宿―下宿町―橋本町―若松町と回り、さらに最終段階として、上川岸―田中―上川岸―中川岸―下川岸と進み、ここから中川岸との境界まで戻って下川岸の裏通りを通り、関戸入口橋（関堀橋のことであろう）に至る。ここからは白衣人足に替わって関戸町の者が神輿を担いで諏訪神社まで運ぶ。

最後にいくつか補足しておく。まず、江戸後期には（史料はないが、おそらく江戸中期にも）付祭りの出ない年のほうが多かったという点を改めて確認しておく。註（6）にも記したが、利根川の氾濫や天候不順によって稲などの農作物が不作になり、屋台など練り物の出せない年が頻繁にあったことである。また祭礼のさいの喧嘩のために地頭所が屋台・練り物の巡行だけでなく神輿の巡行を差し止めたこともあった〔佐原市教育委員会編 二〇〇一 一六九―一七四。清宮 二〇〇三 一五―二二〕。近代においても不作のために付祭りの出ない年は多かった。

また、関戸町は永代触頭として毎年神事・神幸の監督を勤め、付祭りが伴う年にはその監督も勤めることになっていたが、天保二（一八三二）年から天保八（一八三七）年までは一時的にこの役から離れていた。<sup>15</sup>

もう一つ。嘉永から安政にかけて（一八四八―一八五九）の数回の付祭りにおいて、下宿町・下分町・橋本町では、惣町よりの依頼で従来の出し物である笠鉾の代わりに屋台を出したこともあった。この依頼の背景には、練り物の主流が笠鉾から屋台へ替わりつつあったという事情があった。安政二（一八五五）年にも依頼があり、その結果、前述のとおり同年の諏訪祭礼には笠鉾一〇台にたいして屋台は一四台が出された。しかしこの三町はいずれも小町で、本宿の町から屋台を借りたり急造の屋台で間に合わせたりしたが、人手の面で屋台引きには苦勞したようである〔清宮 二〇〇三 一八―二二〕。

## ② 近代の諏訪祭礼

近代の諏訪祭礼については、諏訪神社に所蔵されている『幣臺規則並割合帳』（以下、『割合帳』という）によってその詳細が知られる。本節の記述はとくに断りのないかぎり、この史料にもとづく。この史料は諏訪神社に所蔵されているもので、諏訪祭礼のさいに新宿各町が引き廻す

屋台の運営にかんする取り決めと活動の記録である。形態は縦一四・五cm、横四〇・〇cmの横帳で、八〇丁から成り、布製の帙に収めて保管されている。

本文冒頭部の三条にはそれぞれ明治九（一八七六）年、明治一〇（一八七七）年一月二五日、同年九月とあるが、表紙には「明治十一年八月吉日」と記されている。表紙は、明治一〇（一八七七）年から一一（一八七八）年旧九月にかけて幣台年番（後述）を勤めた北横宿の手で付されたものである。

帙の裏貼紙には「昭和三十年乙未九月吉日／寄贈 東関戸区」とあるが、同年同月に東関戸区（区は町に同じ）から幣台年番を引き継いだ西関戸区が、その年番最終年の昭和三四（一九五九）年一〇月に活動報告を記しており、これが『割合帳』の最後の記述となっている。西関戸区は、諏訪神社に奉納されていた『割合帳』を取り出して記述を補ったのであろう。

『割合帳』への記入はそのときどきの幣台年番がこれをなしており、とくに、どの町も年番最終年の、すなわち付祭り実施の年の記述を詳しくくなしている。したがって『割合帳』は、明治九（一八七六）年から昭和三四（一九五九）年にかけての諏訪祭礼において、新宿各町が神輿巡行と並ぶこの祭礼の主要構成要素である屋台巡行をどのようにこなっていたのか、そしてそこにどのような変化があったのか、といったことが窺える、貴重な記録といえる。

筆者はこの記録をすでに翻刻・発表しているが〔宇野 二〇〇三、科学研究費補助金の研究成果報告書に発表したものであるため一般の利用は困難である。そこで今回、若干の訂正を施したうえで附録として本稿の末尾に全文を収録する〕。

ところで『割合帳』の本文には「屋台」「幣台」「山車」という表記が混在しているが、いずれも同義である。本節では以下、題名にしたがい、

原則的に「幣台」と記すことにする。

また本節では、幣台の引き廻しのうち、行列を作って神輿の還幸を先導するものだけを「幣台巡行」と称し、それ以外の場面での町ごとの任意の引き廻しとは区別することにする。

## (一) 年番制度の確立

本誌所収の筆者の別稿で詳述したが、本宿の祇園祭礼では、遅くとも文政五(一八二二)年までに年番制度が確立していたと考えられる。年番には、神輿行列の運営にあたる一年交替の祭事年番と、練り物行列(山車行列)の運営にあたり、おそらく付祭りの出された年ごとに交替した山車年番の二種類があった。そして両年番は任期に違いはあったものの、年番を勤める町順は同一であった。これに倣ったものであろうが、新宿では明治時代になって同様の年番制度を採用した。

『割合帳』の第一条には次のようにある。享保六(一七二一)年から当明治九(一八七六)年までの諏訪祭礼においては「鎮守祭典、供獅々・榊ハ勿論、并附祭り遡物等ニ至ル迄」、すなわち諏訪神社内での神事、神輿行列、付祭りのさいの練り物などの、いずれにおいても町の並び順は関戸町・上新町・上宿町・上中宿・横宿・中宿・下新町・上河岸・中河岸・下河岸・若松町・橋本町・下分町・下宿町の順だったという。ちなみに近代では、祭礼のさいの町順を、いずれの場面においても「番組」と称している。

この文から、享保六(一七二一)年よりあとになされたと伝えられる番組の変更も同年中になされたと書き手が誤解していたことがわかるが、ともかく智胤が定めたとされる規定が明治九(一八七六)年まで存続していたことが確認できる。下新町と下宿町の間には、分町にかなする規定どおり新たに六つの町が加わっている。

第一条の残りの部分では、これまでの諏訪祭礼においては関戸町が諸

事世話方を勤めてきたが、「今般改正之御治世ニ基、惣町協議之上、町々車輪之如く隔年二年番役相勤可申様」、さらに取り決めるとある。今後は各町が一年ずつ年番役を勤めることとし、さらに具体的な取り決めを後日おこなうとしている。

なぜ年番制度に移行するに至ったのかは記されていないが、あるいは明治初期に幣台を常備する町が増えたことが何か影響しているのかもしれない。

明治四(一八七一)年には下分町が幣台を三〇両でどこから購入した。さらに同町は明治八(一八七五)年の付祭りにさいして幣台を新調した。同じ年、下宿町では「屋台練物新規造立、(中略)横宿は、南北分町に相い成り、北は新規屋台、南は傘鉾三本出し」て付祭りに参加した。南横宿はこの付祭りの終了後に幣台を造立したという。また、橋本町では明治四(一八七一)年に幣台に飾る人形として小野道風を造っており、これ以前に幣台を所有していたらしいことが知られる[清宮 二〇三 一三二―一三三、一〇〇―一〇一]。

第一条を受けて、明治一〇(一八七七)年一月、第二条の「議定書」では年番順などが取り決められた。

その一節に「新・本両宿隔年之儀、條約茂有之」とある。新宿諏訪祭礼と本宿祇園祭礼を一年おきに実施する、という意味である。これは明治六(一八七三)年に新宿と本宿の間で結ばれた「祭事、本・新ともに格番<sup>タビ</sup>に行う」[清宮 二〇三 一〇〇]という取り決めと同じものであるろう。

しかしこの条約はすでに失効していたらしく、新宿では「丑年」すなわち明治一〇(一八七七)年の北横宿を皮切りに、若松町・下新町・上河岸・中宿・南横宿・上宿町・橋本町・下分町・中河岸・下河岸・上宿・下宿町を経て、「寅年」の明治二三(一八九〇)年の関戸町まで、<sup>(16)</sup>切れ目なしに一年ずつ各町に年番役が割り振られている。明治二四(一

八九一)年には、最初に戻って北横宿が再び年番となることになっていったと思われる。毎年祭礼をおこなう形になっていたのである。

しかし「議定書」にはまた、「其年柄之善不善は難斗候二付、附祭皆休之年ハ累年ニ相成候共、其町ニ留置、遷物順廻首尾能相済候へは、速ニ次番江相送り可申事」と書かれている。

神輿巡行はともかく、付祭りについてはその年の状況しだいで実施しないこともあると予想され、それが累年に及んでも年番役はそのまま年番町に留め置くというのである。ここでの年番は明らかに幣台年番(本宿の山車年番に当たる)を指している。つまり各町が一年交替で幣台年番を勤めることはほとんど不可能と考えられており、付祭りを出せた年のその終了時に次の町に幣台年番役を引き渡す、ということが実際に決められたことである。

その順番であるが、寅年に年番を担当すると記されている関戸町のあとに、上新町・横河岸・田中町・上宿台がいずれも年番担当年なしに町名が記されている。上新町を除く三町については江戸時代の史料にいずれも練り物を出していたことを示す記述がなく(第一条にも名がみえない)、そのため年番役から外されたと考えられる。今日に至るまでこの三町は練り物を出していない。

上新町についてはその屋台が智胤の時代に「諏訪大明神申御祓」を飾るようになったと伝えられているが、幕末ないし明治初期の同町の幣台は「祓箱を飾れる宮造りの屋臺」「千葉県香取郡佐原町 一九三二 三〇〇」であったという。このころには諏訪神社の御祓い箱(御札を入れる箱)を飾っていたのである。幣台に神聖な飾りがあるということで同町は諏訪明神に奉仕する年番役を免除されたらしいが、それでもさきほどの三町とは異なり例外的に番組には組み込まれ、江戸時代と同じく関戸町の次に位置していた。<sup>(18)</sup>

続く第三条には、これまで御旅所の設営場所が隔年で上中宿と橋本町

だったのを改め、当明治一〇(一八七七)年より下分町と下宿町に跨る場所に変更すると記されている。しかし「割合帳」の以後の記述をみると、どういう理由からか、これ以後の御旅所は上宿町に設けられることが多く、まれに下宿町にも設けられていることが確認できる。<sup>(19)</sup>

## (二) 年番制度の分離—神輿年番と幣台年番—

幣台年番町は付祭りを出せた年に次の町にその役を引き渡すことになったわけだが、神輿年番は毎年交替していった。

『割合帳』には神輿運営にかんする記述は少ないが、これからしばらく、その少ない記述から神輿年番制度について復元してみる。

明治一四(一八八一)年条には、同年の祭礼前に設けられた同年の幣台運営にかんする細則が記されている。そのなかに「旧八月二三日、御神輿并ニ遷物両番、番前後六町ニて惣町道路相改メ」ることとあり、このときすでに神輿年番と幣台年番が分かれていたことが確認できる。同時に、当然ながら両者が協力して祭礼運営に当たっていたことも窺える。幣台運営にかんしては、今日でも「年番前後三町」という表現がある。その年の幣台年番町とこれを補佐する前回年番町(前年番という)と次回年番町(後年番・次年番・受年番という)のことである。

明治一一(一八七八)年に幣台年番北横宿は付祭りをおこなったが、その次に付祭りがなされたのは明治一四(一八八一)年で、幣台年番は若松町であった。そのため明治一四(一八八一)年条の別の箇所には前年番・年番・後年番はそれぞれ北横宿・若松町・下新町と書かれている。これがこの年の幣台年番前後三町である。これは「議定書」に書かれた年番順に一致している。

ところで明治一四(一八八一)年の時点で神輿運営にかんしても年番前後三町が存在していたわけだが、神輿巡行は明治一〇(一八七七)年以来毎年おこなわれていたようなので(中止されたという記述はない)、

「議定書」のとおりに同年の北横宿からきちんと一年ずつ順番が回っていったと仮定すると、明治一四（一八八一）年の神輿運営にかんする前年番・年番・後年番はそれぞれ上河岸・中宿・南横宿だったということになる。

この仮定が正しいことは明治一九（一八八六）年条に収められた「幣台仮家前へ据置届」の写しによって確認できる。これは佐原警察署長宛ての届けで、差出人として六町が署名している。順に、中川岸町・下川岸町・下分町・下新町・上川岸町・若松町とある。このうち後半の三町は幣台年番前後三町で、同年条の別の箇所に、下新町が年番、上川岸町が後年番、若松町が前年番と記されている。

そうすると、前半の三町が神輿年番前後三町ということになる。常識的に考えて先頭の中川岸が年番であろう。また、神輿年番前後三町も幣台年番前後三町と同じ順序で署名されていると考えれば、中川岸が年番、下川岸が後年番、下分町が前年番ということになる。「議定書」で確認すると、たしかに「戌年」すなわち明治一九（一八八六）年の年番は中河岸が勤めることになっており、したがって同年の後年番は下河岸、前年番は下分町となる。この一致からみて、神輿年番が「議定書」の町順にしたがつて一年ずつ規則正しく受け渡されていたことは確実である。

以上をまとめると、次のようになる。明治一〇（一八七七）年一月の「議定書」により年番順が定められた。理想としては毎年神輿巡行と幣台巡行をともにこなうはずであったが、同年の諏訪祭礼では神輿巡行（と神事）のみがおこなわれ、北横宿がその監督をした。翌一一（一八七八）年には神輿巡行を若松町が、幣台巡行を北横宿が監督し、この時点で神輿年番と幣台年番が分離した。

以後、神輿年番は毎年順調に回って交替したが、幣台年番は付祭りのなされた年にのみ回って交替した。両年番ともその順番は「議定書」のとおりである。

昭和一一（一九三六）年には惣町会に先立って「神輿・山車前後六町会議」が開かれており、ここでも神輿年番と幣台年番の協力によって祭礼が運営されていたことがわかる。しかしながら年番役が二つに分離したことは、神輿と幣台それぞれの巡行にある程度までは独立性を付与する契機になったと考えられる。

### （三） 明治時代の諏訪祭礼

明治一〇（一八七七）年の付祭りは「惣町協議之上休」となった。神輿巡行についての記述はないが、年番北横宿のもとでこちらはおこなわれたと考えられる。翌一一（一八七八）年は「旧八月一日例年之通り、附祭幣台、協議相成候二付」、付祭りがおこなわれた。同年の幣台年番は北横宿が勤めたわけだが、前述のとおり神輿年番のほうは若松町が勤めたはずである。幣台の引き廻し期間は祭礼期間と同じく旧八月二五日から二七日までで、この期間内に首尾良く終わった。つまり幣台巡行の日延べはなかった。幣台巡行の最後に北横宿は若松町に幣台年番役を引き渡した。なお祭礼期間は江戸時代と同じであり、また原則的には明治時代を通じて変わらなかった。

若松町は明治一二・一三（一八七九・一八八〇）年に付祭りをおこなえず、明治一四（一八八一）年にこれをおこなった。この年の幣台引き廻しも祭礼期間内に首尾良く終わった。

ところで同年の幣台運営細則の一つに、「祭事中、何レノ町ニおゐて不行届き候は、幣台引廻之節、若行当り有之候とも、高声にて異論有之間敷事」というものがある。後述するが、付祭りをこなう年には番組によらずに各町が自由に幣台を引き廻す時間もあったので、そのさいの幣台同士との接近に伴う諍いを防ごうとしたのである。

次の幣台年番である下新町が付祭りを実施できたのは、ようやく明治一九（一八八六）年になってからである。ただしこの年はコレラが流行



したため県庁からの通達で祭礼は延期され、新暦十一月一日から三日（旧暦では一〇月六日から八日）までの予定で変則的に実施されることになった。

しかし三日の夕方からの降雨で幣台巡行はこの日だけでは終わらずに日延べとなり、四日の夜に終了した。同年条には、いずれも佐原警察署長宛に出された「幣台仮家前へ据置届」「祭事遷物之義日延届」「兼而棒呈シタル祭事時間延届」が書き写されている。また、写しこそないが、祭礼開始に先立って祭礼執行届が出されていたことも記されている。これらはいずれも許可されたが、祭礼実施と道路使用にたいして警察の許可が必要になっていたことが確認できる。

このうち、十一月二日付の「幣台仮家前へ据置届」は注目すべき文書である。もう日の短い季節であるため、今夜は練り物を残らず御仮屋前へ据え置きたい、という内容である。三日の幣台巡行を一日できちんと終わらせるための措置である。つまり祭日の朝に各町から御旅所前に幣台を引き出して番組順（下新町を先頭に年番順）に並べる時間を省くために、中日の夜から祭日の朝まで御旅所前に幣台を据え置きにしたという話である。この工夫にもかかわらず実際の幣台巡行は四日の夜までかかってしまったわけだが、しかし日延べを避けるためのこのやり方は後年の付祭りでもしばらく踏襲された。

天保期ごろの諏訪祭礼では中日の夜宮にさいして練り物が御旅所前に整列していたのではないかと推測したが、この推測が正しければ夜宮終了後もそのまま幣台を据え置きにしておけばいいわけで、このやり方できとくに不都合はなかったといえる。

ところで、下新町は五年も幣台年番を勤めていた勘定になる。そこで付祭りがおこなわれた年に、幣台巡行の終了時に幣台年番役の引き継ぎをおこなうという規則ではあったが、やはり期限がないと「甚不都合ニ付、向後は期限三ヶ年ト相定、右年限相過候へは、遷物執行之有無不拘

次町へ可相渡旨、惣町協議之上、決定」した。

三年を待たずに付祭りが実施された場合は、もちろんすぐに幣台年番を替わった。このことは、次の幣台年番の上川岸が二年後の明治二一（一八八八）年の付祭りの実施をもって中宿に幣台年番役を引き渡していることから確かめられる。

その明治二一（一八八八）年の

祭典之儀は例ニ拠テ陰暦八月朔日総町集会之上、附祭則チ遷物執行有無協儀ニ及シ処、執行ニ賛成下ル者過半ニ及ベリ。（中略）故ニ一統実行セシ事ニ決議セリ。

付祭り実施の可否は八朔参会の協議で決定されていたわけだが、具体的には多数決で決めていたことがわかる。この文はさらに「因テ其筋ヘ式ノ如ク届書ノ手続ヲ為シ」たと続いているが、これはもちろん警察への届け出を指す。しかしこの年も幣台巡行に手間取り、旧八月二七日だけでは終わらず、翌日までかかった。

中宿の幣台年番担当中の出来事をみてみよう。まず、明治二二・二三（一八八九・一八九〇）年とも、八朔参会で付祭りをおこなわないと決定したにもかかわらず、祭日に至って各町が勝手に幣台を引き廻した。もちろん付祭りを実施しない以上、番組をなして神輿行列の還幸を先導したものではない。

この兩年の出来事は、付祭りをおこなわないと決した年でも町々で幣台を出して自由に引き廻して構わない、という先例になった。中宿はこのような形の幣台引き廻しを「臨時遷物」と称している。<sup>(2)</sup>

ついで明治二四（一八九二）年、付祭りが実施された。付祭りに先立ち、旧八月二三日から二六日まで各町は「遊引」をおこなった。遊引とは、臨時練り物と異なり、付祭りをおこなう年に還幸の先導以外のと

きに各町が自由に幣台を引き廻すものである。また本来祭礼期間は二五日からあるが、この年は二三日から遊引がなされている。しかし実は「遊引」という語こそみえないものの、二三日から遊引をおこなうことはすでに幕末にもみられた。<sup>(22)</sup> 今日と異なり付祭りを出せる年はさほど多くはなかったため、これを出せる年にはできるだけ早くから幣台の引き廻しを楽しもうとしていたのであろう。

この年もまた幣台巡行に手間取り、二七日から二九日までかかっている。この年は上宿町が御旅所だったようで、二七日は同町を出発してから数町を回って下新町にて引き別れたとある。引き別れてからは各幣台をいったん自町に戻したのであろう。明けて二八日は下新町から再び引き始めたところ、そのまゝに再び同町に番組順に幣台を並べたのであろう。この日は橋本町まで進んだところで幣台を据え置いた。二九日は同町から引き始め、最後に中宿・上仲宿・上宿町を横断する通りに（つまり御旅所前の通りに）幣台を並べてから引き別れ、巡行を終えた。なお、「見物人群集、町中錐立<sup>マユ</sup>際無」と、短いながらも観光客の様子が『割合帳』ではじめて記されている。

明治二五（一八九二）年、幣台年番は南横宿である。八朔参会で「惣町は投票ニテ過半数不賛成ニ付」付祭りは休みと決まったが、「祭典当日」の二七日にはやはり臨時練り物が出ている。

翌二六（一八九三）年は「開票多数の賛成」で付祭りが出されることになり、旧八月二三日午後から各町は遊引を始めた。この年の御旅所も上宿町に設けられたので、

廿六日二至り、午后四時頃ヨリ年番町初メ惣町者上宿町へ順次集合、遼物等者徹夜据置。翌廿七日二至り、午前着降雨ニ付、正午ヨリ、右上宿町へ集合之順ニ依リ全町を發車し

た。しかし降雨による出発の遅れと道路状況の悪化のため、この年も幣台巡行は二九日までかかった。

明治二七（一八九四）年、幣台年番は上宿町である。この年の夏、日清戦争が起った。戦時下のため付祭りは休み、さすがに臨時に幣台を引き廻す町もなかった。

明治二八（一八九五）年、八朔参会の投票で「拾五ヶ町ノ内、白票十一黒票四。白票多数ニ付、幣台執行之事ニ決」した。票数がここではじめて出てくるが、一見すると全一五票は年番役を勤める一四町に上新町を加えた数に思える。しかしどうもそれだけの意味ではなさそうである。

昭和一一（一九三六）年のことだが、惣町会議のまゝに上新町の正副区長がこの年の幣台年番町にたいして、上新町の「山車新調相成、惣町山車持チ仲間入りノ件申」し入れてきた。申し入れの一つは惣町会議における投票権を上新町に付与するように、というものだった。

結論からいうと、多数決によってその年の付祭りの実施が決まった場合には、反対票を投じた町であっても幣台を出さなければならず、それが可能な町にたいしてその年の投票権が与えられていたのである。幣台を持つていない町はもちろん、幣台の破損がひどい町や人手の面で幣台を運行できそうにない町にはその年の投票権は与えられなかったということである。

『割合帳』にはこのあとたびたび投票の話が出てくるが、一五票、一四票、一三票と、年によってその数が違っている。これはやはり幣台を出せる状態にある町にたいして年ごとに投票権を与えていたからであろう。明治二八（一八九五）年には幣台を所有していた一五町すべてがたまたま幣台を出せる状態にあったため、一五町で投票がなされた。昭和一一（一九三六）年の上新町の場合は、数年間幣台を持っていなかった状態が続いたあとでこれを新調したので、投票権の再付与を求めたと考えられる。この点についてはまたあとで述べる。

話を戻す。この投票結果を受け、旧八月二三日から「幣台引出した町も三、四ヶ町は有之候。当日廿五日ヨリ、各町定期に引出し申候。尤廿五、廿六日両日乱引」。乱引は遊引に同じである。「廿六日夜ハ御旅所へ番組ヲ以順次二列シ（中略）、夜宮之儀ニ付、置据之事ニ相極り候」。二七日早朝は雨模様のなか、幣台巡行を開始した。ところがまもなく暴雨となつて巡行は日延べと決まり、関戸町で引き別れた。二八日は晴天で、各町の幣台は関戸町に集まつて巡行を再開したがこの日も巡行は終わらず、橋本町に幣台を据え置いた。二九日に巡行はようやく終わり、上宿町御旅所前で幣台年番引継をおこない、引き別れた。

次の幣台年番は橋本町である。明治二九（一八九六）年から三一（一八九八）年まで、付祭りは休みであつた。付祭り実施の有無にかかわらず幣台年番の期限を三箇年とした明治一九（一八八六）年の取り決めに従えば、そのまま橋本町は下分町に幣台年番役を引き渡さなければならなかつた。しかし「各町協儀之上、壹ヶ年ヲ延期ス」ることが認められ、翌三二（一八九九）年の惣町集会でようやく付祭りの実施が決まつた。白票は一三で黒票は二であつた。

同年も旧八月「廿三日ヨリ幣台引出し、廿五日ヨリハ各町定期ニ引出し申候。廿五日・廿六日両日乱引。廿六日夜ハ御旅所へ番組ヲ以テ列シ候」という次第だつた。ところが「同夜、雨模様ニ付、各町協儀之上、同夜引分候。廿七日午前九時、各町御旅所へ番組ニテ列」した。二六日夜に御旅所前で番組順に幣台を並べたが、雨で幣台の飾り物などが傷むのを恐れたらしく、幣台を据え置きにするのをやめて各町に引き帰り、翌朝再び御旅所前で番組をなしたのである。それから幣台巡行が始まつたが、悪路のほか、北横宿と中宿が巡行への参加を渋つたため、二七日から二九日までかかつた。

明治三三（一九〇〇）年旧八月、幣台年番下分町は神輿運営と幣台運営にかんして改正をおこなつた。

諏訪神社例祭執行之儀ニ付、近年秩序漸ク紊レ儀式宣シキヲ得ス、弊害百出敬神ノ誠意或ハ空シカラントス。今ニシテ矯正セズレハ神誠ヲ流カスノ害少シトセズ、左ニ改正ス。

というわけで、明治二〇年代の臨時練り物の登場と乱引の活発化、幣台巡行の日延べの頻発を受けてこの改正がなされたことが窺える。なお「例祭」とあるが、これは後続の文章からみて明らかに「例祭に付祭りが伴う場合」というほどの意味である。

まず、祭礼期間を旧八月一五日から一七日までと変更し、秋季参会も旧七月二〇日に繰り上げられた。

神輿運営にかんする改正は細かいもので取り上げないが、個々の神事のなかに注意すべきものがある。すなわち、祭礼初日に「神輿御浜下り」と御旅所への「納輿」を、中日に「宵宮」を、楽日に「神輿渡御」と本社への「還御」をおこなうとある。納輿・宵宮・神輿渡御・還御は江戸時代からのもので問題はないが、浜下りは江戸時代の諏訪祭礼にはなかつたものである。本宿の祇園祭礼には江戸時代から神輿を小野川に運んでその水で清める神事があり、これを「浜下り」と称していたことが多くの史料にみえる。諏訪祭礼では明治に入ってからこの神事を取り入れたらしい。初日に神輿を御旅所に納めるまえにこの神事をおこなつたのである。

幣台運営の改正については「諏訪神社例祭山車巡行ニ関スル改正案」と題して記されている。

内容は、まず明治三六（一九〇三）年からは農作物の豊凶にかかわらず、幣台年番の引き継ぎを原則的に五年ごとにするとした（その後、実際には守られないことが多かった）。さらに乱引でない「正式ノ巡行」の、すなわち神輿巡行の先導としての幣台巡行については、

御浜下り日ハ巡行随意トス。宵宮当日午前八時までニ御旅所々在ノ場所ニ順序ノ位置ニ参列シ、神輿渡御ノ路順ニ依リ巡行ヲ開始シ、例祭当日ニ涉リ、神輿本社へ還御ノ後、六時以内(註。六時間以内)ニ巡行ヲオウルヘキ

と改められた。

明治一九(一八八六)年以来は通常、中日の旧八月二六日の夕方ないし夜にその日の乱引をすませた各町の幣台が御旅所前に整列し、その状態で夜宮を迎え、幣台はそのまま一晩据え置かれていた。そして翌朝、全幣台の先導で還幸がおこなわれていた。

しかしこのやり方でも時間がかかりすぎて一日では幣台巡行が終わらないことが頻繁にあったため、中日の朝から幣台を御旅所のまえに集めて番組をなし、そのまま幣台だけを一日早く出発させることにしたのである。中日には神輿は御旅所に据え置かれたままなので、時間上、これは幣台巡行が神輿巡行から離れる日が生ずるという、重大な変更である。しかしそれでも、神輿の還幸に先だつてその順路の露払いをするという、幣台巡行の性格までもが失われたわけではない。

さて、不作や水害、日露戦争と戦後の不景気などのため、下分町はなかなか付祭りをおこなえなかった。その間、年番担当も五年以上になつたため、改正案にもとづき後年番に引き渡しを申し出たが、各町は付祭り執行のうえで引き渡すべきとの意見で、ずっと年番を続けた。

ようやく明治四二(一九〇九)年に下分町は付祭りを実施できた。このときの投票は白票が一一、黒票が三であった。付祭りの実施に先立ち「警察署ヨリ興年番・屋台年番前後ノ区長召換相成リ」、幣台運営の秩序維持や祭礼期間の厳守などについて訓示があった。

訓示を受けて下分町では、この年の幣台運営細則たる「屋台行動規約」を作成した。これはおもに、「自由行動ノ順路」について「川岸廻リハ

総テ下ヨリ上ニあかる事。橋本ヨリ川岸へ下ル事ヲ得ズ」などとあるように、乱引時には新宿各所の道路を一方通行とし、幣台ができるだけ擦れ違わないように定めた細則である。乱引がますます盛んになり、それを規制する必要も強まっていた様子が窺える。

「屋台行動規約」にはまた、「諏訪神社例祭山車巡行ニ関スル改正案」にもとづく具体的な幣台巡行日程も定められている。ただしこの年の祭礼期間は改正案どおりではなく、従来どおり旧八月二五日から二七日までとなっている(その理由は書かれていない)。中日二六日は午前九時に上宿御旅所前に番組順に幣台を整列させ、同一〇時から巡行開始。所定の順路を通り、再び御旅所前に幣台を整列させ、一晩そこに据え置く。祭日二七日は午前九時に御旅所を出発し、残りの巡路を通って御旅所に戻り、午後十一時に各町へ引き帰る。

では、実際の祭礼はどのように進んだのだろうか。まず、従来どおりの祭礼期間になったため、「旧慣ニヨリ」、旧八月「廿三日ヨリ山車引出シヲ警察へ出願セシモ許可セラレズ、(中略)廿四日ノ夜ヨリ山車引出シヲ出願、許可ヲ得テ同夜ヨリ」乱引するに至った。しかしながら、二六日は予定を大幅に遅れて午後二時過ぎに上宿御旅所前にて各町幣台の準備が整い、午後三時過ぎに巡行が始まった。この日は出発の遅れと降雨のため、予定どおりに巡行が進まないまま御旅所に戻って幣台を据え置いた。翌二七日の巡行でも全ての巡路は廻りきれずに日延べと決定し、橋本町に幣台を据え置いた。二八日の巡行は大雨に祟られ、「例年ノ御旅所迄進行ハ困難ニ付キ、横宿通りへ整列ノ上引分レ」ることになった。これが済んだときには二九日の午前二時になっていた。

この年の付祭りは久し振りのものだったため、悪天候にもかかわらず

汽車・汽船ハ発着毎ニ溢ル、斗リノ乗客ニテ、小野川ハ舟ニテ埋マリ、其他近郷ヨリノ群衆ハ四、五万ヲ算シ、町内中一時ハ人ヲ以テ

埋メ、往来モ出来サル有様。雑踏ノ状実ニ佐原町空前ノ人出ナラン

というほどの賑わいだった。汽車・汽船という交通機関の普及による観光客の増加を受けて、以後、祭礼関係者は積極的にこれを利用していくことになる。

#### (四) 大正時代の諏訪祭礼

次の幣台年番は中川岸である。明治四三(一九一〇)年と四四(一九一一)年は付祭り中止。さらに翌四五(一九一二)年は明治天皇の崩御を受け、付祭りはもちろん神輿巡行もおこなわれなかった。しかしこの年、諏訪神社での神事のみは新暦の九月二十五日と二十七日におこなわれた。そしてこれ以後しばらくの間、祭礼期間は新暦九月二十五日から二十七日までとなった(以下、とくに断らないかぎり、月日は新暦)。

大正二(一九一三)年、これも九月一日に開催日の移った八朔参会で、付祭りは実施と決定した。白票が九票、黒票が四票であった。乱引は二三日ではなく、二四日に始まった。幣台巡行については二六日に始まったものの、同日午後から雨となって二七日午後四時によく晴れた。このため多少の遅れは生じたものの二八日朝には終わった。

投票数からわかるとおり、この年は一三の町名が挙げられているところがあり、この年の番組一覧でも一三の町名が挙げられている。ところが二六日になって上新町から中川岸に申し出があり、同町も幣台を出すことになった。八朔参会以後、町内で調整に努力したのである。

また、実際に予定どおりだったのかどうかは書かれていないが、この年の幣台運営細則「諏訪神社祭典及山車屋台引廻し契約」によると、二六日の朝に各幣台は上宿御旅所から少し離れた場所に整列し、午前一〇時を期して御旅所に進行する予定になっていた。明治三三(一九〇〇)年の改正案にもとづき、やはり中日の朝に整列の予定を立てていたこと

がわかる。

なお、この年は八朔参会で「汽船は式割引、汽車ハ二割引、交渉ス」ることに決まった。交渉の結果については書かれていないが、観光客については「溢ル斗の人出<sup>マ</sup>デニテ五万ヲ算シ、人ヲ以テ埋メ、往来人ヲ以テ通行出来サル盛況ナリ」と記されている。

次の幣台年番下川岸は大正一五(一九二六)年に至って付祭りをおこなったが、それ以前の十余年の状況についてはほとんど記録していない。ただ例外的に、大正一三(一九二四)年一〇月二〇日に各町の屋台当役および古役によって作成された、一二条から成る「屋台引廻しに就ての心得」という規約にかんしてはその全文を収録している。これは付祭りごとに幣台年番が作成するその年だけの幣台運営細則ではなく、もっと恒常的な幣台運営規約である。

その第三条には「屋台当役の交渉中は屋台の進行を止め、交渉の結果、屋台の進行を始むる事」と、第四条には「当役交渉の結果、甲の屋台停止し乙の屋台進行する時は、甲乙各屋台の高欄縁との間隔は一尺以上とす」とある。『割合帳』においてここではじめて、幣台の運行とそれにかかわる他町との交渉に責任を持つ、屋台当役(または屋台世話役)という役職が登場する。乱引中に幣台同士が近接した場合、どちらの幣台が先に進行し、どちらの幣台が停止したまま待機するかを交渉するのである。古役も初見だが、その名辞と現在の用法から推して、屋台当役を退いた者が就く役職であろう。どちらも、臨時練り物が始まり乱引も盛んになった明治半ば以降に設けられた役職と思われる。当役交渉はその後も引き継がれ、今日に至っている。

大正一五(一九二六)年の付祭りの話に移る。この年は九月一日の惣町会議で付祭り実施の可否が「白七票黒七票にて同点」となり、協議の結果実施と決まった。もちろん番組一覧でも一四の町名が挙げられている。

九月二三日に乱引が始まったが、注目すべきは、二五日の、つまり祭礼初日の午後一時に下宿町の御旅所前に各幣台が番組順に整列したことである。明記されていないが、この夜はここに幣台を据え置いたのであろう。番組順の整列日時をさらに前倒しにして初日の夜とし、中日の朝にすぐさま幣台巡行を開始できるようにしたのである。昭和一〇（一九三五）年と一一（一九三六）年にも基本的にはこのやり方が採られている。なお、この年の御旅所は下宿町に設けられた。

#### （五）昭和時代の諏訪祭礼

昭和一〇（一九三五）年、幣台年番上中宿のとき、それまで東西で協力して祭礼に参加してきた関戸町が決定的に分裂し、それぞれが祭礼までに幣台を新調した。番組位置については九月二日に開かれた定例集会（なぜか一日ではない）で両町による抽籤がなされた結果、旧関戸町の番に東関戸が、その直後に西関戸が入ることになった。

さらにその定例集会で

十九区々長及代理者全員出席の上、（中略）例年の通り投票いたしたる所、白票絶対多数となり（白九点黒五点）、茲に盛大に引廻を確定し、目出度会議を終了

した。明治一〇（一八七七）年の「議定書」には計一八町が名を連ねていたが、関戸町の分裂で一九町となったわけである。定例集会には、幣台運営にかんする投票権を持っていない町も参加していたことが確認できる。また、関戸町が二町に分かれたにもかかわらず、投票数は大正一五（一九二六）年と同じく一四町である。これはこの年、上新町が投票権を持っていなかったからであろう。

投票結果を受け、いくつかの町では二三日に乱引を始めた。二五日は

夜のうちに下宿町の御旅所前に番組順に整列する予定のところ、実際には二六日午前二時に整列が終わった。ところが夜半より利根川が増水・氾濫し、結局二六日・二七日ともに幣台巡行はおこなえなかった。そのため幣台年番引継行事もおこなえず、上中宿が引き続き幣台年番を勤めることになった。

しかし一方、「御神輿は例年の通り、廿五日午前十時、御仮御殿に出御例祭を行い、廿七日は御巡幸も中止せず、只々大出水の爲め、止むを得ざる区は一、二区巡幸せざりしのみ」であった。

なお、結局はこの年も不調に終わったが、「祭事山車引廻シ規定」には「時間厳守ノコト」「日延絶対セザルコト」とあり、たびかさなる幣台巡行の日延べが幣台年番にとって厄介事であったことが確認できる。

翌一一（一九三六）年、九月二日に開かれた会議（この年もなぜか一日ではない）で付祭りのやり直しが決定された。そこで例のごとく九月二三日に乱引が始まり、二五日に正式に祭礼が始まり、同夜、上宿町御旅所前で番組順に幣台整列。二六日、幣台巡行開始。二七日も幣台巡行継続。しかし同日午後から風雨激しくなり、幣台年番引継行事と引別行事が終わったのは二八日の午前八時であった。かくして上中宿は下宿町に幣台年番を引き渡すことができた。

ところでこの年、上新町が幣台を新調した。それにともない上新町は上中宿にたいして八月一七日、①九月惣町会議における投票権、②番組は西関戸の次にすること、③幣台年番が廻ってきたときには上新町を跳ばずにこれを勤めさせること、以上の承認を申し出た。このうち、①は投票権の再付与を求めたもので、②は単に前年の関戸町の分裂を受けて番組位置の確認を求めただけのものが、問題は③で、その幣台に諏訪明神にちなんだ飾りを有する上新町にたいして幣台年番役を勤めさせることは難しかった。

この申し出にたいして上中宿は翌一八日に「神輿・山車前後六町会議」

を、二〇日には臨時の惣町会を開き、後者の討議で①と②は承認、③は保留と決定した。二二日、上新町はこの決定を快諾する旨、回答した。

二〇日の臨時惣町会ではまた、上新町の件のほか、「大祭ニ付キ、汽車賃及び各乗物会社へ祭日中賃金割引汽車自動車増発ノ件」も討議され、「町役場・観光協会・商工会等へ宣伝応援ノ件、惣会一致両前後六町へ委仕サ」れた（結果については書かれていない）。なおいうまでもないが、正式に大祭Ⅱ付祭りの開催が決定したのは九月二日の会議においてであった。

その九月二日の会議（ここでは「定例区長惣会」と記されている）は次のように進んだ。

九月三日、午前拾時ヨリ木内本館ニ於テ定例区長惣会開催。神輿年番ノ議案終了后、

山車年番、席ヲ替リ上新町区山車順位承認ノ件、八月二十日ノ決議

其他仲間ノ報告終リテ、

山車年番ヨリ本年大祭執行ヲ提案。例ニヨリ可否ヲ投票ニ依ル事ヲ

惣町ニ計ル。異議無ク投票開始。

出席投票権十五票

開票ノ結果

白丸票十三票（可トスルモノ）

黒丸票 二票（否トスルモノ）

右ニテ望外ノ大多数ニテ大祭ニ決ス。

まず神輿年番の議案を、ついで幣台年番の議案を審議し、そのあと付祭り実施の可否を投票するという流れである。すでに投票権の再付与を認められていた上新町も投票したので、投票した町は前年より一つ増えて一五町となっている。

長い戦争が終わると諏訪祭礼は大きく変容した。まず、神輿運営が町単位ではなされなくなった。

昭和二〇（一九四五）年二月にGHQが発した神道指令によって神道および神社にたいする公の財源からの財政的援助と公的要素の導入が禁じられたため、町単位での神輿運営が困難になったからである。そのため翌年、諏訪神社の二九の氏子町は四つの地区連合会から成る氏子会（諏訪神社氏子会第一地区連合会）以下の四団体）を組織し、神輿運営に当たるようになった（小出皓一氏の御教示）。

しかし昭和一八（一九四三）年ごろ、戦争で男手が足りなくなつて一町で神輿運営をするのが困難になつていたため、すでに氏子諸町の組織化が図られていたともいう（小森孝一氏の御教示）。このような下地に神道指令が加わつて氏子会の成立をみたということであろうか。

ちなみに神輿年番地区の任期は現在二年であるが、当初から二年だったのかどうかは確認できなかった。

戦後の数年間は「無秩序ナル幣台ノ引廻シハアリタレドモ、恒例ニヨル白黒ノ投票ハ一回モナク」、昭和二五（一九五〇）年に至つた。ようやくこの年、幣台年番下宿町のもとで付祭りがおこなわれた。しかしこれは従来の付祭りとは全く異なるものであった。

「惣町ハ或程度ノ改正ニヨリ祭事執行ノ機運ニ向ヒ」、その結果「九月一日、八朔参会ニ於ル改正」が成つた。

改正のおもな内容は「幣台ノ番組ハ廿六日之ヲ行」い、「番組ノ時刻ハ夕食前、年番町ノ定メタル場所ニ並ビ（中略）、夕食後、年番引継行事並ニ引別行事ヲ行フ」、ただし「年番引継行事終了セルモ祭事終ルマデ当年番ノ責任トスル」というものであった。

幣台巡行の最後に幣台年番引継行事と引別行事をおこなつてきたのを改め、中日の九月二六日の夕食前に番組順に幣台を並べ、夕食後に両行事を執行することにしたのである。時刻としては御旅所での宵宮執行と

同じくらいになされたものであろうか。

幣台巡行は日延べになるのが普通だったため、その最後になされる幣台年番引継行事と引別行事も日延べになることが多かった。そこでこのような改正をおこない、日延べをなくすことにしたのである。

さらに重要なことは、二六日の夕食前から夕食後にかけての時間を除いて幣台が番組順に並ぶことはなくなり、したがって神輿行列の還幸を先導するものとしての幣台巡行が全く廃されてしまったことである。

この改正によって幣台の番組は神輿行列を先導するためではなく、幣台年番引継行事と引別行事をおこなうためだけになされるものに変わった。従来の幣台巡行がなくなったため、乱引の意味はといえば、幣台の引き廻し全般を指すものに変わった。こうして従来の正式な幣台巡行に代わって、各町が幣台を新宿内で自由に広く引き廻すことを「巡行」と称するようになっていった。「乱引」と「巡行」が同義となったのである。

また、乱引の時間が増えたことが影響したものでどうか、この年以後は正式な祭礼期間の二日前から乱引がなされるという慣例は廃れたようである。

番組の順番に則って二日間も（日延べがあればそれよりも長く）新宿内を巡行するより、各町が自由に乱引を楽しむことがより重視されていったのである。そしてこの年の幣台運営のあり方が現在のそのの直接の雛型になり、新たな意味での幣台巡行が活況を呈していくことになった。

昭和三〇（一九五五）年、幣台年番東関戸は付祭りをおこなった。九月二五日には乱引が、二六日には夕食前に番組をなして夕食後に幣台年番引継行事と引別行事がなされた。二七日については言及はないが、乱引がなされたのであろう。

「引別れ行事に於て些なりと往時を偲ぶ本祭の面かげを止めんとする

各町の趣向と絶大なる協力」という文言がある。番組順に幣台が並んで新宿中を巡行する形式が廃されたうえは、その面影を留めるものは番組順に幣台が並んでそのまま解散に至る幣台年番引継行事と引別行事だけであると、各町が認識していた様子が窺える。従来の付祭りのあり方は根本的に変わってしまったという認識である。しかし、書き手はこの変化をべつに嘆いているわけではない。右の文言の直後に、

愈々九月廿五日の黎明を迎いたれば、各町の幣台は先きを競って引廻しを開始せり。斯くして未曾有の盛儀を見んものと遠近よりの老若男女十数万の多きを数え、佐原囃の音は諏訪神社の森に香取の峰々にこたまして、賑々しさ限りなし。

とあり、幣台引き廻しの活況を喜んでいるからである。

ところでこの年の幣台運営細則「道路規約申合事項」に、付記として「御神輿御巡幸に出合いたる時は、幣台は停止し鳴物を止めて敬意を表する事」とある。幣台が番組順に巡行することがなくなり、各幣台が一人で新宿内に展開する時間が多くなった結果、二七日に幣台と神輿が遭遇する機会が増えることになった。そのため、事前にこのような細則が設けられたのである。

また、この年の

御神輿渡御に就ては、九月二十五日、上宿区地先きお旅所に御出御、御例祭を厳かに執行、二十七日、各区の御巡幸予定のところ、折からの風雨烈しく御神輿にたいし損傷の憂いありたれば、総町各区長立寄合の結果、市内御巡幸を取止め、一路、一の鳥居（註。諏訪台の麓にある）を経て御帰還致す事となれり



とある。

悪天候のため予定を変えざるをえなかったが、この記述から神輿の運営そのものは概ね従来どおりになされていたことがわかる。現在でも神輿の三日間の運営はこのとおりである。初日の浜下りも中日の宵宮も継続されている。

同年にはまた、上新町の件が再び問題になっている。東関戸の次の幣台年番は西関戸であるが、番組によればさらにその次の幣台年番は上新町になる。ところが上新町が幣台年番を勤めるかどうかは保留のままになっており、議論が再燃したのである。このたびは上新町より、「古来諏訪大神を飾して年番外に列したる伝統を保持したしとの申出あり」、各町はこれを諒承した。上新町は、昭和一一（一九三六）年とは逆の申し出をしたのである。戦争の痛手から回復していなかったのか、それともほかに理由があったのか、ともかくこの申し出により、西関戸の次の幣台年番は北横宿に決まった。

昭和三四（一九五九）年の付祭りでは、幣台年番西関戸のもと、祭礼期間が変更されて一〇月一五日から一七日までとなった。<sup>24</sup>そして中日の一六日の夕方、幣台年番引継行事と引別行事がおこなわれ、ここに、明治一〇（一八七七）年に始まった幣台年番制度は新宿惣町（年番役を勤める諸町）を一巡したのである。

この年の書き手は「古き歴史と伝統を受け継ぎ来つた、「佐原の山車」が関東一を誇」ることを述べ、一六日の様子については次のように述べている。

近郷ハ勿論、東京其他各地より佐原の山車を観んものと、馳せ集り無庸数万の人出であつた。

文部省ハ文化財関係の係官を出張せしめて、記録映画を撮り、幣台並ニ市街の情景を録音し更ニ各大小の新聞記者団の来往、繁クカメ

ラマンは四方に飛び、外人客のカメラマンも二、三、見え其の盛況ハ筆舌ニ尽し得ませんでした。

そして時間は進み「古典的な引継、並ニ引別れ行事ハ厳肅の中二目出度、完了」した。書き手はさらに、「此の郷土の誇りを堅持し益々旺んならしめ、佐原と言へバ山車を以て代表さる、様、切々希望いたして止みません」と述べている。

東関戸の書き手と同様、西関戸の書き手も幣台年番引継行事と引別行事だけが正式な幣台巡行の古色を残すものであると認めたくて、幣台引き廻しの活況を喜び、外部にたいして誇るべきものとして、その称揚に努めているのである。

## むすび

以上、神輿巡行と幣台巡行の分離過程を中心に、佐原市新宿の諏訪祭礼の歴史を通観してきた。ここでは要約をして結びとしたい。

まず、江戸時代の諏訪祭礼について。

①諏訪神社は、新宿の豪家であった伊能茂左衛門家によっておそらくは江戸前期に創建され、同じく豪家であった伊能権之丞家によって発展をみた。権之丞家の久胤の努力によって、諏訪神社は元禄六（一六九三）年に領主の興津氏から中田一反歩の寄進を受け、新宿の総鎮守としての地位を固めた。また、これは伝承であるが、享保年間（一七一六―一七三五）以前には御射山祭りの神事が始まっており、これには神幸も含まれていたという。

②享保六（一七二一）年または同一八（一七三三）年の旧八月二十七日にはじめて町々より練り物が出されたという伝承がある。いずれの伝承においても、関戸町が練り物行列の先頭であるとしている。また両伝承と

も、有力者である伊能権之丞智胤が中心となって祭礼運営の取り決めをしたとされている。

◎天保年間（一八三〇～一八四三）ごろの諏訪祭礼では、旧八月二七日、練り物行列が御旅所前から神輿行列の還幸を先導していたことが確認できる。そしてこの時点ですでに、雨天などの理由で神輿行列が途中で諏訪神社に戻っても、練り物行列は時間を延長してそのまま巡行を続ける規式が確立されていた。

①江戸後期には原則的に関戸町が永代触頭として祭礼全般の監督をおこなっていた。

次に近代の話に移る。明治一〇（一八七七）年一月、このころに幣台を常備する町が増えたことも何か影響したものか、新宿各町は諏訪祭礼の監督を本宿祇園祭礼に倣って年番制度でおこなうことにした。この当時、幣台を所有していたと思われる一五町のうち、上新町を除く一四町が順番に年番役を勤めることになったのである。

この年番役は翌年には神輿年番と幣台年番に分離した。本宿の年番制度からみても、この分離の可能性は織り込み済みであったと考えられる。神輿巡行は原則的に毎年おこなえたのに対し、付祭りは毎年はおこなえなかったからである。以後、付祭りの出される年には両年番は協力して諏訪祭礼の運営に当たった。しかし年番役が分離したことは、それぞれの巡行の独立性を高めることにも繋がったと考えられる。

さて、天保年間ごろの新宿には多くとも一〇台ほどの屋台があったと思われる。そしてこのころすでに雨天などのさいには幣台巡行は時間を延長しておこなわれていた。

明治初期には下宿町・下分町・橋本町および横宿両町が幣台を常備するに至った。これだけ幣台の数が増えると幣台巡行にはさらに時間がかかるようになる。とりわけ雨天などの場合、還幸路を一日で巡行するこ

とはほとんど不可能になり、近代の付祭りでは日延べが頻発した。近代にはまた、祭礼執行や道路使用の許可を警察から得なければならなくなった。佐原警察署は明治四二（一九〇九）年の祭礼前には祭礼期間の厳守などを訓示しており、日延べに無関心だったわけではない。

そこで日延べの頻発を解決するため、新宿惣町は長きにわたって努力していくことになる。運営方法の細かい改変や行事内容の変化は、そのほとんどがこの努力の過程で生じたものといえる。以下、その過程を整理してみよう。

明治前期の幣台巡行は、基本的には天保年間と同じくまず楽日の朝に御旅所前に番組順に整列し、そのあとすぐに神輿行列の還幸を先導するという形であったと思われる。ところが明治一九（一八八六）年の付祭りのさい、半ば偶発的に、幣台巡行を円滑に開始するため、中日の夜に御旅所前に幣台を整列させてそのまま一晚据え置きにしておく、という形に変わった。

ついで明治三三（一九〇〇）年の改正案によって、幣台巡行は中日と楽日の二日間に分けておこなうことになった。神輿行列の還幸より一日早く出発することになったのである。そのため、幣台整列は中日の朝に前倒しにされ、そのあとすぐに幣台巡行を開始することになった。この改正案は明治四二（一九〇九）年の付祭りではじめて実施された。

さらに大正一五（一九二六）年の付祭りでは幣台整列はさらに前倒しにされ、初日の夜に御旅所前に整列し、そのまま一晚据え置きにされて中日の朝の幣台巡行開始に備えるようになった。

このような、三度にわたる幣台整列日時の前倒しにもかかわらず、日延べをさけることは難しかった。大正一五（一九二六）年の幣台巡行は楽日を超えて九月二八日の午前五時に終わり、戦前の最後の付祭りである昭和一一（一九三六）年には風雨激しく、またもや楽日を超えて九月二八日の午前八時に巡行が終わった。

ところで、明治三三（一九〇〇）年の改正案は幣台巡行を二日に分けておこなうという、かなり抜本的な変更であった。ここで幣台巡行が神輿巡行から少なからず分離したといえる。これは同時に、幣台巡行の日数が一日から二日に増えたというであり、逆にいえば番組によらない自由な幣台引き廻しの時間が減ったということでもある。

しかし自由な幣台引き廻しを楽しまたいという心意がなかったわけではない。祭礼初日の二日前から遊引<sup>26</sup>乱引をおこなうことは幕末から戦前まで観察されるし、明治二〇年代には臨時練り物も出された。新宿の人々は幣台巡行だけでは満足できなかったのである。幣台巡行の義務もきちんと果たしつつ、自由な幣台引き廻しも充分おこなおうとしたのである。

また、明治四二（一九〇九）年に警察署が出した訓示には、算盤引き<sup>25</sup>や「の」の字廻し<sup>26</sup>を禁止した箇所がある。いずれも幣台の引き方の一つで、多大な危険と特異な技術を伴う。したがって付近に他の幣台がいるさいにはおこなえなかったはずである。<sup>27</sup>つまり幣台巡行中におこなわれたものではない。これらの特異な引き方の成立時期は不明だが、幣台巡行とは別の状況下で成立したことは間違いない。

これらの引き方は自分たちの楽しみであると同時に、「みせるもの」「みられるもの」として、観光客の目を意識したものである。その観光客については、幣台年番は明治時代から人数と動向に注目しており、大正二（一九一三）年や昭和一一（一九三六）年には交通機関への割引交渉もなされた。

昭和二五（一九五〇）年、ついに従来の幣台巡行は廃され、神輿巡行との長い分離過程は結末を迎えた。神輿巡行の先導役をできるだけ維持しつつも日延べは避けるという形での、長きにわたる努力と工夫が結局は実を結ばなかったといえる。

しかしまた、これによって原則的に町々は自由に幣台を引き廻せるこ

ともなり、その一方では、かつての幣台巡行の最終場面である「往時を偲ぶ」「古典的な」幣台年番引継行事と引別行事を残すことで、革新と伝統を二つながらに巧みに実現したともいえる。かくして現在まで連なる形に諏訪祭礼は生まれ変わったのである。

#### 註

(1) 江戸後期から今日に至るまで「屋台」と呼ぶのが普通であるが、佐原においては三つの呼称に意味上の差違はない。ただし江戸中期の「伊能豊秋日記」（後述）では、引き物の総称にはほとんど常に「だし」という語が使われているが、その一方、人形などの飾り物を載せた引き物を「だし」、台上に人間を乗せて踊りを演ずる引き物を「屋台」と称して書き分けている箇所もある。「伊能景利日記」（後述）にも「屋台おとり」という表現がある。しかし踊りの移動舞台という意味での屋台は江戸後期に消滅したようである。

(2) このほか西祭礼とも、山車なしに祭礼に参加する氏子町がいくつかある。

(3) この記録の最新の記事は文化七（一八一〇）年八月のものである。また、景敬の行動が直接形で記されている記事がいくつかある。以上のことから執筆年と著者を判断した。

(4) この生没年は「天保」「嘉永」ではなく、「御選官」による。

(5) 七月末の数日間には諏訪大社近くの狩り場（御射山）で神嘗を狩って神前に供えるという、古代以来の神事。

(6) 伊能茂左衛門景晴（一〇代目。一八〇八―一八八六）は明治一三、四（一八八〇、八二）年ごろ、自身の幼年期から中年期にかけての佐原の年中行事を回顧し記録した。その八月二七日条で、彼は諏訪祭礼の祭日の変更にかんして次のように説明している。祭日は「以前ハ七月ノ所同月ヲ未タ稲モ不刈取豊凶モ不判別ニ付八月ニ送リシト云」【小林 一九九八】。

実際にこの理由によって祭日が変更されたのかどうかは確かめようもないが、稲（ないし農作物一般）の豊凶が付祭りの実施の有無に影響したことは江戸後期の多くの史料で確かめられる。近代にも、豊作の年を選んで付祭りをおこなっていたことが、後述の「割合帳」の随所に記されている。豊作の年でないとき経済的・人的負担の面から付祭りを実施できなかったのである。

(7) 昭和二六（一九五二）年に莊厳寺は諏訪台天王台の現在地に移転。諏訪神社から徒歩五分ほどの所である。

(8) 伊能三郎右衛門家の分家である伊能七郎右衛門家の豊秋（？―一七七二）が

書いた私用日記。豊秋は本宿組の八日市場という町に居住していた関係でこの日記には祇園祭礼にかんする記述が多いが、諏訪祭礼にかんする記述も散見される。この日記中の両祭礼にかんする記述のほとんどは、「佐原市教育委員会編 二〇〇一―一四三―一五七」に収録されている。

- (9) 伊能三郎右衛門景利(六代目。一六六八―一七二六)の私用日記。本稿では伊能忠敬記念館蔵の複製本(資料番号R―一一―一からR―三―三)を利用。

- (10) この記録は橋本町の町代(惣代)を勤めていた惣右衛門と甚兵衛が記したもので、香取五郎氏による翻刻がある(香取 発行年不明)。以下、この記録中の諏訪祭礼にかんする記述の引用は同書の五五頁から六九頁による。その内容は「天保」の伝えるところとよく一致している。ただしそれは神輿巡行や御旅所・御飯屋設営にかんする記述が中心で、付祭りにかんする記述は皆無である。引用にさいしては適宜読点を補う。

- (11) この記録は嘉永四(一八五二)年八月に起筆され、慶応元(一八六五)年八月まで書き継がれている。この記録は短いもので、以下、引用にさいしては頁数を省く。

- (12) 聞き取り調査によると獅子は三匹獅子で、玉造村から男児三人が諏訪神社に來ていたが、おそらく昭和五〇(一九七五)年ごろに廃されたという(小森孝一氏・小出皓一氏・菅井源太郎氏の御教示)。

- 明治四二(一九〇九)年の諏訪祭礼の様子を描いた「佐原町諏訪神社大祭山車番組之図」(『実業新報』第九〇号附録、一九〇九年)には、神輿を先導する二本の鉾(持ち手は男性二人)と一本の小振りの櫓(持ち手は男児一人)と三匹獅子(獅子頭の被り物なので性別は不明だが、おそらく男児三人)が描かれ、これらに続く神輿は白衣を着た多数の人足(男性)によって担がれている。なお、この図は「清宮 二〇〇三 巻末」に収録されているほか、諏訪神社で複製品が売られている。

- (13) 下分区有文書。表紙には嘉永四(一八五二)年とあり、本文には文化四(一八〇七)年から慶応四(一八六八)年までの諸史料の写しが収められている。

- (14) 「嘉永」によると、元禄一四(一七〇一)年二月になされた諏訪神社の遷宮のさいに景胤が同社に奉納した神幣(前述)と、享保一八(一七三三)年一月になされた遷宮のさいに智胤が奉納した神幣が、弘化二(一八四五)年にも現存していたという。しかしどちらも大破していたため、この年、新宿から三人の者が諏訪神社内陣の修復の件で信州諏訪大社を訪れたついでに両神幣を諏訪大社に引き取ってもらい、かわりに同年八月二五日、すなわち諏訪祭礼の初日に景俊自身が新しい神幣を諏訪神社に奉納したという。

「天保」中の「代々申伝之事」のなかに、享保六(一七二一)年の祭礼運営の

取り決めを受け、智胤が神幣を取り付けた迦家臺を出したとあったが、これが事実とすれば、智胤は父景胤の奉納した神幣を自家の迦家臺に取り付けたと考えられる。またさらにこれが事実とすれば、当初は権之丞家の迦家臺に取り付けられていた神幣が、そののち神輿に取り付けられるように変わったということになる。

なお、下宿町では明治初期から本格的に屋台を出すようになったが、これが影響したものかどうか、管見のかぎり、近代史料には神幣家臺にかんする記述は見出せない。権之丞家では、明治初期ごろに迦家臺を出すのを止めたのであろうか。

- (15) 文政一三(一八三〇)年の諏訪祭礼のさい、関戸町は上川岸と喧嘩を起した。そのため天保二(一八三一)年の諏訪祭礼の開始まえに地頭所が同祭礼をしばらく差し止めると通告してきたので、この年の諏訪祭礼は神輿を莊嚴寺に飾って氏子が参詣する形にした。無論、屋台の巡行もなかった。関戸町は責任を取る形でこの年から祭礼の世話を遠慮した。この年はひとまず世話役を立てず、上宿組と下宿組が協力して祭礼運営をおこなった。さらに同年十一月には、新宿のみならず本宿の祇園祭礼もしばらく差し止める旨、地頭所が通告してきた。その後、天保六(一八三五)年二月になってようやく両祭礼とも神輿巡行のみは許可された。

この間、天保三(一八三二)年から天保五(一八三四)年までは、伊能権之丞家が(つまり景俊が)八月一日の廻状を惣町に送るなどして諏訪祭礼の世話をした。このとき、上宿町と横宿の町代がこれに協力した。

天保七(一八三六)年の祇園祭礼のさい、本宿惣町は許可のないまま屋台の引き出しまでもおこない、関東取締出役より御咎めを受けた。しかしこれによって、この直後に両祭礼とも屋台の引き出しが許されるようになったようである。

ところで天保六(一八三五)年以降も関戸町は世話役を遠慮していたため、莊嚴寺と上宿町・横宿が世話役という形になっていた。しかし必ずしもうまくいかなかったため、天保八(一八三七)年の諏訪祭礼終了後の九月一日、惣町町代が熟議のうえ関戸町に改めて世話役を依頼し、翌年から同町が世話役に復帰した。

以上については「天保」と「嘉永」のほか、以下の史料を参照(佐原市教育委員会編 二〇〇一―一六九―一七一。香取 発行年不明 八―九、六七―六八)。

- (16) ここで、町名にかんして補足しておく。南北の横宿を南北両町または北南両町ともいう。上新町と下新町を一括して両新町または新町ともいう。上・中・

下の「河岸」三町については「川岸」と記すほうが普通である。このうち中川岸を仲川岸と記すこともある。上川岸は本宿にある同名の町と区別して新上川岸ともいう。同様に、橋本町を本宿にある同名の町と区別して新橋本町ともいう。また、関戸を東西に分け、東側を東関戸または中郷町、西側を西関戸または居作町（居造町）ともいう。

- (17) 上新町が年番役を免除されたもう一つの理由は、明治初期の同町には十数軒しか家がなく、この役を勤めるのが困難だったからである〔清宮 二〇〇三三〇〕。

- (18) 上新町の番組位置について、『割合帳』の大正二（一九一三）年に次の記述がある。上新町は当初、同年の付祭りに幣台を出さないことにしていたが、旧八月二六日になって、やはり幣台を出すと幣台年番に伝えてきた。そこで急遽、五番の関戸町の次に同町を入れることになった。上新町が幣台を出すときは、必ず関戸町の次に並ぶことになっていたであろう。

- (19) 明治一四（一八八一）年条に「当乙年モ上宿御旅所」とあり、早くも御旅所設置場所の改正が反古となっていたことがわかる。

また、付祭りの出される年に下宿町に御旅所が設けられたことが確認できるのは大正一五（一九二六）年と昭和一〇（一九三五）年だけなので、近代においては上宿町に御旅所が設けられるのが通例であったとひとまず判断した。しかし『割合帳』には付祭りの出されない年の神輿巡行については記載がないので、神輿巡行だけが出された年も加えれば、あるいは下宿町に御旅所が設けられた年も多くなるかもしれない。ただし、近代においてどういう基準で年ごとの御旅所設置場所が決められていたのかは定かでない。

- (20) しかし明治四二（一九〇九）年までに一町分のずれが生じている。『議定書』どおり神輿年番が回っていったらこの年の年番は中宿であるはずだが、実際の年番はその次の南横宿になっているからである。明治二〇（一八八七）年以後、年番役を受け取らなかった町が一つあったことになる。

- (21) また明治二三（一八九〇）年には、祭礼とは別に、国会開設を祝して練り物が出されており、これも臨時練り物と呼ばれている。

- (22) 「鎮守御祭礼年々凡覽並町内盛一条之事」には、安政二（一八五五）年は八月二三日より屋台を引き出したと書かれている。

明治四二（一九〇九）年の付祭りにさいして出された警察署からの通知には、「例祭」は旧八月二五日から二七日までであるが、「本祭礼ノ折は廿三日ヨリ山車ヲ引出ス」とある。そして幣台年番ではこれを「旧慣」と記している。神事と神輿巡行を「例祭」と、これに付祭りが伴う場合を「本祭礼」と称していたことがわかる。本祭礼を本祭または大祭ともいう。

大正元（一九一二）年から祭礼期間は新暦九月二五日より二七日までとなったが、大正一五（一九二六）年の付祭りでは、新暦九月のやはり二三日から遊引が始まっている。この日「吉例ニ依り諏訪神社・香取神宮に町内安全を祈願し、同日より、早くも山車を引き初めたり」とある。あるいは幕末にはすでにこの祈願があり、遊引もその直後に始められていたのであろうか。

- (23) 現在では、三年ごとに幣台年番引継行事（と引別行事）がなされることになっているが〔清宮 二〇〇三三〇〕、この行事はやはり中日の夜におこなわれている。初日と楽日、および中日の幣台年番引継行事以外の時間帯には、乱引がおこなわれている。幣台年番引継行事のない年にも幣台は出され、この場合は基本的に三日間ずっと乱引がおこなわれている。

また今日では、幣台年番引継行事のない年を例祭、ある年を本祭と呼んでいる。昭和後期以降、幣台を毎年出すのが普通になったことよって名辞の意味が註（22）のものから変化したのである。

- (24) 九月末は暴風雨の季節でたびたび祭礼の妨げとなっていたので、この改正がなされたという。祭礼期間は昭和五一（一九七六）年にさらに改正され、一〇月の第二土曜日を中日とする三日間となり、現在に至っている〔清宮 二〇〇三三〇〕。

- (25) 停止している幣台を急発進させ、直線に数十メートルほど高速で走らせてから急停止させ、反転せずにそのまま高速で逆進させ、再び急停止させる、という引き方。連続して二、三往復することもある。

- (26) 「の」の字を描くように幣台をできるだけ小回りに高速で回転させる引き方。

- (27) 「割合帳」の昭和三四（一九五九）年の幣台運営細則に、これらの引き方は「他町内の妨害に成らざる限り行ふも妨げなしと言へとも附近の状況等、危険防止に万全を期する事」とある。

#### 引用および参考文献

- 赤松宗旦 一九三八 『利根川図志』 岩波文庫  
宇野功一 二〇〇三 「千葉県佐原市諏訪神社所蔵の近代祭礼史料『幣臺規則並割合帳』について」上野和男編『伝統的・地方的都市の地域的特性とその変容に関する比較研究』国立歴史民俗博物館  
香取五郎 発行年不明 『諸用日記』 私家版  
小林裕美 一九九九 『伊能家文書』『雑記』に見る近世後期佐原の年中行事『町と村調査研究』二  
佐原市教育委員会編 二〇〇一 『佐原山車祭調査報告書』佐原市教育委員会  
佐原市役所編 一九六六 『佐原市史』 佐原市役所

清宮良造 二〇〇三 『定本 佐原の大祭 山車祭り』NPOまちおこし佐原の大祭  
振興協会

千葉県香取郡佐原町編 一九三一 『佐原町誌』千葉県香取郡佐原町

千葉県史編纂審議會編 一九五七 『千葉県史料 中世篇 香取文書』千葉県

千葉県史編纂審議會編 一九五八 『千葉県史料 近世篇 下總國上』千葉県

福原敏男 二〇〇一 『山車祭りの成立と展開』佐原市教育委員会編 『佐原山車祭  
調査報告書』佐原市教育委員会

脇田晴子 一九九九 『中世京都と祇園祭』中公新書

## 付記

本稿の成るにあたっては、諏訪神社宮司の伊能栄一氏、佐原商工会議所会頭の小  
森孝一氏、郷土史家の香取五郎氏、東関戸区の小出皓一氏、下宿区の清宮良造氏、  
下新町区の菅井源太郎氏をはじめ、佐原市の多くの方々のお世話になった。記して  
感謝する。

（国立歴史民俗博物館非常勤研究員、国立歴史民俗博物館共同研究研究  
協力者）

（二〇〇五年一月一七日受理、二〇〇五年二月八日審査終了）

◎ 附 録

(凡例)

- ・文中には適宜に句点、読点、並列点を施した。ただし「昭和三十四年度諏訪神社本祭」の項については、原文の句点と読点に従った。
- ・変体仮名は現行表記に改めた。
- ・助詞の「者」「茂」「江」「而」については小字で示した。
- ・繰り返し記号は「々」「ゝ」「ゞ」「ゞ」で、それぞれ漢字、平仮名、片仮名の場合を示した。ただし二字以上に渡る繰り返し記号についてはこれを記さず、当該文字で代用した。
- ・判読不能の文字は□で示した。
- ・割印が数箇所あったが、表記しなかった。
- ・誤字、脱字、衍字、および誤記などについては当該の文字・箇所を右横に丸括弧で傍註を施した。ただし、誤字のうち、正しい文字が容易に推測できると思われるものには傍註を施さなかった。
- ・本文中の丸括弧は、括弧内に「註」とあるものを除き、原文どおりとした。
- ・鍵括弧、傍点、振り仮名は原文どおりとした。

(表紙)

戊 明 治 十 一 年  
幣 臺 規 則 並 割 合 帳  
寅 八 月 吉 日

(裏表紙)

新 宿 惣 町 中

(本文)

一 新宿町長之儀は、去ル享保六年ヨリ当明治九丙子ニ至リ星霜百五十六年之間、臨事要用其外、鎮守祭典、供獅々・櫛ハ勿論、并附祭り遡物等ニ至ル迄、左之者組法ヲ以、

町組関戸始

旧拾四町

関戸町

上新町

上宿

上中宿

横宿町

中宿町

両新町

上河岸

中河岸

下河岸

若松町

橋本町

下分町

下宿町

右之通り今年迄、不易ニ関戸町ニ而、諸事世話方致し来候処、今般改正之御治世ニ基、惣町協儀之上、町々車輪之如く隔年二年番役相勤可申様、更ニ取極候事。

議定書

一 今般触頭之儀は改正。年番は別冊議定書之通。附祭り遡物順廻し、年番町始メ次第順席は勿論、新・本両宿隔年之儀、條約茂有之候得共、其年柄之善不善は難斗候ニ付、附祭皆休之年ハ累年ニ相成候共、其町ニ留置、遡物順廻首尾能相濟候へは、速ニ次番江相送り可申事。

右之通り惣町一同熟議之上、確定候処、依而連印し、依而連印如件。

明治十年

第一月廿五日

北横宿	丑年 木内 芳兵衛	寅年 小川 喜右衛門	卯年 飯嶋 四郎兵衛	辰年 萩原 久右衛門
高田 喜兵衛	箕輪 喜兵衛	下新町	郡 紋三郎	上河岸
若松町				

大木 惣蔵	巳年 五十嵐 兼吉	午年 立岡 治兵衛	未年 渡辺 金蔵	申年 吉永 又兵衛	酉年 岡沢 貞助	戌年 石毛 儀助	下河岸
中宿町	南横宿	小倉 幸介	上宿町	橋本町	平塚 新兵衛	岡田 八十七	吉田 奥三郎
金田 平左衛門			八代 四郎兵衛				



同十三年同断

同 十四年

右は例年之通り附祭迄幣台協議決定之際、

左ニ定約

第壹

一 旧八月廿三日、御神輿并ニ遷物両番、番前後六町ニて惣町道路相改メ、若惡道之場所所有之候節は其町組長ト相談之上、不都合無之様可取斗事。

第貳

一 遷物巡廻道筋之儀、当明治十四年已、更ニ改正し、一号上宿、二号諏訪山ノ下、三号居造、四号中郷町、五号南北両町、六号下分町、七号橋本町、八号若松町、九号下新町、十号下宿町、十一号南北両町、十式号田中、十三号中川岸、十四号下川岸、十五号中川岸、十六号上川岸、十七号橋本町、十八号下分・下宿両町、十九号下新町、式十一号上新町、廿式号上中宿、中宿ニて引別相成候。右取極メニ相成、画図面別紙ニ有之（註。調査時に存在せず）候也。

但し当乙年モ上宿御旅所ニ付、右引初メ候事。

第三

一 祭事中、何レノ町ニおゐて不行届き候は、幣台引廻之節、若行当り有之候とも、高声ニて異論有之間敷事。

第四

一 附祭り幣台取極メ候ニは、例年之通り旧八月一日集会候上、更ニ決定可致事。

第五

一 旧八月廿六日夜より至廿七日、中食并ニ提灯其他餘事之議ハ年番町より順々ニ必達候事。

右定約之通り旧八月廿五日より廿七日まで首尾能順廻候ニ付、次年番下

新町江前後立会之上相渡し候也。

明治十四年

旧九月日

前年番

北横宿町

年 番

若松町

後年番

下新町

立会人

上川岸町

年番 下新町

議着控

壱号

幣台年番之議、明治十四年若松町從引受候處、兎角故障有之、不斗五ヶ年之霜雪ヲ經過致、当十九年ニ至始メテ年番相勤メ候事ニ相定申候、非然右様ニテは甚不都合ニ付、向後は期限三ヶ年ト相定、右年限相過候へは、遷物執行之有無不拘次町へ可相渡旨、惣町協議之上、決定候事。

式号

当明治十九年、例祭之議は虎列刺病流行ニ付、県庁ヨリ停止之達有之。依之惣町協議之上、旧九月十五日マデ延期致候處、其節ニ至未夕病勢盛ニテ、執行無覺束、又々同月廿七日迄日延約定候。然處、同廿六日解除之趣達ニ相成、依之、旧十月六日ヨリ八日迄三日間執行可致旨届出、早朝ヨリ順回相始申候。然處、第三日目、本日夕刻より降雨ニテ順回致兼、一日之日延届出、翌九日順回候處、短日之事故引殘ニ相成、依之午後十二時マテ刻延届出、是又聞届ニ相成、其夜午後期刻ニ引別レ、目出度相

勤、更二次町上川岸町へ番（註。以下、数文字分空白）

前年番

若松町

年番

下新町

後年番

上川岸町

立会

中宿町

三号

届書之写

幣台仮家前へ据置届

右申上候本村新宿鎮守諏訪大神例祭之義、昨日・今日・明日・明三日ト、

三日間兼而御届申上置、右届出文中ニ、三日は午後八時ヨリ仮屋前へ番

番二番ト順ニ遡物相揃、神輿巡行ニ随ヒ町々遡物歩行、午後十二時限り

引別レ町々へ引渡申候ト御届及置候得とも、今日、遡物、町々遡物歩

行、午後十二時限り鳴り物相止メ、目下短日ニも有之候ニ付、同夜は遡

物不残番人附置仮屋前へ据置、明三日午前七時神輿出御、右巡行ニ随ヒ

遡物町々遡歩行、午後十二時限り引分レ町々へ取申候。花神輿は十二時

前ト雖モ巡行終レは速ニ本社へ相納申候。依而此段御届申上候成也。

明治十九年十一月二日

氏子惣代

中川岸町 印

下川岸町 印

下分町 印

下新町 印

上川岸町 印

若松町 印

戸長役場案 印

佐原警察署長

千葉県警部 平田友雄殿

四号

祭事遡物之義日延届

右申上候諏訪大神例祭遡物、町々遡歩行候義は今日午後十二時限り引別

レ各町へ引渡候事ニ兼而御届申上置候処、短日ニも有之候へは、人歩之

者何レニモ相勞し連モ時間通りニハ不行届ば、時間延相願、結果ヲ可見

ト存候へとも、右順序ニ至ル間數ト存候間、明日白昼丈町々遡歩行、

各町へ引別レ候様仕度候間、此段御届申候也。

同年同月三日

五号

兼而棒呈シタル祭事

時間延御届

右申上候諏訪大神例祭遡物町々巡行之義、今日白昼ヲ限り兼テ時間延

之義御届及ヒ精々注意遡歩行居候得とも、如何ニも短日候へは、時々之

降雨、道路烈敷場所等有之、思ヒ之外抄取不申、就而八本日午後十二時

限りニハ、何レニスルモ鳴物相止メ町々へ引取可申事ニ為相運候間、何

卒特別ヲ以御許容被成下度、此段御届申上候也。

同年同月四日

右

年番

上川岸町

明治貳拾年

旧八月朔日

惣町協議之上休

年番

上川岸町

当明治廿元年、祭典之儀は例ニ抛テ陰曆八月朔日総町集会上、附祭則チ遡物執行有無協儀ニ及シ、執行ニ賛成下ル者過半ニ及ベリ。加之、上新町之如ハ本式ニ幣台ノ組立ヲ為シ順行ストアリ。故ニ一統実行セシ事ニ決議セリ。因テ其筋ヘ式ノ如ク届書ノ手続ヲ為シ、遡物巡回ヲ執行セリ。然ルニ祭当日、刻ヲ陰曆八月廿七日、連行ニ至ル時間ニ限リアルヲ以テ総町ヲシテ満回スル能ス。為ニ翌廿八日午前六時より拾時マテノ日延届出ヲ為シ、該時間ヲ期シ巡回終テ総町立会例式ヲ執行シ、各自引別、正ニ良果ヲ得、更ニ次年番中宿町へ前後両町立会、引継タルヲ以テ茲ニ概況ヲ書載シ置者也。

明治廿一年十月三日

陰曆八月廿八日

一 届書乃日延書ノ儀は記載可致之處、其記載同文ニ付、略之。

前年番

下新町

年番

上河岸町

後年番

南横宿町  
(×中宿町)

立会

中宿町  
(×南横宿町)

年番

中宿町

明治廿貳年旧八月朔日、例年之通惣町集会、祭事協議候處、附祭り遡物等相休ミ。

但シ祭日ニ至リ、各町臨時遡物出ル。

明治廿三年旧八月朔日、例年之通惣町集会上、祭事協議候處、附祭り遡物等相休ミ。前年之通洪水。

但シ祭日、各町、遡物出ス。尚又、国会開節ニ付、臨時遡物出ル。

明治廿四年旧八月朔日、例年之通り祭事協議候處、附祭遡物等、就行可致様取究相成候。本年ハ五穀好実繁、誠ニ古来稀成豊作。旧曆八月廿三日幣台引始メ廿六日迄各町遊引。廿七日上宿ヨリ諏訪神社之前ヲ通関戸町ニテ中食、夫ヨリ北横宿・南横宿・下宿、下新町ニテ引別レ、廿八日、下新町ヨリ上新町・上仲宿・中宿・下宿・下分、橋本町ニテ中食、夫ヨリ若松町・下新町、又、下宿・下分、橋本町ニ留置、廿九日、橋本ヨリ上川岸・中川岸・下川岸三町ニテ中食、夫ヨリ中川岸裏通り引上、関戸・北横宿・南横宿・下宿、中宿・上仲宿・上宿末三ヶ町ニ並ヘ引別レ相成候。見物人群集、町中錐立<sup>マツ</sup>立際無。  
次年番南横宿町江引統候也。

前年番

上川岸町

年番

中宿町

後年番

南横宿町

立会

上宿町

明治廿四年 辛卯十月七日

旧九月五日

年番

南横宿町

明治廿五年陰曆八月朔日、例年之通惣町集会之上、祭典附祭り等協議致し候処、惣町は投票ニテ過半数不賛成ニ付、相休。

但シ祭典当日ニ至リ各町臨時ニ遷物シ候。

明治廿六年鎮守祭典之議、例年之如ク、陰曆八月朔日新宿惣町集会致シ、本年者近年ニ稀成ル豊作ニ付、祭典附祭り、則チ遷物等引廻シ、執行之議相談致し候処、惣町者投票ニ相成、開票多数の賛成ニ依リテ、全月廿三日午后ヨリ各町遊引相始メ、全廿六日ニ至リ、午后四時頃ヨリ年番町初メ惣町者上宿町へ順次集合、遷物等者徹夜据置。翌廿七日ニ至リ、午前降雨ニ付、正午ヨリ、右上宿町へ集合之順ニ依リ全町を發車し、諏訪神社の前を経テ関戸町ニ至リ、漸ク午后七時頃ニ昼飯を喫し、夫レヨリ北横宿町・南横宿町・下宿町を経テ下新町・上新町を廻リ上仲宿町へ至リ夫レヨリ中宿町・下宿町・下分町を経テ新橋本町へ至リ候処、時間者既ニ午后十二時を過キ、依テハ引廻シニ差支候ニ付、全町奈良屋の店頭を借り年番町前後三町ニテ、惣町へ右の趣意相談致し候処、惣町者一同日延ニ決シ、依テ遷物等者新橋元町へ順次徹夜据置。翌廿八日晴天。此日者參觀人群集大ニ雑踏、立錫之地無クの景況。依テ午前十一時ニ全町ヲ發車シ若松町を廻リ下新町ニ至リ、夫レヨリ下宿町・下分町・新橋町を経て上川岸町・中川岸町ニ及ヒ、年番町者既ニ下川岸町の地先ニ至。尤モ順路誠ニ渋難ニ付、時間者午后十二時を経過致し引廻シ困難ニ付、中川岸町八木善助殿店頭を借り、年番町前後三町ニテ惣町該趣意相談致し候処、惣町モ同意ニ付、日延ト決し、遷物等者其俣徹夜据置。翌廿九日ニ至リ、年番町先發ニ引出し候処、下川岸町者惣町之遷物を北賑橋の

先キ、則チ山本忠八殿前迄テ引入の申入ニ付、不止得、年番町、上宿町、中宿町の代トシテ新橋本町の三町ニテ、北賑橋の先キ、本宮仙太郎殿近所迄テ至リ、跡、下分町者北賑橋の際ニ控居リ、夫レヨリ惣町相談之上、中宿町ヨリ跡ハ順次引戻シ、夫レヨリ年番町先發ニテ中川岸町の裏道を引上、北横宿町を経テ南横宿町ニ至リ夕飯を喫、夫レヨリ下宿町・中宿町・上仲宿町を経テ上宿ニ至リ、全惣町引廻相済候ニ付、惣町の理事員、立集会之上、引別レの例式致シ、終ニ惣町へ引取の儀、年番町ヨリ順次ニ各町へ引取事ニ取究メ、應ニ引別レ候ナリ。

次年番上宿町へ引続キ致候也。

前年番	中宿町
当年番	南横宿
後年番	上宿町
立会町	新橋元町

明治廿六年十月十一日

陰曆九月 二日

年番

上宿町

明治廿七年、例祭之節は日清戦争事件ニ付、投票之結果幣台を休ミノ事ニ決ス。右ニ付、各町ニテモ臨時ニ幣台引出した町は更ニ無之候。

明治廿八年旧八月朔日(新九月十九日)、惣町集会(木内支店)。例ニ寄投票致した所、拾五ヶ町ノ内、白票十一黒票四。白票多数ニ付、幣台執行之事ニ決ス。同月廿三日、幣台引出した町も三、四ヶ町は有之候。当日廿五日ヨリ、各町定期に引出し申候。尤廿五、廿六日両日乱引。廿六日夜ハ御旅所へ番組ヲ以順次ニ列シ、其上立寄合ヲ致シ候(上宿、大川友次郎前)。集会之結果ハ、夜宮之儀ニ付、置据之事ニ相極り候。翌廿七

日早朝、雨模様ニ付、立寄合ヲ催ス（上宿、宮野伊十郎方）。当日之事故、少々空模様悪敷も引出し候方多数ニテ、引出し候事ニ相定り、順次引出し候。年番諏訪下へ差掛り候頃より意外之大風雨ニ相成、困難ヲ極メ候得共、定メ之事故関戸町石田楼前中食場所迄年番町は引付ケ、各町モ順次整列致候。意外之暴雨故、（関戸町、小□<sup>森カ</sup>常助方）立寄合致し候所、右訣果は引列<sup>引列</sup>レ之事ニ決シ、年番ヨリ順次各町へ引取候。右之暴雨ニテ、御神輿モ同日延と相成、（町長、伊能茂太郎氏方）同夜御一泊之事ニ候。翌廿八日、晴天ニテ各町トモ前日之困難ヲ忘レ勇ミ進ミテ前日引列<sup>引列</sup>レ之場所へ繰込<sup>繰込</sup>、夫ヨリ北横宿・南横宿ヲ練廻り下宿ヲ経テ下新町・上新町・上中宿・中宿・下宿・下分・橋本より若松町ヲ結ヒ、下新町ヨリ下宿へ出、下分・橋本ト順次廻り、夜十時頃ニ至リ（橋本、杉本新左衛門方）ニテ立寄合候所、訣果据置之事ニ決ス。翌廿九日、晴。上川岸（中食町）・中川岸・下川岸（此日中食は川岸三町ニマタガリ候）ニ至リ、年番町ハ北賑橋際迄引付ケ順次川岸辺へ整列相成候所、下川岸町より出洲、山本宅前迄引込候儀申出ニ付、（同町、宮本□□方）ニ而立寄合候訣果、関戸町・下宿町ノ発言ニテ出洲、山本前迄引入レ候儀、向來例ニ不相成候儀ニ候ハ、賛成之旨、他各町トモ同意見ニ付、本年ニ限り、申込之通り年番町ハ山本宅前迄引込順次ニ整列候。其上例ニ奇、跡置ニ順次繰戻シ、中川岸裏通ヲ引上ケ、関戸町石田楼之脇ヲ通り、北横宿・南横宿・下宿・中宿・上仲宿ヲ経テ、御旅所前へ年番引付、順次整列候（上宿、大川友次郎方）。弥引分之事ニ立寄合致シ、目出度引分レ之事ニ相定り、年番町音頭ヲ取、掌ヲ打、各町万歳ヲ唱イ終テ年番町ヲ先トシテ各自町へ引分レ候。雨天等ノ為メ長祭之所、異情無之、誠ニ日<sup>マツ</sup>芳度結可候上、次年番橋本町へ引統<sup>引統</sup>致候也。

前年番 南横宿町  
当年番 上宿町  
次年番 橋本町

立会町 下分町  
明治廿八年十月三十日  
陰曆九月十三日

年番  
新橋本町（註。橋本町に同じ）

明治廿九年旧八月朔日、惣町集会（三五楼）。例ニ奇、投票致候所、拾五ヶ町ノ内、白票七黒票八。依テ黒多数ニ付、本年は相休之事ニ決ス。

前年番 上宿町  
当年番 新橋本町  
後年番 下分町

明治廿九年旧八月朔日

年番  
橋本町

明治三十年旧八月朔日、惣町集会（三五楼）。例ニ奇、投票可致之所、新八月廿六日付ケニテ本町々会諸氏ヨリ勧告之次第モ有之候ニ付、如何致し可申哉ト各町ニ協議候所、昨年之水害後ニモ有之、旁以投票ナク相休ミ候方可然ト発儀者有之候所、続々賛成アリ、半数以上之同意ニ候間、無投票ニ而休ミニ決シ申候。

勧告書写左ニ

佐原町新宿鎮守諏訪神社例祭執行ニ付、年来氏子之餘興トシテ各町山車巡行ノ儀ハ費用巨額ニ達シ、各町決算之後、細民之迷惑不少、然ル処、本年ノ例祭は余興之計画有之哉ト伝聞致候。定テ来旧曆八朔之集会ニ決定相成候事ト存候。各位モ御熟知之通、本年十二月迄ハ英照皇太后陛下御大喪期限中ニシテ、日本臣民之本分トシテ何レモ謹慎ヲ守ルヘキ筈、且、昨年九月之大水害ニテ、本町民中、各地有志之義捐金ヲ受ケタル向

モ不少、目下、水害地地租免除出願中ニモ有之、加之、町税中、土木費・水防費等之負担ニ苦ミ、町債ヲ起シ僅ニ支払ヲ為シ居候場合、旁来八月之例祭ハ式ニ依リ神輿渡御ニ止メ、餘興之儀ハ見合方可然ト相考候。各位モ前条之事体ハ十分御承知被下候間、御部内氏子各々へ右趣意懇簡御説示、山車巡行ハ見合セラレ候様致度、此之段及御勧告候也。

明治三十年八月廿六日

伊能 茂太郎 印  
馬場 善兵衛 印  
小倉 九兵衛 印  
田川 常次郎 印  
久保木 総次郎 印  
八木 慶太郎 印  
桜井 仁兵衛 印  
清宮 利右衛門 印  
鈴木 関七 印

新宿総町理事員御中

前年番 上宿町  
当年番 橋本町  
後年番 下分町

明治三十年旧八月朔日

年番

橋本町

三十一年旧八月一日、惣町集会ヲ木内楼ニ開キ、上川岸・中川岸・下川岸之申出ニ、本年ハ非常之洪水ニテ困難不尠、依テ附祭之義、年延願出ニ付、年番ニテ各町へ相計リ候所、拾式ヶ町之賛成ニテ附祭之儀、年延ト決定ス。当年番モ満三ヶ年ナレハ各町協議之上、壹ヶ年ヲ延期ス。

前年番 上宿町  
年番 橋本町  
后年番 下分町  
三十一年旧八月一日

年番

新橋本町

三拾貳年旧八月朔日、惣町集会ヲ若松町三五楼ニ開ク。例ニヨリ附祭り之投票致し候所、白票拾参黒票貳ヶ。多数ニテ幣台執行之事ニ決ス。同月廿三日ヨリ幣台引出し、廿五日ヨリハ各町定期ニ引出し申候。廿五日・廿六日両日乱引。廿六日夜ハ御旅所へ番組ヲ以テ列シ候。同夜、雨模様ニ付、各町協議之上、同夜引分候。廿七日午前九時、各町御旅所へ番組ニテ列ス。其内北横宿町不参ニテ、三町（註。幣台年番前後三町）ヨリ請求数度ニ及ビ、午后ニ相成、番組ニテ引出ス。諏訪下道路悪敷故、手間取候。幣台置据ニテ各町帰宅ス。廿八日早朝ヨリ引出ス約束之所、中宿町不参ニテ手間取候。爾後引出ス。関戸・横宿ヨリ新町ヲ経テ橋本・若松町・新町ヲ廻リ、橋本ニテ深更ニ付、各町協議之上置据ト相成。廿九日早朝ヨリ引出シ川岸三町ヲ経テ関戸・横宿通り、上宿御旅所ニテ各町協議之上、順番ヲ以テ引分レ申候。右目出度結了候上、次年番下分町へ引継申候也。

明治三十二年

旧八月

前年番 上宿町  
当年番 橋本町  
後年番 下分町  
立会町 中川岸町

二伸

三拾貳年旧八月朔日、惣町集会之際、居造町（註。関戸町西部）ヨリ岩ヶ崎堺迄幣台引入之義、申出ニ付、惣町協儀之上、引入ル事ニ相成、本年始テ岩ヶ崎堺迄、各町番組ニテ引入申候。

年番

年番

下分町

明治三拾三年、下分町年番より折要敷不作続つ、キ為、本祭礼、各町協儀之上ニテ、屋台引出ス事見合ハセリ。

明治三十三年旧八月

立合人

村林

元木

諏訪神社例祭執行之儀ニ付、近年秩序漸ク紊レ儀式宣シキヲ得ス、弊害百出敬神ノ誠意或ハ空シカラントス。今ニシテ矯正セズレハ神誠ヲ流カスノ害少シトセズ、左ニ改正ス。

第一 祭当日は旧八月十五日ヨリ十七日ト改正スル。又、秋季参会日ハ旧七月廿日トス。

第二 神輿御浜下リノ日、例祭各区之供奉員ハ午後一時迄ニ必ス本社ニ参集スヘシ。

第三 神輿御浜下リノ日ハ、遅クモ午後六時迄ニ御旅所ニ納輿スル事。

第四 宵宮ノ前夜即御浜下リ納輿ノ時ヨリ、例祭当日神輿御旅所出御ノ時迄、年番（註。神輿年番であらう）前後三町ニ於テ管理スル事。

第五 例祭当日、各区ノ供奉員ハ午前八時ニ御旅所ニ必ス参集シ、午

前第九時ヨリ神輿渡御ヲ始メ、午後第六時ニ本社へ還御スル事。

第六 神輿渡御ノ途中、休息所ハ各区一ヶ所宛トスル事。

第七 御浜下并例祭当日、神輿渡御ノ際、行列ノ順序ヲ左ノ通り相定ム

ル事。

一 根越神台

二 鉾

三 獅々

四 町長并神社関係アル供奉員

五 神輿

六 斎主神職

七 区長以下氏子総代

第三・第四・第七ノ行列ニ棒突二人ヲ集スル事。

第八 神輿渡御ニ要スル輿丁ノ定員ハ、年番（註。神輿年番であらう）ノ区長ニ於テ之ヲ傭入ルヘキ輿丁定員ヲ廿人・輿丁頭取ヲ二人ト

定ム。頭取日給各一円ツ、輿丁傭人ニ付、御浜下五拾銭、当日八拾銭。

第九 神輿渡御ニ関スル一切ノ事件ハ、年番（註。神輿年番であらう）前後并ニ各区長及其責ニ任シ、重大ナル事件ニ就キテハ町長并ニ

神社ニ関係アル供奉員ノ意見ヲ聴クヘキ事。

第十 御旅所ノ建設・取払ハ、年番（註。兩年番であらう）ヲ免除セシ

上新町及台町・田中町・横川岸町ノ四町ニ於テ輪番ニ担任スル事。

諏訪神社例祭山車巡行ニ関スル改正案

一 山車ハ年豊穰ニ関セス明治三十六年ヨリ向五ヶ年目毎ニ正式ノ巡行ヲ為ス事。若凶年ニ当ル時ハ、協議ノ上翌年ニ延期スル事。

二 山車并附属品ノ虫干ヲ為スハ苦シカラスト雖トモ、此場合ニハ他区ニ出タサ、ル事。

三 正式ノ巡行ヲ為ス場合ニ於テハ、左ノ日割ト為スヘキ事。御浜下リ

日ハ巡行随意トス。宵宮当日午前八時までニ御旅所々在ノ場所ニ順序ノ位置ニ参列シ、神輿渡御ノ路順ニ依リ巡行ヲ開始シ、例祭当日

ニ涉リ、神輿本社へ還御ノ後、六時以内（註。六時間以内）ニ巡行ヲオウルヘキ、但シ、風雨其他止ムヲ得サル事故ニ依リ翌日ニ涉リ

巡行ヲ為サントス場合ハ、前後年番区長ヨリ其筋へ届出ル事。

折要敷不作つ、キ之為、本祭礼、惣町協儀之上、見合ル事。



明治三十三年旧八月 年 番  
下分区

前年番 新橋本  
当年番 下分区  
後年番 仲川岸

明治三十四年ヨリ三十六年迄ハ違作又ハ水害ノ為メ、三十七、八年ハ日露戦争ノ為メ、三十九年ヨリ四十一年迄ハ大戦争後不景氣ノ為メ、且ツ戊辰詔勅ノ国民勤儉ノ御旨意ヲ奉シ、山車巡行ハ延期ト相成、其間当年番モ町規五年以上持続セシニ付キ、年番引渡し度申出候モ、本祭執行ノ上テ為サルヘキ様各町ノ意見ニ基キ本年（註。明治四十二年）迄経過致し候。

本年は氣候適順ニシテ古来稀有ノ大豊穰ニテ商況モ稍快復セシ折柄ナレバ、八朔集会木内楼ノ席上ニテ、各町ノ賛助ヲ得テ本祭礼執行致し候上ハ協議ニ及ヒ候処、兎に角例年ノ投票ノ声、然カルベキヨシ申出ノ声有之、投票ノ結果、白票十一黒票三ノ大多数ニテ附祭り執行ノ事ニ決定セリ。

是レヨリ先キ警察署ヨリ輿年番・屋台年番前後ノ各区長召換相成リ、山車巡行次第ニ付キ、訓示有之候。

当町祭礼ハ、本年ハ豊作ニテ山車巡行ニ決定セシ由、祭礼ニ付キテハ本県ヨリモ論達ノ趣意モ有之候ニ付キ、左に心得アリタシ。

神輿渡御ハ最モ敬神ノ誠意ヲ表シ秩序正シク静穩ニ執行サレタシ。若シ神誠ヲ流カスノ行為アリタルトキハ、警察ハ容捨ナク法規ヲ勵行スベシ。山車巡行ノ事ハ、聞ク所ニヨレバ例祭ノ届ケ出カ旧八月廿五・廿六・廿七日ナルモ、本祭礼ノ折ハ廿三日ヨリ山車ヲ引出ス如キハ儀式ノ上ニモ経費ノ上ニ於テモ斯ル弊害ハ矯正シ、本年ヨリハ廿五日ヨリ廿七日迄に三日テ終了シ、費用ハ務メテ節約シ、旧来ノ慣例モ漸次改善シ、屋台行

動ノ如キ、急進激退（註。算盤引きという、幣台の引き方の一つ）或ハ之ノ字ヒキ（註。のの字廻し。幣台の引き方の一つ）等ハ許サズ、醉漢又ハ乱暴浪藉等ノ行為アル者ハ容捨ナク新刑法ヲ勵行スベシ。予メ部内ヘ注意アリタキ旨、懇々訓示ニ基キ、年番ハ前後三町ト協議ノ上、左ノ規約ヲ作成シ惣町ノ協定ヲ得タリ。

#### 屋台行動規約

- 一 屋台ハ廿五日朝ヨリ自由行動トス。
- 二 自由行動ノ順路ハ下記之通りトス。
- 三 川岸廻リハ総テ下ヨリ上ニあかる事。橋本ヨリ川岸ヘ下ル事ヲ得ズ。
- 四 橋本ヨリ若松町ヲ廻ハリ下新町ヘ出ル事。下新町ヨリ若松町ヘ廻ハル事ヲ得ズ。
- 五 上宿ヨリ関戸ヘ廻ハル事。関戸ヨリ上宿ヘ廻ハル事ヲ得ズ。下新町ヨリ上宿ヘ廻ハル事。
- 六 廿六日ハ朝九時迄ニ上宿御旅所ヘ行列スル事。時間ハ勵行ス。
- 七 年番ハ十時ニ上宿ヨリ関戸ニ進ム。各町ハ統テ順次進行スル事。
- 八 中喰ハ関戸ニ至リテスル事。夫レヨリ横宿・下宿ヲ経テ下新町・上新町ヲ廻ハリ御旅所ヘ据置キノ事。但シ提灯ハ十二時迄ツケ置キ芸座ハ十二時迄ハヤス事。  
(午前〇時)
- 九 廿七日ハ午前九時ヨリ年番ハ進行ヲ始メ御旅所ヨリ橋本ニ至リ若松町・下新町ヲ結ヒ橋本ヨリ川岸三町ヲ経テ上宿ヘ引上ル事。
- 十 上宿ニテ引分ケ。時間ハ午後十一時ニ屋台行列順ヲ以テ各町々ヘ引返ル事。
- 十一 屋台引違イノ際、万一誤テ行違ヒヲ生スル事アルモ互ニ譲リ合イ必ス衝突セザル事。
- 十二 行列ノ間隔ハ十五間ヲ以テ順次進行スル事。

屋台年番 下分区

次年番	中川岸町
前年番	橋本町
神輿年番	南横宿町
次年番	上宿町
前年番	中宿町

電線引上ケニ付、莊嚴寺ニ惣町集会ヲ開ク。全線引上経費、凡百貳拾円余ヲ要ス。

電線下地上迄実測左に

関戸	鈴木関七氏ノ角	一丈四尺
東関戸		貳丈六尺
北横宿		貳丈三尺
横宿		貳丈四尺
下分角		貳丈貳尺

右費用多額ニ上リ議論百出。全夜十二時ニ終ルモ決定セス散会セリ。

翌日、田中・横川岸両町ヨリ左之条件ニテ仲裁アリタリ。

岩ヶ崎界迄引入レタルヲ本年ハ西関戸ト東関戸ノ堺ナル石橋へ年番ノ屋台ヲ置き、以下間隔ヲ七間位ニテ行列シ三時間据置きノ事。

下川岸電線引上費ハ、八朔集会ノ節、惣町費用と決儀セシヲ下かし町支出ニ為ス事。

下分町ノ角引上ヲ下分町負担トスル事。

右條件ニテ両町ノ尽力ニヨリ各町トモ承諾ヲ得テ決定セリ。

各町ノ屋台世話役平井樓ニ集会、旧慣ニヨリ廿三日ヨリ山車引出シヲ警察へ出願セシモ許可セラレズ、引ヘキト年番へ続々申出ノ者モ有之、不已得前後三時協儀ノ上、各町ノ協賛ヲ得テ廿四日ノ夜ヨリ山車引出シヲ出願、許可ヲ得テ同夜ヨリ引出シタリ。

廿六日、上宿、行列各町準備相整へ候、時ハ午後二時過ぎテ、当日ハ折

悪敷朝来曇天ニテ出発當時ハ天候益々悪シク小雨トナリ、上宿ノ玉崎岩太郎氏ノ店前ニテ立寄合ヲ為シ、各町ノ意見ヲ諮リ、多ニテ進行ト決シ年番ノ進行ヲ始メシハ午後三時過ぎナリ。幸ニモ雨キレ、西関戸ニテ約束ノ時間ヲ据置き、夫レヨリ御旅所へ順次行列ス。曇天ナルモ各町協儀ノ上、据置キニ決定セリ。

廿七日、御旅所出発。下新町ヨリ上新町ヲ結ヒ、下宿・下分・橋本ヲ經テ若松町ヲ結ブ。時ニ午後十一時過ぎ、奈良屋ノ店前ニテ立寄合ヲ為シ、置据ノ俟日延ニ決セリ。

廿八日、橋本町出発。上川岸ヨリ仲・下川岸ニ至リシ時ハ天候險惡大雨トナリ、全町中食少休息ノ後、進行ヲ継続ス。雨益々繁ク寒氣加ハリシモ、各々勇氣ヲ鼓シ中川岸ヲ上リ年番ハ横宿井戸久樓ノ前迄進行。順次引ツクルヲ見ル時ハ十二時過ぎナリ。平井樓前テ立寄合ヲ為シ、大雨ノ進行ニテ人足ハ疲勞シ、時間モ十二時ヲ過キテ、例年ノ御旅所迄進行ハ困難ニ付キ、横宿通りへ整列ノ上引分レヲ協儀ス。各町ノ賛成ヲ得テ決定。直チニ整列ノ上、年番、前後、区長、世話役ニテ各町へ挨拶致シ、芽出度順次引分レヲ為シタリ。時ニ午前二時過ぎナリ。

本年ハ十一年目ノ大祭ニテ、前々ヨリ各地方ノ大評判ニテ曇天或ハ雨天ナルニモ不拘、汽車・汽船ハ発着毎ニ溢ル、斗リノ乗客ニテ、小野川ハ舟ニテ埋マリ、其他近郷ヨリノ群衆ハ四、五万ヲ算シ、町内中一時ハ人ヲ以テ埋メ、往來モ出来サル有様。雑踏ノ状実ニ佐原町空前ノ人出ナラシ。

年番當事者ノ不行届ニモ不拘、少シノ事故モナク芽出度結了ヲ得タルハ前後町ノ協力ト各町ノ援護ノ賜物ト深く感謝ノ意ヲ表シ茲ニ擱筆ス。右芽出度次年番へ引継ぎ候也。

年	下分町
次年番	仲川岸町
前年番	橋本町

立会 下川岸町

明治四十二年旧八月

(註。年番 中川岸)

明治四拾参年、大水害ニテ嶋方(註。佐原町北部。利根川を挟んで新宿・本宿の対岸)不作ニ付、人氣相立チ不申。下川岸及中川岸・上川岸家奥進水に相成、八月初作会ハ神輿のみて山車之協議会ハ中止に相成候。明治四拾四年、作ハ上等、作人氣相立チ候得共、前年之水害ニテ山車引廻し初作会は議論種々ニ渡り、又年番ハ、本年山車引廻、賛成諸君が無き時ハ明年に相成候上ハ、電燈・電話線、無論山車引廻しハ不出来、依テ本年是非共賛成得タクト申出、投票ヲナシ、老票違ヒにて見合セに相成候。

明治四拾五年ハ作ハ上等候得共、天皇、七月拾九日ヨリ御発病、七月廿九日、御崩御、九月十三日、大葬相成候。初集会。諏訪神輿各町廻リヲ中止シテ神社祭典ハ九月廿五日。廿七日ハ神官伊能平左衛門氏宅名ニテ祭式ヲナシ、年番前後代理ナシ、三拝ス。

大正元年八月一日改ル。

大正貳年ハ豊作ニテ、九月一日初作会を平井楼ニて開き、四拾五年ヨリ大正貳年迄ニ電線・電話か雲巢の如く相成、各町へ屋台引廻し等ノ事ハ出来ザル者ト相定メ居、又有町にてハ屋台を外町村に売捌手配迄いたし候次第。然ルに年番は大意に調査なし、必ず引廻しか出来ト各区長に申出で、例年の投票をなし、白九票黒か四票にて、山車引廻しの事ニ相成候。

氣船は貳割引、氣車ハ二割引、交渉ス。

引廻しの改メ

廿四日ヨリ引始メ、廿五日晴天、廿六日午後ヨリ雨天、廿七日午后四時

天氣ナリ、廿八日之朝迄引廻ス。

諏訪神社祭典及

山車屋台引廻し契約

第一 廿四より山車屋台引廻し自由、各町進行スル事。第廿四日、関戸石田直吉之角ヨリ中川岸区へ出て下川岸へ進行スル事、下川岸より新橋本へ進行スル事、又下宿より下新町区・上新町区進む事、上宿より諏訪下を廻ル事。

第四 屋台引廻しハ自由進行スル事。算盤引等ハナサバル事。

第五 廿六日ハ午前拾時迄二下宿・下分・新橋本迄三区に屋台番組をなス事。

番組

一番中川岸 貳番下川岸 三番上中宿 四番下宿 五番関戸 六番北横宿 七番下新町 八番上川岸 九番中宿 拾番 南横宿 十一番上宿 十二番橋本 十三番下分

廿六日年番へ申出テ上新町か屋台引回ス事に相成、組ハ関戸跡ニ番組ナス。

第六 年番ハ二六日午前拾時より上宿区に進行ス。夫より諏訪下を通り、西関戸区に出て、東区・北区・南区(註。東関戸区・北横宿区・南横宿区)を進行シ、下宿に出て上宿区御飯屋迄進行し、上宿ニ屋台スへ置く事。

第八 廿七日ハ午前八時迄に上宿置場へ各区出頭スル事。

第九 年番ハ午前拾時より始メ、下新町より上新町を廻り、各区八年番跡より進行し、下分・橋本を通り、上川岸・中川岸・下川岸区へ下ル事。

第拾 下川岸及中川岸区を通り、上宿に進行し、午後十二時に引分カレヲスル事。

第拾壹 屋台送り向<sup>(x)</sup>へハ、各町共ナサ、ル事。

大正貳年九月

年番	中川岸区
区長	色川 善助
区長	金田和三郎
下川岸	小井戸栄助
下分	岡沢 長蔵
	山内長之助

祭典ハ大評判にて、溢ル斗の人出<sup>(マ)</sup>テニテ五万ヲ算シ、人ヲ以テ埋メ、往來人ヲ以テ通行出来サル盛況ナリ。

下川岸区ハ山本ノ先ノ渡場迄、中川岸年番ヲ置き山本迄ニ屋台三車ヲ番組ス。拾参番下分ハ小倉熊太郎氏ノ前に止メ、各町夕喰ス。止置時間三時間。年番不行届ニモ不拘、少シノ事故モナク目出度結了得タルハ前後協力各町援護ノ賜ト深ク感謝ノ意表シ茲ニ調筆ス。

中川岸年番

大正二年拾月

区長	色川 善助
区長	金田和三郎
	小井戸栄助
	小倉熊太郎
	山内長之助

(註。年番 下川岸)

大正十五年諏訪神社大祭

九月一日、例年の通り諏訪神社祭礼に關し、新宿惣町會議を中川岸平井

樓に開催したり。席上、本年の祭礼を本祭とすへきや否やに付き、前例に依り投票を行へり。其の結果、新宿十四区の内、白七票黒七票にて同点となれり。而して協議の結果、本祭事執行と決定したり。茲に於て各区長はそれぞれ之を区内に伝達せり。全町の人氣は日々に湧き來り、各区共、山車の修繕、飾物の手入等に本祭気分は全町に横溢せり。二十日には早くも各区共準備全く成り、二十三日、

逸りに逸れる若者連は二十五日の当日を待ち得ず、揃ひの着物も華やかに、吉例に依り諏訪神社・香取神宮に町内安全を祈願し、同日より、早くも山車を引き初めたり。

九月二十四日、此の日は恰も香取神宮に於ては予てより本宿仁井宿地先、香取道に大鳥居建立中の処、此の程竣工し、本日その上棟式を挙行する事になり、新宿井に本宿年番前後三町、即ち下川岸・中川岸・上仲宿・田宿・寺宿・仁井宿の六町は惣町を代表し、大鳥居迄山車を引き行き、此處にて投餅の式を行ひ、大鳥居落成を祝賀せり。尚、各区長并に代理者は香取神宮神前に於ける大鳥居竣工報告祭に参列せり。

九月二十五日、年番前後三町の区長は、午前十時、諏訪神社に至り種々祭典準備をなす。午後一時頃、各区長一同神前に参進、祭典に参列す。祭典終れば御神輿は獅子を先頭に、関戸・横宿を通り、下宿に設けられたる御旅所御仮殿に安置せらる。此の間、各区の山車は思ひ思ひに各町を引き廻しければ、近郷近在よりの見物人に全町の賑ひ又限りなし。夜十一時に至れば、各区の山車は各々所定の位置に就き、番組に依り行列をなす。即ち御旅所前より上仲宿方面へ年番・二番・三番・四番・五番・六番・七番、御旅所より橋元方面へ八番・九番・十番・十一番・十二番・十三番・十四番の順に整列す。本年の番組左の如し。

年番	下川岸	素盞鳴尊
二番	上中宿	鎮西八郎為朝

三番	下宿	源 頼義
四番	関戸	猿田彦命
五番	上新町	諏訪大神
六番	北横宿	日本武尊
七番	下新町	浦島太郎
八番	新上川岸	牛天神
九番	中宿	桃太郎
十番	南横宿	仁徳天皇
十一番	上宿	三蓋傘鉾
十二番	新橋本	小野道風
十三番	下分	新田義貞
十四番	中川岸	神武天皇

九月二十六日、本日より山車は番組の通り整列し、各区を引廻す事となる。先づ年番より順次「さんぎり」(註。下座の演奏曲目の一つ)も目出度く打響き、続いて年番下川岸の山車、先づ徐々に引き出さるれば、二番・三番之に続き練り出せり。時に午後一時、予定の時刻より遅る、事三時間、本日の順路左之通り。御旅所前より南北横宿を通り、東西関戸を経て出羽に出で、佐原高等女学校前に至り中食。それより此処を出で、諏訪下・上宿を経て上中宿に至り、年番、石毛酒造店前にて、此処にて夕食。各山車は全部提燈をつく。午後十時、同所出発。中宿・下新町・上新町を経て上中宿に出で、中宿・下宿・下分を経て、年番、新橋本に至り、奈良屋前にて止る。各町之に続いて整列す。こゝに第二日の行程を終る。時に二十七日午前一時三十分。

九月二十七日、本日は御神輿神幸にて各区長は午前九時、下宿御飯屋前に集合。之より獅子を先頭に橋本より新上川岸に出で、田中に入り、それより引返して中川岸を経て下川岸に至る。下川岸より仲川岸・東西関戸を経て岩ヶ崎入口迄至り、赤橋宅前より引返し、諏訪神社前にて御休

み。此処にて中食。午後は上宿台・上宿・上中宿・中宿・下新町・上新町を経て、再び上中宿に出で、中宿・下宿・下分・新橋本を経て若松町に至り、再び下新町区に出で、下宿を経て南横宿に入る。夫れより横川岸に入り、引返して寺町(註。莊嚴寺の周辺で、現在の北横宿の一部)に入り、引返して北横宿・東西関戸を経て、諏訪神社に御還幸せられたり。惣町区長は高張をつけ、年番順に整列の上、解散したり。尚、山車は午前十時出発の処、午後式時に至り漸く引き出せり。本日の順路は、橋本より上川岸・中川岸を小野川沿に下川岸に入り、年番、川口<sup>(河)</sup>に至る。時に夜の十時頃となりたり。全区の山車、下川岸に入るや順次逆行し、年番、下川岸の唐鎌床屋の角より曲り、中川岸を通り、横宿を経て御旅所前に至る。以下、順次番組順に整列す。時に二十八日午前五時。各区長は御飯屋前に参集。年番区長、本大祭の無事滞りなく終了したる事は惣町各区の円満協力に因りたる事を謝し、後年番上中宿区に對し年番引継ぎの儀を終り、茲に目出度大祭を終りたり。之より各区の山車は随意引分れ解散す。

付記 本大祭は近年稀有の豊穰に加へ天候に恵まれたるを以て、連日無慮数万の人出に、稀に見る賑を呈したり。

#### 祭事規定

- 一 二十五日午後正十時迄に御旅所前に番組する事。
- 一 二十六日午前正九時、御旅所出発の事。
- 一 同日神社鳥居前に年番留め、中食の事。
- 一 同日両新町を結び、年番は上中宿に出で夕食の事。同日、年番、橋本区にて留める事。
- 一 二十七日午前正九時、出発。上川岸・中川岸を経て下川岸川口<sup>(河)</sup>にて中食後、戻りて下川岸角より中川岸を経て郵便局角にて夕食。横宿通りを経て御旅所前に整列、引分れの事。

一 屋台との間隔は二十間づゝとする事。

屋台世話役 赤りぼん

同 古 役 青りぼん

区長、区協議員 白りぼん

屋台行列の順路

一 二十五日、各町とも自由行動とす。同日午後十時迄に下宿区の御旅所へ番組の事。番組は御旅所を中央として、年番下川岸は鳥居前へ向つて順次七町を上中宿迄、後七町は御旅所の後に新上川岸を初めとして中川岸は橋本奈良屋前までに番組をなす。

一 二十六日午前十時より、南横宿・北横宿・東関戸・西関戸を経て諏訪下へ廻り、上宿・上中宿・中宿・下新町・上新町を経て上中宿へ出て、橋本へ年番進み、此夜一時に番組の仮置据へ。

一 二十七日、橋本より新上川岸・中川岸・下川岸川口迄進行し、夜中に中川岸迄後戻りをなし、下川岸角を廻り中川岸を経て北横宿・南横宿を通り、御旅所迄進行の上、元の位置に番組をなし、目出度引分れをなして解散す。

屋台引廻しに就ての心得

第一 屋台を引くには各人共静粛且つ愉快に盛大に、見物其の他公衆に不安の念を懐かしめざる様注意すべし。

第二 屋台進行中、後方より他町屋台進行し来り、其の綱先と前方の屋台尻との間隔は五間以上とし、其れ以内に綱先を引き入れざる様当該及び古役にて注意すへし。

第三 屋台当役の交渉中は屋台の進行を止め、交渉の結果、屋台の進行を始むる事。

第四 当該交渉の結果、甲の屋台停止し乙の屋台進行する時は、甲乙各屋台の高欄縁との間隔は一尺以上とす。但し地形により其以

内接近する事あるも、衝突せざる様各自注意すへし。万一衝突の免かれざる場合有共、決して暴力に訴ふるが如き事は全然慎しみ、両当役交渉の結果、他町に迷惑を及ぼさる様解決する事。

第五 屋台進行中、引き違へは全然為さること。

第六 屋台進行中は道路規則に従ひ左側を進行すること。

第七 屋台引違へ際、停止中の屋台は地形により可成左側に停止する事。

第八 当該は、他町当役との交渉には、大町当役は小町当役に一步を譲り、小町屋台の進行を止めざる様各自注意すべし。但し地形により引違への不能の場所によりては、両町当役交渉の上、進行する事。大町とは関戸・下川岸・中川岸・下新町の四区とす。右は投票の結果、七点以上を大町とする約束の基に決定す。下新町九点、中川岸十二点、関戸・下川岸十三点、以上。

第九 十字路及び三叉路の如き曲折の道路に於て進行中、屋台当役は其の前方に注意し左右より屋台進行中のものなきやを見定めたる上、各自屋台進行を始むる事。若し進行中の屋台ありたる時は、交渉の上、進路を定むる事。

第十 九月一日、惣町参会后、各町屋台当役は九月二日午後六時に諏訪公園に集会の上、各自意見の交換をなすこと。

第十一 屋台停車中と雖も、下座の入れし屋台に対しては、交渉の上進行し、下座なく停車中の屋台には無交渉にて進行するも異議なきこと。

第十二 昼間、当役は赤色、古役は青色の徽章を附くこと。夜間、当役提燈は従前通り、古役は赤一本黒一本の二筋に何区補佐と記入すること。

右規約を無視し故意に違反したる町内に対しては、惣町挙つて其の町内

に交渉し、解決の付く迄惣町は屋台を引き出さざる事。当事者は互に惣町に通知すること。

第六条中、左記補追す。

但し地形により規則に違反する事あり共、右当役は成るべく注意の上、左側を進行すること。

右は大正十三年十月二十日、菅谷不動堂に各町屋台当役及古役集合協議の上、右規約を作製す。

右本祭の概要を録し、以て目出度次年番へ相引継ぎ申候也。

大正十五年九月

年番

下川岸区長

柴山仲之助(註。後所では芝山)

椿 吉蔵

前年番

中川岸区長

色川八十八

立原初太郎

後年番

上中宿区長

石毛元治郎

堤 芳之助

(註。年番 上中宿)

東西両関戸山車順位決定に関して

本年(昭和十年)は大体に於て氣候も順調にして作柄も豊作を見込まれ居れば、山車引廻気分も頗る濃厚なり。就ては今年は関戸区に於て、東

西両区に一時に山車新調せられたるに付、之れが総町の順位につき種々二議論あり、御輿年番及び山車年番等、之れが関係各区に於て八月下旬より折衝斡旋数回に及び異論百出、頗る難件なりしが、総町としては一つを旧位置に他の一つを最終に列せしめんと意向なりしが、両区何れも之れを用えず、止むなく旧位置とし、只東西両区丈にてその後先きを決定する事となり、之れについても又種々難問ありたるが、遂に九月二日の木内楼に於ける定例集会の席上、東西両区に於て関係各員立合の上、抽籤を執行いたしたる処、東区長小長谷市太郎氏、先番を引き、茲に両区の後先きを確定し、数日間に亘る事件も円満解決を見たり。

九月二日定例会議の件

前日(文)の如く本年は山車引廻し気分頗る濃厚なり。かゝる雰囲気の中に、十九区々長及代理者全員出席の上、木内楼に於て例年の通り投票いたしたる所、白票絶対多数となり(白九点黒五点)、茲に盛大に引廻を確定し、目出度会議を終了。

山車引廻について

各区に於ては二十日前後に準備全くなり、例に依り各神社に各自の安全を祈願し、二十三日には已に引き出したる区もあり、お祭の前景気は実に「スバラシキ」ものあり。

二十五日より、左記の順序及規約により大々的開始いたす事になり、同日は自由行動にして午後十二時(文)を以て予定の場所に集合すべき筈なりしが、稍時刻はおくれ、二十六日午前二時集合を終了したり。

集合の位置順序等は次の通り。

本年は御飯殿が下宿区坂蔵屋洋品店前なりしが故に、山車は之れを中心として前と後に七台(文)つゞ整列せしむ。

前方としては、上中宿先頭にて平山大吉氏の前に位置し、下宿・東関

戸・西関戸・北横宿・下新町・上川岸の順に並び、最終上川岸は元木呉服店前に位置せり。

後方としては、佐山氏前に中宿を先頭として、南横宿・上宿・橋本・下分・中川岸・下川岸との順に並び、最終下川岸は、菱屋陶器店前に位置せり。

かくて明二十六日には盛大に一齋行動を起すべく手くすね引いて夜の明けを待ち構えたり。之れより先、本年は約一ヶ月程前より雨天の連続なりしが故に、二十五日の夜半よりは警報頻りにして刻々と利根川の大増水を報じ来り、明日は如何かと案ぜらるゝに至り、各区長は清宮常次郎氏方に集合、種々協議を重ねしが、其の内にも益々増水し来り、所によりては早くも路面に溢れ来り。下川岸方面にては「ユカ上ゲ」等の大騒ぎとなり、警鐘は鳴り、堤防「アヤウシ」等の急報は発せられ、当町は上を下への大混乱に陥り、今までの御祭気分は一転して水防陣へと急転回の止むなきに立ち至り、遂に早や如何とも成し得ざるものゝ如し。越いて二十七日午前九時頃、役場楼上に山車関係の十四区役員を集合せしめ、この前後策について協議したる処、この場合山車引廻しは到底不可能なりとの結論により、遂に一時中止と確定し、其の筋の注意もあり、猶ほ又此の際鳴物を用ゆるは穩当ならずと考へたる故に、一切鳴り物を廃し、芸座をのせずに随意に各区に引き取る事になり、茲に全く終了せり。

思へば天然の災害とは申せ、遺憾至極なり。嗚呼、斯くまで準備なれる名物佐原の大祭も天のなせる大水害に抗じ得ず、恨をのんでその幕を鎖せり。

#### 祭事山車引廻シ規定

廿五日 夜十時迄ニ御旅所前ニ番組シ敬意ヲ表スルコト。

廿六日 午前九時、各部所ヨリ年番順ニ出発ノコト。南北横宿ヲ経テ東

関戸ニ入り、西関戸ニ至り、連絡自働車々庫前ニ止り、先頭ハ女学校入口迄行クコト（其ノ間残部ハ停止ノ俣）。先頭帰りテ年番鳥居ニ入り、順次之ニ倣フ。

茲ニテ中食（二時間）。終リテ出発。諏訪下ヲ経テ上宿・上中・中宿ニ至り、下新町ノ入口ニテ夕食。

下新町ヨリ上新町ヲ結び、再び上中ニ出デ橋本マテ進行シ、其ノ俣据置クコト。

廿七日

午前九時出発。橋本・上川岸ヨリ下川岸ニ至り、先頭、水郷公園ニ止ル。茲ニテ中食（二時間）。其ノ後最後部ヨリ順次逆行シ、年番、水郷汽船ノ角ヲ曲リ郵便局方向ニ向クヲ見テ、順次之レニ倣フ。局前ヨリ北南両町ヲ経テ、御旅所前ニ整列解散ノコト。

#### 注意事項

一 時間厳守ノコト。

一 日延絶対セザルコト。

一 雨天ノ場合ハ雨具ハ随意。

一 屋台トノ間隔ハ二十間トス。

#### 徽章左ノ通

屋台世話役 赤リボン

協議員及古役 青リボン

区 長 白リボン

昭和十年九月

年番前後

#### 御神輿渡御に就て

御神輿は例年の通り、廿五日午前十時、御仮御殿に出御例祭を行い、廿七日は御巡幸も中止せず、只々大出水の爲め、止むを得ざる区は一、二



区巡幸せざりしのみ。

詳細は御輿記録に当時の御輿年番が記載する事と考へ、以上に止めたり。

# 御神輿渡御御順路概要

九月二十七日午前十時、下宿飯御殿御発途。下宿区（小川氏前ニテ御祈  
 捧）、下分区ニ至ル（岡沢氏前ニテ御祈捧）。新橋本区（平塚氏前ニテ御  
 祈捧）、左折シテ新上川岸ニ至ル（松田屋前ニテ御祈捧）。田中区ニ入り  
 （ラヂオ屋ニテ御祈捧）、中川岸区（八木氏前ニテ御祈捧）。夫レヨリ下  
 川岸区（北賑橋元ニテ御祈捧）、水郷公園ニ至ル（砂場荒川区の御祈捧）。  
 少憩、水郷公園ヨリ引返シテ水郷汽船会社ノ角ヲ右折シテ大竹氏方ニ至  
 リ少憩。夫レヨリ中川岸区裏通りヲ経テ平井楼ノ角ヲ左折シテ入り、直  
 ニ引返シテ郵便局前ニ出デ住吉通り及東関戸裏通ヲ一巡、再ビ郵便局前  
 ニ至リ（石田楼前ニテ御祈捧）中食。中食終リテ東関戸区ヨリ西関戸一  
 ノ鳥居角ヲ右折、停車場ヨリ警察署前ヲ結び（二ノ鳥居前ニテ御祈捧）、  
 女学校方面ニ向フ。引返シテ一ノ鳥居ヨリ入りテ西関戸裏通りニ入り、  
 直ニ引返シテ製水会社前ヲ通り、公園（註。諏訪公園、現佐原公園）角  
 ヨリ右折シテ公園脇ニ入り、引返シ諏訪下ヲ通過シ上宿区ニ向フ。上宿  
 区（新旧道交叉点ニテ御祈捧）、上宿台町ニ至ル（銚子屋前ニテ御祈捧）。  
 夫レヨリ上中宿区（石毛氏前ニテ御祈捧）、中宿区金田氏角ヲ入り、引  
 返シテ（清水氏前ニテ御祈捧）下新町ニ至ル。下新町区（馬場別宅前ニ  
 テ御祈捧）、夫レヨリ学校下ニ向フ。引返シテ上新町区ニ至ル（新島屋  
 前ニテ御祈捧）。夫レヨリ再ビ上中宿ニ出デ、仲宿・下宿・下分・新橋  
 本ヲ経、右折シテ（伊能茂左衛門氏前ニテ少憩）、若松町ニ至ル（白木  
 屋前ニテ御祈捧）。夫レヨリ再ビ下新町区ニ出デ、下宿区ヲ経、左折シ  
 テ南横宿区ニ入り（宮喜氏前ニテ御祈捧）。夫レヨリ横川岸区ニ入り（区  
 ノ中央ニテ御祈捧）、引返シテ寺町ニ入り、引返シテ北横宿区ニ至ル（大  
 和屋前ニテ御祈捧）。終リテ東関戸・西関戸ヲ通過。一ノ鳥居ヨリ本社  
 ニ還御。以上ハ詳細ヲ欠ク点モ有之候へ共、御諒承ヲ希フ。

## 昭和十年九月本祭

### 年番前後三町

年番	上中宿
区長	石毛 元治郎
補佐	元木 重兵衛
前年番	松川 文郎
区長	下川岸区
後年番	芝山 仲之助
区長	椿 吉蔵
	下宿区
	高橋 轡之助
	清宮 卯三郎

## 昭和拾壹年諏訪神社

### 大祭記録

本年ハ、前年大祭山車引回中、大水害ノ為メ中途取止メノ処、幸ト農作  
 物豊作ニ付キ、祭前人氣大ニ高マル。

八月十七日、上新町正副区長、山車新調相成、惣町山車持ち仲間入りノ  
 件申越サル。

希望案トシテ、九月惣町会議ニ投票權及ビ山車順位ヲ西関戸区ノ山車次  
 位ニ編入、從テ年番モ廻年ニハ履行ノ件、仍テ、

八月十八日、右件ニ付キ、神輿・山車前後六町會議、式十日ニ惣町會開  
 催討議ノ上ト決シ、神輿年番ヨリ惣町ヘ廻文ス。

八月二十日夜、下分区觀音堂ニ於テ惣町會開催。前記上新町区提出案ヲ  
 論議ノ結果、山車順位西関戸区ノ次位ニ編入及ビ山車投票權承認、年番  
 ヲ勤メル件ハ保留ト決定。以上、山車年番ヨリ上新町区ヘ通知ス。右終

リテ、上仲宿年番提案。大祭ニ付キ、汽車賃及び各乗物会社へ祭日中賃金割引汽車自動車増発ノ件、町役場・観光協会・商工会等へ宣伝応援ノ件、惣会一致両前後六町へ委仕サル。併テ寄附金募集運動共。

追記 本祭可否ハ九月二日。取極ノ前ニ運動入。理由ハ汽車賃割引列車増発ハ一ヶ月前ニ非ネバ鉄道省ノ承認不可能ノ規定ニ依リ。右提案通り決定ス。

八月二十二日、上新町区ヨリ前記決議快諾ノ旨、回答アル。

九月三日、午前拾時ヨリ木内本館ニ於テ定例区長惣会開催。神輿年番ノ議案終了后、

山車年番、席ヲ替リ上新町区山車順位承認ノ件、八月二十日ノ決議其他仲間ノ報告終リテ、

山車年番ヨリ本年大祭執行ヲ提案。例ニヨリ可否ヲ投票ニ依ル事ヲ惣町ニ計ル。異議無ク投票開始。

出席投票権十五票

開票ノ結果

白丸票十三票（可トスルモノ）

黒丸票 二票（否トスルモノ）

右ニテ望外ノ大多数ニテ大祭ニ決ス。

九月式拾参日、午前中ヨリ各区思ヒ思ヒ乱曳盛ニ行フ。

九月式拾五日、惣町一斎ニ山車曳廻リ、年番山車ハ上宿区御旅所前ニ規定ノ午后拾時三十分ニ、各区山車ハ拾式時迄ニ全部予定ノ場所へ芽出度納マルヲ終番下河岸ヨリ通報ニ依リ、年番ヨリ「サンギリ」ヲ打始メ終

番ガ打終リ、前後三町区長打揃、各区へ御引取ノ挨拶済ト同時ニ、各区共山車置据ノ俣ニ引揚ル。以后、曳始メ曳終リ共、是レニ従フ。

九月二十六日、午前九時、御旅所前へ各区長・当役整列。諏訪神官御祈願ノ上曳始メ可ノ処、神官三十分遅レ、下河岸□時間三十分遅レ参着。

漸ク拾壹時ニ至リ曳始メル。

年番山車、諏訪神社前ニテ五分間鳴物止メ敬意ヲ表ス。各町之ニ倣フ。西関戸山下区長前ニテ休ム。全、出羽芝田氏前ニテ拍子木ヲ入レ、各町休ム。其間二年番山車廻シ終リテ進行。

但シ此間大鳥居ヨリ先へ進ミシ山車ハ停車場へ復ヨリ、大鳥居内ノ山車ハ其俣進行ヲ停止。

年番大鳥居前ヨリ東関戸ニ、順次之レニ続ク。

東関戸薬師堂前ニテ五分休ム。北横宿都川前ニテ五分休ム。南横宿鍋屋区長前、五分休ム。下宿小川区長前ニテ五分休ム。下新町別宅前ニテ五分休ム。

右ノ間、西関戸ニテ正后一時昼飯。二時ヨリ曳始メル。折柄降雨。

年番山車、学校下予定ノ場所ニ至ル。式番山車、別宅前ニテ、時ニ午后五時三十分。夕飯、提灯触レトナル。雨盛ニ降ル。各区山車間隔漸ク乱レル。

上新町坂本区長前ニテ五分休ム。上仲宿元木前ニテ五分休ム。上宿篠塚代理ニテ五分休ム。年番山車、后レ午九時三十分、御旅所前予定ノ処ニ納マル。各区山車、順次予定ノ場所ニ納マル。時ニ午後拾壹時。

九月二十七日、正十二時ヨリ進行始メ、年番、高六前ニテ中飯。二時ヨリ順次進行。小雨降り始メル。下分区岡田前ニテ五分休ム。新橋本奈良前ニテ五分休ム。新上河岸岡沢前ニテ五分休ム。仲川岸海野前ニテ五分休ム。

風雨激シク暴風雨ノ兆トナル。

年番山車、下川岸山本宅前ニ至リ前後三町協議。下川岸区へ好意ヲ表スル為メ、三番迄山車水郷公園へ入ル。相談成立ツ。時ニ風雨益々激シク暴風雨トナリ、時折停電、提灯ノ火ハ持タズ、暗黒中ヲ年番丈ヶ公園へ入ル。各区、順次到着。午后五時三十分、夕食。提灯触トナル。然レ共、終番下河岸、未ダニ東海酒店前ナリ。各区待テ共遅々ト進マズ。故ニ先着各区ヨリ、此ノ大暴風雨ノ中ニ待ツ事出来ズ、早々中途曳揚方ヲ年

番ニ請求。年番ハ終番ヲ其俣曳揚ハ尚早ナリト有メル。区長ノ交渉手續シト、各区当役連殺到ス。

此間、年番山車、公園ニ入りテヨリ六時間ヲ費ス。

故ニ各区長ノ立協議トナシ、此暴風雨中ニ山車進行ノ可否ヲ討論ノ結果、本年度丈ケノ前提ノ基ニ、終番山車ヨリ水郷大橋道路ニ向ケ逆行、年番山車、海野酢倉裏ニ至リ本行列ニ直シ進行ト決定シ、漸クニ進行始メル。

時ニ午後十二時半。<sup>(×午前〇時半)</sup> 暗黒中ヲ各難行、全山車水郷道路跡ヨリ終ル頃ヨリ、

サシモノ大暴風雨モ漸ク止ミ、一天拭フガ如晴渡リ、月星煌々ト照リ渡リ、順次進行。御旅所前予定ノ場所ヘ年番山車到着。時、二十八日午前

三時。終番下川<sup>(マ)</sup>河<sup>(マ)</sup>岸区山車、午前五時三十分ニ到着。前後三町区長ニテ

各区ヘ着順ノ挨拶ニ廻リ、直チニ山車順ニ各区長ハ右側ニ各区当役ハ左側ニ整列。古式ニ則リ、年番区長堤芳之助ヨリ次番区長小川欽一郎氏ニ

年番ヲ次番ニ受渡シノ式辞ヲ終了ス。年番山車、古式ニ依リ廻シ始メル

時ヨリ又々遽ニ大風雨沛然トシテ至リ、実ニ篠突クガ如ク大降雨中ヲ、

各区山車、自区ヘ無事ナル引分レ、解散式ヲ終ル。実ニ劇的光景ナリシ。

右ニテ昭和十一年諏訪神社大祭山車本曳年番受渡シ目出度終ル。

時ニ昭和拾一年九月二十八日午前八時。

#### 花車（註。山車に同じ）引廻シニ就而各区協約

一 山車ヲ曳ク時ハ各人共静肅且ツ愉快盛大ニ曳廻ス事。

一 見物人其他公衆ニ不安ノ念ヲ懷カシメズ、各自注意ノ事。

一 乱引中ト雖モ夕刻ハ成可早ク提灯ヲ付ケ、夕食モ短時間トシ、□□

ヲ短ク灯ヲ入レ、美事ナル曳廻シヲ見物人ニ見セル事。

一 引曳中、自動車其他ノ交通ハ成可ク山車側ニテ道路ヲ讓歩シ、交通

ノ安全ヲ計ル事。

一 花車当役ノ交渉中ハ進行ヲ止メ交渉終リテ進行ノ事。

一 当役交渉ノ結果、甲ノ山車力停止中、乙ノ山車進行スル時ハ、甲乙

各山車ノ高欄縁ヨリノ間隔ハ一尺以上トス。但シ地形ニヨリ其以内接近スルモ衝突セザル様各自互譲シ、万一衝突ノ免レザル場合有ル共、決シテ暴力ニ訴ヘルガ如キ事ハ慎ミ、両当役交渉シ他町ニ迷惑ヲ及サズ解決ノ事。

一 山車ハ左側進行、停止モ左側（但シ地形ニヨリ違反スルモ、能ク註意）。

一 当役ノ交渉ニ際シ、大町ハ小町ニ一步ヲ譲、交渉進行ヲ計ル事（大町トハ東西関戸・下川岸・仲川岸・下新町トス。右ハ大正十三年十月二十日、菅谷不動堂ニ於ケル規約ニトル。但シ西関戸ハ新規）。

一 山車ハ年々曳キ、盛大質素ヲ旨トシ、各地方人ヲ当町ニ吸引ニ心掛ル事。

一 各自酒氣ノ上ニテ見物人ニ剣突又ハ侮蔑ノ言詞ハ慎ム事。

一 山車停車中ト羅モ下座ヲ入レアル山車ニ対シハ交渉ノ事。下座ナク停車ノ山車ニハ無交渉ニテ差支ナキ事。

一 時間ハ別紙規約ニヨリ厳守。日延ハ絶対セザル事。

右 昭和十一年九月 佐原町新宿各区長 全 祭事世話役

#### 注意事項

一 時間厳守ノ事。

一 日延絶対セザル事

一 雨天ノ場合ハ雨具ハ随意ノ事。

一 山車ノ間隔ハ二十間トスル事。

一 徽章左ノ通り

一 山車当役 赤リボン

一 協議員古役 青リボン

一 区長 白リボン

昭和十一年九月大祭

年番区長上仲宿

堤 芳之助

元木 為吉

前年番下河岸

区長 芝山仲之助

椿 吉蔵

後年番

区長 小川欽一郎

金田 宗三

諏訪神社大祭

年番 下宿町

昭和十一年九月、上仲宿町ヨリ年番ノ引継ヲ受ケテ以来、翌年ヨリ支那  
事変勃発シ、引続キ大東亜戦争ニ迄進展セリ。皇軍ノ威武、世界ノ大局  
ニ向ッテ赫々タリ氏が、物量並ニ科学力ノ差ハ如何トモ為シ難ク、昭和  
廿年八月十五日、終戦ノ詔勅ハ煥発セラレタリ。

敗戦ト同時ニ世相ハ一変シ、食料難衣料難住宅難、国民ノ困苦甚シキモ  
ノアリ。謂ンヤ祭事ニ於ル幣台ノ引廻シ等思ヒモヨラザル有様ナリキ。  
町民ハ何ラノ慰安ナキ為、無秩序ナル幣台ノ引廻シハアリタレドモ、恒  
例ニヨル白黒ノ投票ハ一回モナク今日ニ及ベリ。

昭和廿五年、此ノ間十有四年ノ年月ヲ費シ、幸ニシテ想像セシヨリ早く  
世相モ回復シ、惣町ハ或程度ノ改正ニヨリ祭事執行ノ機運ニ向ヒタリ。  
記録ニモ明カナル如ク、新宿惣町幣台年番開始以来、下宿町ヲ以テ巻軸  
ト称シ一巡スルコト、ナレリ。明治十一年開始以来、大正ヲ過ギ昭和ニ  
至ル。長年月ヲ経テ歴史的行事ヲ執行スルコト、ナレリ。九月一日、八

朔参会ニ於ル改正要旨左ノ如シ。

昭和廿五年九月一日総町参会決定事項

一 諏訪神社御祭礼ヲ佐原ノ大祭ト称ス。

一 幣台ノ番組ハ廿六日之ヲ行フ。

一 番組ノ場所ハ年番ノ指定スル所トスル。

一 番組ノ時刻ハ夕食前、年番町ノ定メタル場所ニ並ビ提灯ヲ用意シ、

夕食後、年番引継行事並ニ引別行事ヲ行フ。

一 引廻シ無キ町内ノ幣台番組ハ空席トシ、町内代表者ハ引継行事ニ参

列スルコト。

一 年番引継行事ハ幣台十二台以上出タル年ニ之ヲ行フ。

細則ハ別ニ之ヲ定ム。

九月十七日、幣台所有町内及ビ御神輿年番幹事ノ合同会議ニ於ケル細則  
決定要旨、左ノ如シ。

昭和廿五年九月十七日

幣台単位区長会議

細則決定事項

一 番組の時刻

午後五時迄ニ定位置ニ番組終了ノコト。幣台ヲ定位置ニ付ケタレ

バ任意夕食ノコト。

一 引継行事開始時刻

午後七時（時間厳守）。

一 引継行事

各区長並ニ当役ハ午後七時十分前迄ニ御旅所鳥居内ニ参集ノコト。

御旅所ニ向ヒ右側ニ区長並ニ氏子委員、左側ニ当役整列ノコト。

イ、正年番挨拶。

ロ、受年番挨拶。

ハ、正年番ノ發議ニテ古式ニヨリ手打式ヲ行フ。

一 引別レ行事

年番ヨリ順次さんぎりヲ行フ。さんぎりニテ一時鳴物停止。

年番ハ直チニ引出シ番組ノ末座ニツク。年番末座ニツキシ旨ヲ各町ヘ挨拶スルコト。

一 受年番行事

受年番ハ直チニ引出ス旨、<sup>ジヤンプ</sup>順告(申送り)シ、さんぎりヲ打ツテ進行スルコト。各町之ニ做<sup>(x)進</sup>フ。

一年番引継行事終了セルモ祭事終ルマデ当年番ノ責任トスル。

本年ハ幣台所有十五ヶ町全部引廻シニ参加ス。其ノ順序左ノ如シ。

下宿町 東関戸町  
西関戸町 上新町  
北横宿町 下新町  
新上川岸町 中宿町  
南横宿町 上宿町  
新橋本町 下分町  
中川岸町 下川岸町  
上仲宿町

右改正要旨及ビ細則決定要旨ニ従ヒ、時間其他ノ点ニ寸時ノ変更モナク滞リナク目出度年番引継行事及ビ幣台引別レ行事ヲ終了セリ。  
此ノ間惣町各位ノ御協力ニ対シ深甚ナル謝意ヲ表ス。

昭和廿五年庚寅九月吉日

年番下宿区長

小川欽一郎

高橋轡之助

清宮常次郎

前年番上仲宿区長

堤 芳之助

後年番東関戸区長

佐藤 英三

立会 西関戸町

黒田 義雄

年番 東関戸区

佐原市祝賀大祭

昭和二十五年九月、下宿区より年番の引継を受けてより、翌二十六年三月十五日、佐原町は隣接香取・香西・東大戸の三ヶ町村と併合し大佐原市として茲に市制は施行せらるゝ事となり、これを記念する祝賀の行事は、市当局の計画にもとづき、新宿・本宿各区長、累次市役所に参開し、十月十三日より十七日迄の間、華々しく挙行せられたり。而して祝賀行事の一環として新宿・本宿合併による幣台引廻しを行ふ事に決せられたれば、祝賀気運は澎湃として甚に溢れ、これが執行に当り、新宿東関戸区・本宿上仲町区両年番司会のもとに、十月八日木内楼に於新宿・本宿合同当役会議を開催し、幣台引廻しに關する各項の規約並に諸注意事項を決定し、全町挙げて奉祝気分横溢の内に各区は諸般の準備まつたく成り、十月十五日午前八時、新宿先頭年番東関戸区幣台を西関戸金田楼前におき、順次年番順に新橋本奈良や前に至る間に番組を整へ、本宿は大橋元より寺宿大通りを祝賀会場たる小学校前に至る間に番組を整へ、午後一時、新・本各年番より「サンギリ」を打ち始め共に交歓祝意を表し、新宿は下宿区打終りたる後、年番より発進し以下これに連り下宿区幣台が風月堂前に至りたる時を以て解散とし、解散後新宿幣台は本宿へ、本宿幣台は新宿へと、乱曳きの態勢となりたり。佐原囃の音もひとときわさへ、祝賀気分は最高潮に達し、十数万の觀衆に身うごきも出来ぬ盛況なりき。因に本行事は通常の大祭とは異れど、大佐原市の発足の記念すべき第一頁を飾るものとして大祭に準じて執り行はれたれば、極めて意義

ふかく各町の積極的な協力のもとに事故なく万々歳の裡に終了したり。

#### 昭和三十年度

##### 諏訪神社本祭

昭和二十七年よりは諏訪神社祭礼に当りても例祭に終り、本祭執行の儀もなく月移り年暮りて、昭和三十年に至り、本年は天候に恵まれ国土豊穰、六十年来の大豊作を讀へるの声頻にして、全町挙げて本年こそ本祭に成らんかの氣運濃厚となり、全市民の期待又大なるものありき。茲に於て年番は寄りたり、前後三町と図り、昭和三十年九月一日恒例による惣町八朔参会を金田楼に於て開催し、幣台引廻しに就て前例により各区の意向を求めたる処、総町異句同音に黒白の投票による回答を待たずして本祭を執行すべしとの発言あり、満場一致、本祭執行を決定せり。当日の決定事項左の如し。

一、幣台の番組は二十六日之を行ふ。

一、番組の場所は年番の指定する所とす。

番組順序次の如し。

本祭引継行事幣台指定位置。年番東関戸区幣台は御旅所に面して、上宿区西源商店前、続いて後年番西関戸区幣台は市川商店前、次に上新町区幣台は三徳倉庫前、次に北横宿区幣台は山和商店前、次に下新町区幣台は本多病院前、次に新上河岸区幣台は元木商店前、次に中宿区幣台は飯田商店前、次に南横宿区幣台は綿や前に、次に上宿区幣台は大八木宅前、次に新橋本区幣台は岩館商店前に、次に下分区幣台は飛田商店前、次に仲川岸区幣台は仲宿<sup>正矢</sup>倉庫前、次に下川岸区幣台は萱田建具や前、次に上仲宿区幣台は種大商店前、次に前年番下宿区幣台は南村商店前に番組を整ふ。

一、番組の時刻は夕食前、年番の定めたる場所に列び提灯を用意し、夕食後、年番引継行事並に引別れ行事を行ふ。

一、年番引継行事及び引別れ行事の細則は別に之を定む。

以上

以上の如くにして各町の本祭気分は弥か上に沸騰し、幣台の手入れ飾物の装備に寧日もなき事となりたり。斯くして九月六日、桶松に於て幣台単位区長会議を開催し、本年度年番引継後、に於ける年番西関戸区、後年番は上新町区なるも、同区より古来諏訪大神を飾して年番外に列したる伝統を保持したしとの申出あり、次年番北横宿の同意を得、各区とも上新町区の意向を諒承し、茲に北横宿区を後年番とすること、決定せられたり。次に年番引継行事の細則にわたり協議、前年番下宿区の慣例に則り、引継行事を執り行ふ旨決定を見たれども、尚引別れ行事の細部にわたりては決議事項徹底せず、各区の見解も又区々として、是か最終決定は挙げて総町当役会議に持ち越される事となりたり。

こ、に至り年番前後三町は再三相会し最も公平妥当なる角度より原案を検討作製し、九月十八日、木内楼に於て総町当役会議を開催せり。定刻、市当局及び関係各官庁並に前後三区長臨席のもとに各区当役参集。緊張裡にも極めて友好的に且つ円満に議事は進行せられ、原案にもとすき慎重審議の結果次の様に決定を見たり。

先づ幣台引廻しに付ての心得として大正十三年十月二十日菅谷不動堂に於て確認せられたる規約の中、第八條の大小町の区別有るを削除、次に第十條の中、各町幣台当役は九月二日午後六時諏訪公園に集会云々とあるを年番町当役の定むる日時場所集合と変更、更に第十二條中、当・古役の標識の中、古役提灯に何区補佐と記入するを削除、他はすべて全文再確認せられたり（全文は大正十三年下川岸区年番記録）。参照。

続いて幣台引廻し申合せ事項及び道路規約申合せを次の如く決定せり。

##### 一、幣台引廻し申合せ事項

一、如何なる間違ひ有りと雖も双方譲り合い円満解決を図る事。

二、万一間違ひを生じたる節は年番前後三町の取扱いを最も公平なるも

のと承認する事。

三、幣台交換の時停止せる幣台は挺子を揚げ置く事。

四、そろばん引、其の他、小判廻し（註。幣台の引き方の一つ）、の、字廻し等是他町内の妨害に成らざる限り行ふも妨げなしと言へとも附近の状況等、危険防止に万全を期する事。

#### 一、道路規約申合事項

一、下新町・上新町へは下宿より入り上仲宿へ出る事。

二、諏訪下へは上宿及び上仲宿（本多病院前）より入り西関戸へ出る事。

三、停車場方面には西関戸より入り東関戸へ出る事。

四、諏訪公園通りは安住医院より入り第二校通り角へ出る事。

五、東関戸下通り（下堀）は警察署前より東に入る事。

六、田中通りへは信用金庫より東へ入り新上川岸を経て大橋へ上る事。

但しやむを得ず逆行の場合は後続の幣台に交渉の上逆行する事。

七、東関戸茶花通りへは北横宿（鈴木眼科角）より入り木内楼角或は東電横へ出る事。

八、川岸通りの内、仲川岸入船橋より上流小野川沿岸は総て上る事。それより下流は下る方を優先とし、已む得ざる場合は相互に交渉の上進行の事。

九、東関戸（石田旅館）及び（桶松）角より川岸方面へ北行する場合は下る幣台が優先する事。

#### 付記

一、御神輿御巡幸に出合いたる時は、幣台は停止し鳴物を止めて敬意を表する事。

次に、本祭行事中、引別れ行事の規約検討に移り、

一、本祭引継行事、御旅所前幣台参着時刻は九月二十六日午後四時、式開始時刻は午後六時。

二、式終了後、正年番より順ぶれ致し「サンギリ」を各町に通してから、

夫々現場より発進。下宿区風月堂角を曲り諏訪神社一の鳥居前を経て山崎酒店前に至る地域に向ふ。

但し正年番東関戸区幣台は北横宿区桶松角にて順列をはなれて石田旅館脇道路に一時停止し鳴物を止めて各町幣台を迎へる。

#### 三、右地域に進行せる後続の幣台は指定の位置

西関戸区幣台は全区山崎酒店前に、続いて上新町区幣台は警察署前に、次番北横宿区幣台は富士オフラート工場前、次いで下新町区幣台は藤崎氷店前、次て新上川岸区幣台は三升寿しや前、次に中宿区幣台は鳥教商店前に止り、次に南横宿区幣台は駅に面して金田楼前人口に、次に上宿区幣台は諏訪神社一の鳥居前、次に仲川岸区幣台は高橋クリーニング店前、次に下川岸区幣台は東関戸区柏や前、次に上仲宿区幣台は高塚自転車店前、次に下宿区幣台は吉田織物店前に停止、年番東関戸区幣台は石田楼脇より石井常七氏宅前に到る）

#### 以上

に停止し鳴物を止めて、当年番幣台鳴物を人れて、前年番下宿区の末座につくを待つ。

四、当年番末座に着けば此の旨を各町へ御挨拶致し、引継ぎ行事を終了する。

五、受年番西関戸区より順ぶれ致し「サンギリ」を通して現場より発進。此の際、受年番西関戸区幣台は飯名ラシオ店前に止り、西関戸区以下が発進せんとする幣台は逐次綱先をつめて東関戸区幣台が西関戸地先に達した時を以て解散とす。

右の如く、引別れ行事に於て些なりと往時を偲ぶ本祭の面かげを止めんとする各町の趣向と絶大なる協力により、本大祭の諸規約は滞りなく決定せられ、今や諸般の準備全く成りたり。

愈々九月廿五日の黎明を迎いたれば、各町の幣台は先きを競つて引廻し

を開始せり。斯くして未曾有の盛儀を見んものと遠近よりの老若男女十数万の多きを数え、佐原囃の音は諏訪神社の森に香取の峰々にこたまして、賑々しさ限りなし。因みに、郷土芸術としての佐原囃は、本祭典を契機として（註。千葉県の）無形文化財に指定せられたりと云ふも又むべなるかな。

式当日二十六日は各町の絶大なる協力のもと、些の遅滞もなく定刻規約及び細則決定要旨に従ひ開式せられ、神官厳かに御修祓の上、氏子会長恭々しく祭詞奏上の後、前年番下宿区長立合にて、正年番区長、諏訪大神の御神徳による前古未曾有の豊作を讃へ各町の協力援助を謝して西関戸区へ年番を御引渡しする旨挨拶し、受年番区長、年番を引受けたる旨を挨拶。茲に正年番の発議により古式に則り手打式を行ひ、めで度く式を終りたる時は、万雷の拍手しばし鳴り止まず、誠に感激の極みなりき。終つて直ちに各町引出しの態勢を了したり。年番より「サンギリ」を通し発進すれば各町幣台の灯一際映えて、今まで雲間にかくれし明月煌々と輝き出で、天も喜び人々に和すかの如く不夜城の目ぬき通りに絢爛豪華の一大絵巻物はくりひろげられたり。時に九月二十六日午後八時、年番幣台、所定の東関戸入口に停止し各町の幣台を拍手を以て迎へたれば、各町の幣台は威勢ますます昇り万余の観衆之に喝采をあげせたるは正に本大祭の興趣頂点に達したり。斯くして年番末座について引継行事を終了。直ちに年番末座に着きし旨を挨拶、受年番行事に移り万々才の裡に再び盛観を乱すことなく各町の幣台は随意引別れたり。

尚本年の御神輿渡御に就ては、九月二十五日、上宿区地先きお旅所に御出御、御例祭を厳かに執行、二十七日、各区の御巡幸予定のところ、折からの風雨烈しく御神輿にたいし損傷の憂いありたれば、総町各区長立寄合の結果、市内御巡幸を取止め、一路、一の鳥居（註。諏訪台の麓にある）を経て御帰還致す事となれり。

惟ふに、本年度大祭の円満無事滞りなく終了したるは惣町各区の懇切な

る協力の賜にして、本記録を撰筆するに当り謹みて深甚なる感謝の意を表する次第成り。

昭和三十年乙未

九月吉日

年番東関戸区長

小長谷松五郎

伊能 武 司

伊能 助四郎

石川 新 一

香取 芳 郎

松川 福太郎

坂本 勢 一

前年番下宿区長

清宮 常次郎

小川 好 一

後年番西関戸区長

坂本 虎 司

笹本 耕 三

立会 北横宿区

保科 栄 作

昭和三十四年度

諏訪神社本祭

年番 西関戸区

維時昭和三十四年何といふ輝かしく恵まれた年柄でせう。実二五ヶ年も引続きの豊作です。最も近年農作技術の長足なる進歩二もよりませうが、佐原地方の早場米は既に収穫を完了し、供出済となり、今年の祭事を控



へ、未曾有の前景氣を呈しつゝ、あります。

中央及び地方の財界ニ於ても神武景氣とかいはれ例年よりハ活気づいております。更ニ八朔参会即ち氏子会の決定ニより祭事期日を十月十五、十六、十七、日の三日間と変更しかも之れが第一年に相当いたします。回顧すれば年番制度実施以来実ニ八十有二年の歳月を経過いたし、是れを以て一応年番が新宿総町を一巡いたし、今年ハ其の最終の年番ニ相成ります。

従而次の年番ハ輪番制第二回目の最初に相当いたします。

此の古き歴史と伝統を受け継ぎ来つた、「佐原の山車」が関東一を誇り佐原ばやしが無形文化財ニ指定せられたのも誠ニ偶然でハありません。亦此処に特筆すべきハ畏くも

皇太子殿下御成婚の慶事あり、更ニ加へて、水郷国定公園の確定、挙げられバ限り無き佳き年柄でせう。

従つて、総町一般の空氣ハ今年こそ本祭でせうと異口同音ニ叫ばれております。この本祭氣分を機會ニ本祭を執行し、

諏訪大神 ニ

御奉告申し上げ、氏子一統感謝の微意を捧げる事ハ詢ニ意義深きものと確信いたします。

依つて年番西関戸区ハ三町並ニ総町ニ対し度々の接渉を重ね、遂ニ九月一日八朔参会ニ於て、本祭執行並ニ引継行事の件、満場一致を以て議決致されました。

顧みますれば昭和三十年九月東関戸区より年番の引継ぎを了し、大過なく今日ニ至りました事ハ偏ニ総町各位の絶大なる御協力、御支援の賜と深く感謝いたします。

扱て愈々本祭確定の運びニ至りましたので、遅ればせ乍ら、着々諸準備ニかゝりました。総町挙げて幣台の手入れ、飾物の装備に夫れぞれ多忙を極めた事と考察致します。

次ニ川岸四町（註。上中下の川岸三町に横川岸を加えたものか）を通過

し、下新町ニ入る順列ハ古来のしきたりなれども、下川岸区を通ずる箇所ハ市の下水工事中ニて祭時迄ニハ終了する由なれども、之れが山車通過の場合を考慮し実地検査の結果、古来の伝統を残す意味ニ於て、各町の山車の順列ハ上新町の歴史を尊重し、西関戸区と同一の行動ニより西関戸区の次とし（従つてサンギリも同様）年番を拝辞し、

諏訪大神 を

飾して年番外参列の議を可決いたしました。

依つて幣台々帳の規定ニより町組西関戸区、始め先頭とし、後尾東関戸区とし、各町を練り歩く代りニ総町山車ハ下川岸通りニ整列（道路左側）上宿

御旅所前ニ集合是れを以て古式のおもかけを残し、引継行事を行ひ、年番、西関戸区幣台ハ最后末座ニつき、西関戸区地先ニて解散する事を決定いたしました。

又、下新町への山車引入れの件ニついてハ前述の通りなるを以て円満裡ニ解決いたしました。

更ニ上宿区は山車修理中なるを以て高張をもつて順列ニ参加の申出あり、之れを承認いたしました。

次ニ引継行事ハ十六日の中日ニ決行のことニ可決承認。

経費の件是れも可成節約し簡素に時代に適合せるお祭を執行せよとの意見ニ一同賛成いたしました。

いよいよ準備も各町着々と完了いたしましたので、引継行事当日の情景を記録致します。

先づ当日佐原市街の状況ハ小雨そは降る空模様でしたが、近郷ハ勿論、東京其他各地より佐原の山車を観んものと、馳せ集り無慮数万の人出であつた。

文部省ハ文化財関係の係官を出張せしめて、記録映画を撮り、幣台並ニ

市街の情景を録音し更ニ各大小の新聞記者団の来往、繁クカメラマンは四方に飛び、外人客のカメラマンも二、三、見え其の盛況ハ筆舌ニ尽し得ませんでした。

又市内の旅館も超満員、何れも二階より眺むる者も多く、各家庭ニ於ても皆夫れぞ泊り掛けの来客にて正ニ一大不夜城の盛観を、具現いたしました。

次ニ本祭々典の最も大切な行事即ち引継行事並ニ引別れ行事について其の前後の記述を致します。

一、幣台引廻しに就いての心得を各町ニ配布。

二、山車引廻し申合せ事項として、

○如何なる間違、有りと雖も双方譲り合ひ、円満解決を図ること。

○万一間違ひを生じたる節は年番前後、三町の取扱ひを、最も公平なるものとして、承認すること。

○山車交換の時、停止せる山車は挺子を揚げ置くこと。

○算盤引、其の他、小判廻し、の、字廻し等是他町の妨害にならざる限り行ふも妨げなしと雖も附近の状況等危険防止ニ万全を期すること。

三、本祭執行々事規約を作り統制あり且、大佐原の祭典ニ恥ぢざる事を期す。

四、本祭行事予定、時刻表の作製、周知を期す。

五、山車の順列、位置、時刻等違算なきを期し、地図を印刷、各町ニ配布す。

年番西関戸先頭、

上新町、北横宿、下新町、

新上<sup>(川)</sup>岸、中宿町、南横宿、  
新橋本、下分町、仲川岸、  
下川岸、上仲宿、下宿町、  
後尾東関戸の計十四台、  
上宿区高張を以て参かす

以上の順列ニ依り、当日午後一時より行動開始、午後三時三十分迄ニ、総町山車、上宿、御旅所前ニ集合いたしました。即ち各町幣台ハ仲川岸区、下川岸区地先、大通り標定位置ニ整列し是れを以て番組完了いたしました。先頭、西関戸、サンギリ打始め、全打止めを行ひ、各幣台ハ直ちニ進発、予定より稍々早く御旅所前大通り(上宿)ニ参着いたしました。夫れより休憩ニ入り此間夕食を済ませ、五、四〇(註。五時四〇分)、年番引継式、執行各区長、役員、御旅所前ニ集合、折しも小雨降りしきる中ニ、御旅所前ニハテントを張られたるも一般役員諸氏ハ雨ニぬれつ、いと静肅裡ニ整然たる光景を呈しました。

○御仮宮前ニ一同着席、神官、氏子会長、外氏子会幹部役員、神輿年番長、年番前後、を始め総町役員全部参列、神輿年番長司会の下ニ

修<sup>(文)</sup>拔、

献饌、

宮司祝詞奏上、

氏子会長折願文奏上、

宮司拝礼、

氏子会長拝礼、参列者一同拝礼、

神盃の儀

○次ニ東関戸前年番司会の下ニ

引継行事ニ移り

一、氏子会長挨拶、

二、正年番、西関戸区長

挨拶文奏上

三、受年番、北横宿区長

挨拶文奏上

四、手メの儀

五、宮司拝礼、参列者一同拝礼、

以上を以て引継行事ハ滞りなく終了いたしました。

○次ニ引別れ行事に移り、サンギリ打始め

年番西関戸 次ハ上新町 次ハ受年番、北横宿、全打止め、幣台進発、各幣台、東関戸区、西関戸区地先、標定位置ニ到着、此の間鳴り物を停止し一絲乱れず、其の光景ハ感ニ打たれ、誠ニ古式のおもかげを残しました。夫れより年番下座ニつき、年番前後三町ハ、各町山車に対し廻礼の挨拶をいたしました。

○年番ハ有難とう御座いました。

受年番ハどうぞよろしく。

と実ニ礼儀正しきものでした。

更ニ又サンギリ打始め、

全打止め、

幣台各進発、

年番幣台、西関戸地先ニ入り、此処ニ古典的な引継、並ニ引別れ行事ハ厳肅の中ニ目出度、完了。

○式典終了後の感想並ニ謝辞

水郷の詩人、本宮翁ハ利根之風月筑波烟平遠江山景色鮮と歌ひ、蘇翁ハ又、水郷之美冠天下と賞賛せられております。此の天恵の地ニ生れたる佐原人ニは如何ニ幸福であるか忘れてハなりません。昔より佐原ハ米の集散地で東都の台所ニ重要な役割を務めて来て居ります。更ニ偉人忠敬を出し測量の泰斗として、世界的存在を誇示し、歌人、魚

彦、並ニ清宮秀堅を生み、しかも関東大平野の中ニ悠々たる利根の流れを朝夕に眺め、

武神香取の宮の鎮座あり、今や文化の進展ニ伴い大佐原市の現出を見るニ至りました。此の水郷ニ一異彩を放つ、「佐原山車」之ニ伴つて佐原はやし、が無形文化財ニ指定せられております。

此の郷土の誇りを堅持し益々旺んならしめ、佐原と言へバ山車を以て代表さる、様、切々希望いたして止みません。

要之ニかゝる立派な堂々たる祭典の行はれたるは一に

諏訪大神の御神徳

のいたす処と深く感銘いたします。

尚総町皆様が事前ニ周到なる準備と古来よりの伝統を保持し、協力一致年番を御援助下された結実であると謹しみて謝意を表し、記録を終ります。

次ニ総町区長各位の御姓名を誌し、厚く御礼を申し上げます。

以上

総町区長芳名

西関戸区	驚見 辰雄
上新町区	平山 猪之助
北横宿区 第一	保科 栄作
第二	富沢 右一
下新町区	菅井与左衛門
新上岸区	永沢 見七
中宿区	小堤 護
南横宿区	小倉 三郎
新橋本区	武雄 四郎
下分区	玉沢 嘉一
仲川岸区	鈴木 光圀
下川岸区	大竹 豊亮

上宿区	計 十四区 但し上宿区ハ高張を以て参加	東関戸区	下宿区	上中宿区
高木 保		松川 福太郎	斎藤 宗嗣	武田 輝雄

昭和三十四年十月吉日

年番西関戸区長

鷺見 辰雄

飯島 源之助

菅谷 由蔵

笹本 耕三

山下 広吉

山崎 清

発知 峯雄

前年番東関戸区長

松川 福太郎

石川 新一

香取 芳郎

坂本 勢一

新里 與一

小長谷待吾郎

後年番北横宿区長

保科 栄作

富沢 右一

荒井 勇

高橋 仙之助

佐藤 要治

立会下新町区長

菅井与左衛門

沼田 栄一

---

## **The Separating Process of the Portable Shrine Parade and the Float Parade in an Urban Festival during the Modern Period: on the Case of the Suwa-Festival in Shinjuku of Sawara City, Chiba**

UNO Kouiti

This paper traces in detail the separating process of the portable shrine parade and the float parade of the Suwa Festival held in the Shinjuku district of Sawara City in Chiba Prefecture. This is done largely through describing the changes in the methods of operation of the festival and the changes in the content of the individual rituals that made up the festival.

First, the paper sets out the method of operation and the content of rituals of the Suwa Festival during the Tenpo period (1830–1843). It confirms that for the return parade of the portable shrine in the Suwa Festival at that time a procession comprising mainly of floats from the various machi in Shinjuku led the parade, so that together the two formed a single continuous festival procession. It also concludes that direction of the festival was carried out exclusively every year by a machi called Sekido-chou.

This is followed by an examination of a record called the “Heidai Kisoku Narabini Wariai Chou” that was passed around the machi in Shinjuku to write in turns. (This record is cited at the end of this paper as an appendix.) According to this record, during early Meiji period Sekido-chou’s monopoly over direction of the festival ended, and a system was established whereby each of the machi took turns annually to direct the portable shrine parade and the float parade. Because at around that time the bulk of the procession comprised of floats, the procession had come to specialize in floats, and it became so large that the parade came to take too much time, which made it difficult to lead the portable shrine parade.

As a result, various efforts and innovations were made to fulfill the contradictory goals of finishing the float parade within the festival period while trying to lead the portable shrine parade in each of the machi as with as much discipline as possible. Most of the changes that occurred in the Suwa Festival during the Modern period arose as a result of these efforts and innovations. Ultimately, in the festival held in 1950 the earlier float parade had been scrapped so that the floats from each machi had been completely separated from the portable shrine parade. Rather than being an urban characteristic or a characteristic of the festival’s operators, it was the various factors that gave birth to the festival itself that separated the float parade from the portable shrine parade.